



諫早家伝来「紺糸威具足」(本館所蔵)

昭和17年 野口彌太郎作「夏の琵琶湖」(本館所蔵)



諫早市美術・歴史館

開館10周年 記念誌

ISAHAYA MUSEUM OF ART AND HISTORY 10th ANNIVERSARY

& 研究紀要

諫早市美術・歴史館外観



平成26年3月1日開館セレモニー



平成27年／諫早市制施行(合併)10周年
諫早市美術・歴史館開館1周年記念企画展



令和4年／西九州新幹線開業記念企画展



令和5年度／諫早市美術・歴史館開館10周年記念企画展



西九州新幹線開業1周年記念

教育普及(講座、史跡見学、講演会等)



目 次

I あいさつ		
諫早市長	大久保 潔重	1
諫早市美術・歴史館 館長	堀 輝広	2
II 祝 辞		
諫早市議会 議長	南条 博 様	3
諫早市芸術文化連盟 会長	山下 博之 様	4
III 美術・歴史館の概要		
1 設置目的(条例より)		5
2 建設の経緯		5
3 基本理念と基本的な性格		5
4 施設概要及び館内施設図(配置)		6
5 組織及び職員体制		7
IV 10年の歩み		
1 開館セレモニー		8
2 企画展		9
3 教育普及		21
(1)館長・美術・歴史(含:史跡見学)・民俗の各講座及びその他講演会等		
(2)学校の学習支援、出前講座、博物館実習等受入		26
4 主な貸館の実績		31
5 来館者数・企画展入場者数・常設展入場者数		32
V 広報活動		33
VI 歴代職員		37
VII 収蔵資料(点数)		38
VIII 図録紹介		39
(付録) 諫早市美術・歴史館条例		41



開館10周年を迎えて

諫早市長 大久保 潔重

諫早市美術・歴史館は、以前あった郷土館に美術館機能を加え、諫早市初の本格的ミュージアムとして平成26年3月1日に開館し、今年度10周年を迎えました。

開館にあたりましては、敷地や収蔵の品々について格段のご配慮をいただきました諫早家の皆様、美術歴史館建設基金にご寄付いただきました諫早市美術協会をはじめとする多くの団体や個人の皆様、基本方針の策定にご尽力いただきました整備検討懇話会の皆様など、沢山の方々にお力添えをいただきました。開館後につきましても、企画展の開催や資料収集等、美術・歴史館の運営に、多くの関係者の皆様にご協力いただきました。ここに、改めまして心から感謝の意を表します。

振り返りますとこの10年は、諫早市としても大きな変革の期間でありました。西九州新幹線開業とそれに伴う諫早駅周辺の再開発、南諫早産業団地をはじめとする産業団地の造成・操業、スポーツパークいさはやのオープン、島原道路の一部開通など、大型事業がいくつも進み、まちの姿に変化が見えました。

そうした中で、文化(芸術)行政も、教育分野から地域活性化及び経済活性化の分野へと変更になりました。美術・歴史館として、「市の貴重な歴史文化遺産の展示及び保存継承を行う。市民や来訪者が郷土『諫早』を理解し、親しみ、愛着を育てる場とする。長崎県美術展覧会をはじめ市民作品の発表の場として文化芸術活動の振興を図る。」ことはもちろん、文化芸術の振興による交流人口の拡大や地域活性化の原動力に繋がる文化芸術活動という面をより意識して推進していくことが求められています。

これまで美術・歴史館では、「諫早家ゆかりの品々展」「野口彌太郎大回顧展」「廣津雲仙作品展」「諫早大災害展」「諫早市友好交流都市出雲市・津山市三市交流展」など様々な企画展等を開催してまいりました。また、「長崎県美術展覧会諫早会場」「諫早市美術展覧会」「市立小中美術展・科学展」など、市民の皆様の発表の場としてもご利用いただいております。諫早市内はもとより、市外、県外から27万8千人(令和5年12月末現在)を超える方々にご来館いただき、大変嬉しく思っております。

これからも、市民の皆様と手を携えて、諫早市の芸術文化の拠点施設として、その果たすべき役割をしっかりと推進し、美術・歴史館がさらに充実・発展するように、郷土諫早の近未来像「来てよし、住んでよし、育ててよし!あなたのまち・諫早!!」の実現に向け、取り組んでまいります。



開館10周年を迎えて

諫早市美術・歴史館 館長 堀 輝広

諫早市美術・歴史館は、諫早家からのご寄贈された敷地にあった旧諫早幼稚園跡地に建設され、周りには諫早家御書院や高城回廊、高城、高城神社、天祐寺など、諫早の文化が感じられるとともに、自然豊かな場所に平成26年(2014)3月1日に開館し、この度開館10周年を迎えました。

当館は、諫早市郷土館の収蔵資料を引き継ぐとともに、諫早家や諫早家家臣の歴史的資料、諫早ゆかりの洋画家野口彌太郎の作品などの絵画資料や焼物、そして市民の皆様からの寄贈品・寄託品など現在約37,000点を収蔵しています。

この10年間で73回の企画展を開催し、その内諫早の歴史関係(諫早大水害展を含む)が31回、美術関係は26回、民俗関係は5回、その他11回となっています。企画展の中には、長崎県美術館のご協力による「M・マリーニとM・シャガール版画展」、本市出身の漫画家「草場道輝原画展」、「諫早市友好交流都市出雲市・津山市三市交流展(三市の歴史資料展示)」、「ウルトラ空想特撮ワールド～ウルトラマンと夢見る未来～」など諫早では触れる機会が難しい資料を鑑賞する機会を創出することもできました。また、企画展の外、各種講座(館長講座、歴史講座、民俗講座、史跡見学)や企画展に関連した講演会、更には、学校の教育活動にかかる支援や大学生の博物館実習、教職員社会体験研修、中学生の職場体験学習の受け入れなど教育普及に関しても取り組んでおります。

市民の当館利用としては、諫早市美術展覧会や諫早いけばな連盟花展、諫早市老人クラブ連合会生きがい作品展、書の各団体による書道展、諫早市小中美術展・科学展等々、市内芸術・文化団体や学校関係による発表の場やいけばなや茶道などの研修会場として、さらには長崎県美術展覧会諫早会場としてもご活用いただいております。

このように、市民の皆様のご期待に応え、諫早市の芸術・文化の発信拠点として、また生涯教育、生涯学習の場として、その役割を果たそうと努めてまいりました。

さて、諫早市において、平成21年に「(仮称)歴史文化館整備検討懇話会」が設置され、アドバイザーとして携われた本市出身の脚本家市川森一氏が、翌年「(仮称)歴史文化館建設基本構想」について市行政担当者に対し次のように述べておられます。

「美術館の要素を入れ、美術博物館という二重の機能を持つことで多くの人に活用してもらおう。諫早の場合には『諫早美術博物館』とすべきである。美術館機能を持っていれば、あらゆる名画が企画博物館と同じように全国をまわっているものがあり、そういうものを胸を張って迎えることができる場所を作る。文化振興のために最も整備しなければならない施設の一つである。より多くの人がかく来てくれるというところに知恵を絞らなければならない。頼りは企画物。回って来るものを、わざわざ市外・県外に行かなくても諫早でみられるという施設ができればよい。」(一部抜粋)

今後も、この市川森一氏が述べられた内容も踏まえ、諫早市の文化の振興と交流人口拡大、生涯教育・生涯学習に資する企画展や講座・講演会などに取り組んでまいります。皆様のご支援をよろしく願いいたします。



祝辞

諫早市美術・歴史館10周年を祝して

諫早市議会議員 南条 博

諫早市美術・歴史館が開館10周年の記念すべき節目を迎えられましたことを、市議会を代表いたしまして、心より御祝い申し上げます。

郷土を愛する心を育む場として、また、諫早の歴史を学び後世に継承していく場として、市民の皆様からの待望久しくして、平成26年3月1日に開館した諫早市美術・歴史館であります。開館記念特別企画展として開催されました「諫早家ゆかりの品々展」以降も、今日に至るまで10年にわたり、市内外からの多くの方々に利用して頂いておりますのは、ひとえに堀館長様をはじめ職員の皆様と、日ごろより諫早市美術・歴史館運営に携わられております関係各位の御尽力によるものであり、心から敬意と感謝を申し上げる次第であります。

諫早市は、3つの海に囲まれた地形と多良山系や広大な干拓地、それから各地域にある里山は自然環境そのものであります。白木峰高原、山茶花高原、しゃくなげ高原など四季を通して彩りを魅せる観光資源が数多に存在し、それら全てが諫早らしさを物語っております。また、古くから、人、物、情報の交流の舞台となってきた歴史の道、長崎街道や多良海道が通っており、400年を超える月日を経た今もなお、地域の方々によって守り続けられている歴史があります。2022年の西九州新幹線開業の年には、当館が主催しシュガーロード(長崎街道)を含めた「街道」をテーマに、歴史講座や史跡巡りを開催されたことが記憶に新しく、諫早は今も昔も多くの人や物などが往来し、日本の政治・経済・文化の発展や交流に大きく貢献してきた要衝の地域であることを改めて認識させられました。

諫早市美術・歴史館が開館してから、本市の芸術文化を育む環境はより一層充実し、更に分散展示されていた市全体の各種資料が一カ所で網羅できる体系的な展示・学習の場として、多くの方々に利用されています。本市の芸術・文化に触れる機会が大いに増えるとともに、芸術や文化、歴史の情報発信の拠点施設として、その機能が遺憾なく発揮されていることをとても嬉しく思います。

また、諫早市美術・歴史館では、年間を通じて常設展や企画展など数多くの事業が実施されておりますが、このように、市民の方々が芸術や文化と触れ合う機会を提供する当館の役割は非常に大きなものであり、今後とも各種団体との連携のもと、益々の文化芸術活動の推進に御尽力を賜りますよう、御期待申し上げます。

私たち市議会といたしましても、本市の豊かな自然と特色ある文化、歴史を大切にしながら、芸術文化によって豊かな心を育むまちづくりに向け、更に取り組んでまいります。

結びに、諫早市美術・歴史館の今後一層の御発展と、堀館長様をはじめ職員の皆様、関係者皆様の今後益々の御健勝、御多幸を心から祈念申し上げ、「10周年記念誌」発行の御祝いの言葉といたします。



祝辞 諫早市美術・歴史館10周年に想う

諫早市芸術文化連盟会長 山下 博之

諫早市美術・歴史館開館10周年おめでとうございます。

今から60年程前、諫早市美術展覧会は、美術館がない中で現在の諫早市役所あたりにあった諫早小学校の講堂で開催していました。その後、今の文化会館ができ会場を移しましたが、残念ながら施設の環境としては課題があり、会員は「本格的な美術展開催が出来るような美術館を建設してほしい。」との願いから、少しでも建設費に役立てたいと数年にわたりチャリティ展を催すなど、強力に市側に訴えてきました。この取組は大きな反響を呼び、多くの市民に賛同して貰いました。建設にあたり我々諫早市芸術文化連盟も数回の建設委員会に出席し意見を申しました。最終的には、全て希望通りにいかなかったまでも、念願であった「美術を鑑賞する施設」である美術・歴史館が建設されました。完工した喜びに諫早市美術協会の会長は、早速書の個展を開催して喜びをあらわしたものです。また、立地も背中を押しているように感じます。公園の近くにあり高齢者の皆様方の散歩コースともなっており「いろんな芸術作を見るのが楽しみ。」という声をお聞きしたこともあります。

美術・歴史館の完成後は、諫早市美術展覧会はもとより、長崎・佐世保・諫早の三会場を本展とする長崎県美術展覧会も開催されています。諫早会場は諫早市や県央に関係ある人々の作品を展示します。展示作業は主に出品者が行うのですが、その作業を少しでも柔らげようと市の御計らいで、職員の皆様にも御協力いただいております。我々の熱意に応えていただき、毎回感謝しております。また、諫早市芸術文化連盟では、郷土出身偉人の功績を称え、年に5回の追悼忌を開催しています。特に、野呂邦暢の菖蒲忌、野口彌太郎のミモザ忌は、式典会場確保に難儀してきましたが、美術・歴史館開館後はこの館で、遺徳を偲ぶゆったりとした祭典が開催できるようになりました。

今年度は開館10周年を迎えられ記念事業を開催されておられます。「諫早の美術家展」は市民に驚きを与えたようで、「これ程までに市内に美術愛好者がいるとは思わなかった。」との声を多く聞きました。郷土の美術分野の幅広さと深さを伝える良いきっかけを作っていただいたと思っています。また、館独自の企画に我々連盟も協力することが年々増えています。諫早市美術協会もゴールデンウィーク中の「美歴こどもWEEK」の「大筆を持って揮毫にチャレンジ」に協力しました。当初は子供が興味を示すのかと不安もありましたが、子供達のパワーのすごさにびっくりしたものです。「空想特撮ワールド～ウルトラマンと夢見る未来～」では、幼児から大人まで夢中になって参観していました。こうした様子に企画力の大切さを感じています。開館10周年記念事業の最後に「開館10周年記念野口彌太郎展」が開催されます。今回は、これまでに公開されていない作品も多く展示されると伺っており、新たな野口彌太郎の作品との出会いを楽しみにしています。

今後も、諫早市美術・歴史館が、デジタル化が進む中であっても、多くの市民が来館される本市の芸術・文化の発信拠点としての存在であり続けることを期待いたします。

Ⅲ 美術・歴史館の概要

1 設置目的

本市にゆかりのある美術・歴史、民俗等に関する資料(以下「資料」という。)を収集し、保管し、展示し、及び調査研究して市民等の利用に供するとともに、市民に美術作品及び歴史、民俗等に関する調査研究等の成果の発表の機会を提供することにより、市民の文化の発展に寄与し、併せて地域の振興に資するため、諫早市美術・歴史館を設置する。(諫早市美術・歴史館条例第1条)

2 建設の経緯

1981年(昭和56年)頃から「市民文化向上のため、また県展をはじめ諸展が開催できる美術館を諫早に」という機運が、文化諸団体をはじめ市民の中で高まる。諫早市美術協会によるチャリティー展などでの美術館建設基金(諫早市も予算化し積み立てを始める)への寄付活動が行われる。

2008年(平成20年)、諫早市は平成23年度の完成を目標に美術館建設の計画を進めることを公表する。翌年、「(仮称)歴史文化館整備検討懇話会」が設置され、美術館や博物館に係る専門家による館の在り方などについて協議が始まる。そのアドバイザーとして諫早出身の脚本家市川森一氏も関わられる。

上記「懇話会」での協議を踏まえ、館の基本理念や設計・建設が進められ、2014年(平成26年)3月1日諫早の美術や歴史に関する資料の保存・展示などを行う「諫早市美術・歴史館」が誕生する。

3 基本理念と基本的な性格

(1) 基本理念

美術・歴史館は、諫早全体の歴史や文化、自然環境などを一覽できるとともに貴重な歴史文化遺産の保存継承を行うことにより、市民や来訪者が郷土「諫早」を理解し、親しみ、愛着を育てる場とする。また、周辺に点在する様々な歴史的文化的な遺産や豊かな自然、図書館などの公共施設と連携し、市全体をひとつの「エコミュージアム」ととらえ、これを総合的に結びつける交流拠点とする。さらには、県展をはじめ市民作品の発表の場として文化芸術活動の振興を図ることなどにより、諫早公園を中心に歴史と文化の薫りがするまちを形成し、新たな諫早の魅力づくりに寄与する。

(2) 基本的な性格

学び・発見する施設

日本や世界の歴史と諫早の関わり、諫早特有の歴史や文化芸術、諫早家や郷土偉人の業績などを学び、諫早の魅力を再発見する施設とする。また、来館者の興味や関心、学習への意欲を引き出す場とするとともに、郷土作家等の作品発表や美術展など新たな発見を生み出す施設とする。

参加・体験する施設

市民の積極的な参加と協力のもと、体験学習や現地学習、ワークショップや講演会、創作教室、歴史文化ウォークや史跡散策、企画展などを開催し、「見る」だけの施設ではなく「参加」し「体験」することを楽しめる施設とする。

継承する施設

歴史・文化・芸術に関する収蔵資料や取組をさらに充実させる。また、諫早の歴史文化資料を適切に保存修理することにより、貴重な資料を未来へ継承する。さらに郷土史家や芸術家、愛好者などの研究・発表・交流の場を提供することにより、貴重な知識と豊富な経験を次世代に伝える施設とする。

憩い交流する施設

諫早公園や眼鏡橋、御書院や高城回廊、周辺の史跡など一体として、諫早の歴史と文化を体感できる施設とする。また、市民はもとより来訪者や観光客が憩い、「諫早」を楽しみ、交流する施設とする。

連携・発信する施設

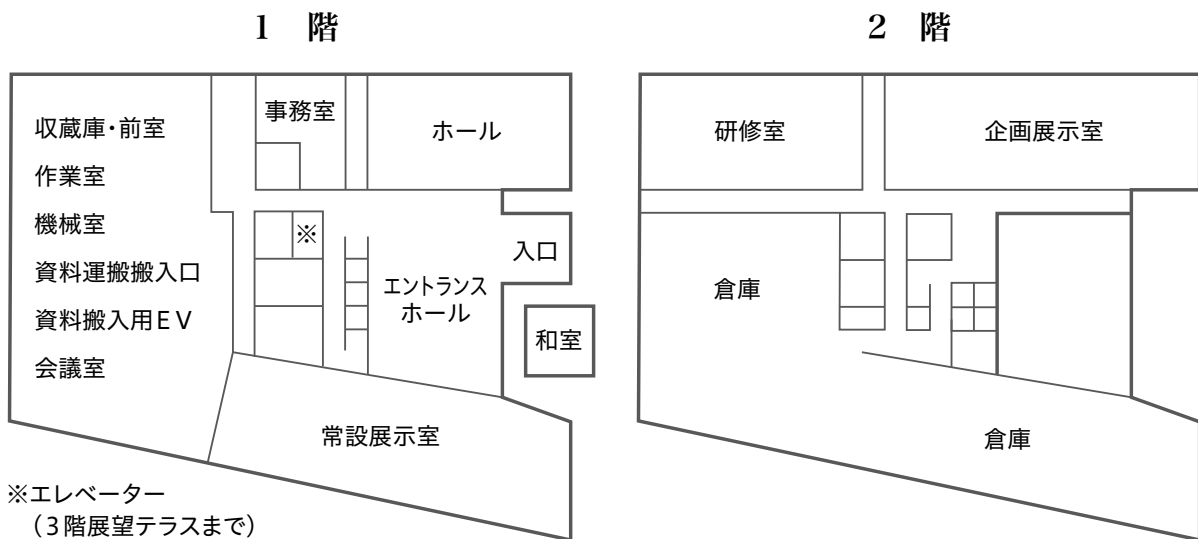
周辺の点在する歴史文化遺産や豊かな自然、市立図書館や公民館、郷土資料コーナーなどの公共施設、商店街などをサテライト(衛星)施設ととらえ、連携することにより、本物と出会う感動を体感できる施設とする。また、市外の図書館や郷土資料館、博物館、美術館などと連携し、諫早の歴史・文化を幅広く調査・研究、発掘し、広く情報発信する施設とする。

4 施設の概要及び館内施設図

(1) 施設の概要

- ① 敷地 3,747.00㎡
- ② 延床面積 3,292.26㎡ (駐車場:乗用車30台(無料))
- ③ 構造 鉄骨造3階(2階+展望テラス)
- ④ 収蔵資料 約37,000点

(2) 館内施設図



1階 エントランスホール



受付・展示・DVD映像

ホール(貸室可・有料)



文化関係行事(160名収容) 各種企画展示

研修室和室(貸室可・有料)



畳敷き、茶道可

常設展示室(有料)



諫早の歴史年表・諫早干拓等の変遷



考古・歴史資料の展示



美術資料の展示

2階 企画展示室(貸室可・有料)



昔の民具・農具の展示



三室(出入口別)に分割可能



三室(出入口別)に分割可
作品展示利用可

3階 展望テラス



御書院を望む



市体育館・高城頂上を望む

5 組織及び職員体制(令和5年度現在)

(1) 組織

市長部局 ⇒ 経済交流部 ⇒ 文化振興課 ⇒ 諫早市美術・歴史館

(2) 職員体制(うち学芸員有資格者4名)

市職員 3名(副館長、主任、事務職員)

会計年度職員 8名(館長、主任専門員2名、専門員2名、受付案内員3名)

(3) ボランティア歴史ガイド

館活動の活性化や来館者サービスの向上を図るとともに、館を生涯学習の場として活用いただくため、令和4年度上半期に「ボランティア歴史ガイド養成講座」を6回実施し、現在24名が登録している。常設展示室での説明、郷土学習・出前授業、館のイベントや史跡巡りの補助として活躍されている。

常設展示室の資料展示替えを行った際には、展示資料に関する学習会や研修会を随時実施している。

IV 10年の歩み

1 開館セレモニー



【次第】

- 1 主催者挨拶 宮本明雄市長
- 2 来賓祝辞

諫早家21代当主	諫早 道子様	
市議会議長	村川 喜信様	
諫早市芸術文化連盟会長	森 長之様	
- 3 来賓紹介(上記3名の御来賓外)

市川森一ご令室	市川美保子様	
長崎県議会議員	八江 利春様	
同	橋村松太郎様	
同	山口 初實様	
同	中村 和弥様	
- 4 テープカット

宮本明雄市長(中央)		
諫早道子様(市長左隣)		
市川美保子様(市長右隣)		
村川喜信様(左端)		
森 長之様(右端)		
- 5 寄贈品紹介

株式会社徳永組から時計(エントランス設置)		
市長及び同社社長による除幕		



2 企画展

年度	企画展名・関連イベント	期間・入場者数	ポスター等	備考
25～26	開館記念特別企画 諫早家ゆかりの品々展 ■関連イベント ○開会式(開館記念式典) ○抹茶ふるまい	自 3月1日 至 4月29日 8,668人		開館記念。諫早家の400年にわたる事蹟顕彰と寄贈資料の展示 ※甲冑・絵図・領主肖像画・調度品等 点数105点
	諫早の記憶 昭和32年7月25日 大水害の跡	自 7月23日 至 8月11日 950人		諫早大水害の継承と防災意識の啓発 ※水害時写真、手記、諫早市の動きを展示
	長崎国体展	自 10月12日 至 10月22日 624人		第69回国民体育大会「ながさきがんばらんば国体」開催記念
	諫早市美術・歴史館所蔵陶磁器展 諫早・長崎焼物の美展 ■関連イベント ○講演会 ・「長崎県いさはやの焼物」	自 10月13日 至 11月4日 990人		陶磁器とその歴史の展示 ※市指定文化財肥前長崎の焼物(陶磁器272点、写真・年表25点)
	諫早懐かしの風景展	自 10月20日 至 10月31日 670人		国体期間中に合わせ諫早の歴史展示 ※古写真パネル48点
	草野源一郎寄贈作品展	自 12月10日 至 12月27日 424人		草野源一郎氏寄贈品の展示 ※焼物・絵画・硯68点、他夫妻出版の歌集など
	明治8年調 諫早の寺社絵図展	自 1月10日 至 1月26日 954人		明治8年県調査記録の市内寺社絵図と現在を比較展示 ※神社・寺院敷地絵図パネル110点







年度	企画展名・関連イベント	期間・入場者数	ポスター等	備考
26～27	諫早市市制施行(合併)10周年、諫早市美術・歴史館開館1周年記念 ふるさと諫早を愛した画家 近代絵画の巨匠 野口彌太郎大回顧展 ■関連イベント ○開会式・内覧会	自 3月 1日 至 5月 6日 6,124人		1市5町合併10周年、開館1周年記念。本市ゆかりの洋画家野口彌太郎作品の展示。 ※油彩・水彩・デッサン計87点と関連資料
	諫早に見る絵葉書展 —大正・昭和—	自 5月27日 至 6月27日 1,246人		明治・大正期の絵葉書の展示 ※額縁写真51点
	諫早家家臣寄贈・寄託資料展 諫早家を支えた家臣たち ■関連イベント ○開会式	自 6月25日 至 7月26日 1,240人		旧諫早家家臣からの寄贈・寄託品を展示 ※エーセルテレカラフ、具足、刀剣、什物、古文書など150点
	諫早大水害の記憶 —昭和32年7月25日—	自 7月 1日 至 7月26日 1,398人		諫早大水害の継承と防災意識の啓発 ※写真など水害関連資料156点と当時の映像放映
	太平洋戦争と諫早 ～その時、諫早はどのような状況だったか～	自 8月 5日 至 8月16日 513人		戦後70年。戦中・戦後の遺構等の資料から昭和16年から25年頃を振り返る展示 ※軍服、戦争関係写真パネル等195点
	郷土が生んだ現代書の巨匠 廣津雲仙作品展 ■関連イベント ○開会式 ○書道教室 ○記念講演	自 9月19日 至 10月11日 1,485人		廣津雲仙を顕彰する「尾花忌」の第10回を記念し展示 ※作品36件41点。書道具等
	林田重正展	自 12月 2日 至 1月11日 862人		本市出身、中央画壇でも活躍した洋画家林田重正の寄贈作品を展示 ※油彩・水彩・デッサン46点と関連資料







年 度	企画展名・関連イベント	期間・入場者数	ポスター等	備 考
27	諫早の絵はがき・古写真展	自 12月27日 至 1月24日 1,035人		諫早の絵葉書や古写真の展示 ※額縁写真48点
	新諫早紀行写真展 『樂』 諫早特集 ■関連イベント ○写真教室	自 2月24日 至 3月17日 1,114人		季刊紙「樂」諫早特集号出版記念写真展 ※諫早の風景写真 25点
	【新収蔵】野崎嶽南作品展 ■関連イベント ○開会式	自 3月 5日 至 3月28日 750人		本市書道家野崎嶽南氏の遺作展 ※寄贈作品、硯、百選墨、筆、雅印等73点
28	野口彌太郎展 ～あこがれのヨーロッパ～	自 4月13日 至 5月16日 560人		野口彌太郎の作品・写真の展示 ※油絵・写真21点と野口彌太郎物語、本人の言・芸術論などの解説パネル等
	諫早今昔写真展	自 4月20日 至 5月30日 737人		諫早の古写真と現在の写真の比較展示 ※パネル写真45点
	諫早の民俗 ～きもの・かぶりもの・はきもの展～ ■関連イベント ○講座 ・「—諫早の民俗—きもの・かぶりもの・はきもの」	自 6月29日 至 7月31日 1,069人		江戸時代末から昭和30年代までのむかしの衣服や履物を展示
	諫早大水害の記憶展	自 7月 1日 至 7月27日 1,197人		諫早大水害の継承と防災意識の啓発 ※写真など水害関連資料156点と当時の映像放映
	映像で見る諫早の戦争遺跡と忠魂碑	自 7月29日 至 8月 8日 153人		市内の戦争遺跡・忠魂碑等の写真をスライドで放映。

年 度	企画展名・関連イベント	期間・入場者数	ポスター等	備 考
28	ポスターで見る「のんのご諫早まつり」のあゆみ展	自 9月 3日 至 9月25日 438人		のんのご諫早まつりのポスター や使用された諸道具の展示 50点
	天主堂のある風景 野口典男作品展	自 9月22日 至 10月18日 1,185人		本市出身野口典男の寄贈作品 展示 ※28点
	諫早ゆかりの日本画家展 ■関連イベント ○講演会 ・「近代長崎の日本画家たち」	自 12月 1日 至 1月 8日 1,135人		幕末から大正期と活躍した諫 早出身の日本画家八十島又橋 などが描いた屏風・襖絵・掛軸 等展示 ※所蔵作品29点、天井絵パネ ル3点
	江戸、昭和の諫早を俯瞰する絵図・地 図空中写真展 ■関連イベント ○古地図で歩く諫早 (館付近ウォーキング) ○講演会 ・「九州島の中の眼鏡橋の位置づけ」	自 2月25日 至 3月27日 1,412人		諫早図書館蔵絵図(市指定文 化財)や明治から昭和の地図、 空中写真の展示 ※絵図85点、絵図パネル・地図 67点
29	古写真展	自 4月 3日 至 5月26日 687人		昭和の始めごろと現在の写真 を比較展示 ※48点
	新収蔵品展 ～2014年から2016年～	自 4月19日 至 5月22日 661人		前期・後期に分けて開催 開館以来の収蔵資料の展示 ※297点
	諫早大水害から60年 水害×現代美術+防災展 ■関連イベント ○折り鶴ワークショップ ○丸山常生アート・パフォーマンス ○ギャラリートーク	自 7月 1日 至 7月31日 1,783人		諫早大水害発生60年。旧5町 の水害史や昭和57年長崎大水 害資料の展示。現代美術とのコ ラボ。 ※現代アート作品、水害史年 表・資料、諫早日記、関連写真 パネル、長崎地方気象台資料 など

年 度	企画展名・関連イベント	期間・入場者数	ポスター等	備 考
29	世界の昆虫展 ムシムシ暑い夏を吹き飛ばせ ■関連イベント ○昆虫を描こう ○折り紙で昆虫を折ろう ○昆虫教室	自 8月 4日 至 8月20日 2,344人		昆虫標本の展示 ※森山図書館所蔵標本箱(天野コレクション、森山の昆虫標本)89箱
	絵はがき展①	自 9月15日 至 10月 9日 328人		絵はがきを展示 75点
	絵はがき展②	自 12月23日 至 1月21日 256人		80点
	諫早の風景展	自 12月23日 至 1月21日 537人		諫早の風景を描いた作品を、諫早の風景・一瀬春郷の風景・有明海の三つのテーマに分け展示 ※25点
	千々石ミゲル墓所推定地出土遺物展 ■関連イベント ○調査報告会①、②	自 1月24日 至 2月 5日 1,216人		墓所推定地発掘調査で出土した遺物が寄託されたことから初公開となる遺物の展示 ※墓所出土遺物・マリア観音など104点
	太田孝三展 太田作品の変遷をたどる	自 2月17日 至 3月18日 820人		諫早ゆかりの現代アート作家太田孝三作品の展示 ※23点
諫早家出張展 —長崎表・浦手台場展— ■関連イベント ○講演会 ・「幕末日本の危機」 ○バスツアー ・「浦手台場跡めぐり (経ヶ岳、牧嶋、東房)」	自 2月17日 至 4月15日 1,115人		長崎港警備を勤めた諫早家。幕末には浦手(橋湾沿岸)にも台場を設け警備を行った。どのような形で出張したのかや警備の様子を紹介 ※長崎歴史文化博物館所蔵絵図(複製パネル)16点、諫早図書館蔵絵図・文書15点、館所蔵火縄銃等50点。計81点	
30	諫早市の昭和 映画ちらし展	自 6月 1日 至 6月28日 864人		昭和41年から44年度まで諫早市内映画館で上映された映画ちらしの展示 ※200点

年 度	企画展名・関連イベント	期間・入場者数	ポスター等	備 考
30	諫早大水害展	自 7月1日 至 7月25日 1,019人		諫早大水害の継承と防災意識の啓発 ※写真パネル、関係資料など110点
	草場道輝原画展 ファンタジスタ、第九の怒涛、草場ワールド今ここに ■関連イベント ○草場道輝氏サイン会	自 7月14日 至 8月15日 1,936人		諫早出身の漫画家草場道輝氏の作品を連載時の漫画原稿を中心に展示 ※「ファンタジスタ」などの原画、カラーイラスト、ネーム等194点
	J1昇格記念 V・ファーレン長崎展	自 7月28日 至 8月24日 2,712人		J1の舞台上で活躍する選手の写真やユニフォーム、J1昇格時に掲げたシャールを展示
	戦中の諫早を描いた画家 大貝彌太郎展 ■関連イベント ○開幕式 ○講話 ・「大貝彌太郎作品について」 ○講話 ・「大貝彌太郎と無言館」 ○ギャラリートーク2回	自 12月22日 至 1月27日 1,397人		本市ゆかりの美術教師大貝彌太郎の作品展示 ※五島時代の水彩画、諫早時代の油絵・デッサンなど93点。
	肥前さが 幕末維新博覧会 明治維新150年記念事業【親類同格展】佐賀藩のすがた展 ■関連イベント ○講演会3回 (佐賀の講師招聘)	自 8月11日 至 1月14日 (13,271人)		明治維新から150年を機に佐賀県下で開催された「肥前さが幕末維新博覧会」に、親類同格であった諫早家の資料を提供
	タテ×ヨコ31cmの美術館 レコジャケットアート展	自 2月16日 至 3月10日 556人		ブーム再燃中の「レコード」のジャケットアートを展示 ※99点

年 度	企画展名・関連イベント	期間・入場者数	ポスター等	備 考
元	諫早大水害展 昭和32年と昭和57年の水害	自 7月17日 至 8月19日 1,060人		昭和32年諫早大水害と昭和57年長崎大水害における飯盛町の被害状況・復興への歩みに注目した展示 ※写真、パネル130点と映像資料
	—明治・大正・昭和— 集合写真展	自 12月25日 至 1月19日 489人		明治から昭和初期の写真撮影が特別だった頃の集合写真の展示137点
	書・日本画 —中村肇コレクション— ■関連イベント ○新春お琴コンサート ○講演会 ・「日本の書と画」	自 1月 4日 至 2月 2日 839人		中村肇氏寄贈品の展示 ※51点
	平成諫早年表展	自 2月19日 至 3月16日 430人		平成の諫早は市の姿が大きく変化した時代でもあった。「令和」への改元を機に、31年間の諫早での出来事を1年毎に展示 ※写真50点、資料34点、年表31点 計124点
	諫早眼鏡橋展 ■関連イベント ○講演会 ・「古文書で見る諫早眼鏡橋」 ・「東京の石橋と常盤橋の修復」 ・「伝統技術からみた城郭石垣と石橋について」 ○学芸員の展示解説(2回) ○諫早市体育館「眼鏡橋」緞帳公開 ○諫早図書館「眼鏡橋」展示	自 2月21日 至 3月30日 638人		眼鏡橋移設60年を記念した展示 ※絵図、古写真、絵葉書、図面、工事写真など128点
2	本の顔=ブックデザイン ブックデザイン展 ■関連イベント ○諫早図書館・たらみ図書館でのコーナー設置	自 6月27日 至 7月12日 242人		本の装丁を「デザイン」の視点でとらえる。諫早図書館との施設間連携の取組。 ※134点

年 度	企画展名・関連イベント	期間・入場者数	ポスター等	備 考
2	諫早大水害展	自 7月18日 至 8月 2日 470人		諫早大水害の継承と防災意識の啓発 ※写真・パネル・映像資料56点
	太平洋戦争後75年特別展 戦中・戦後の諫早 ■関連イベント ○平和へのメッセージ展示	自 8月 8日 至 8月17日 398人		太平洋戦争後75年の諫早の状況を周知。他課と共催し、小学生の平和へのメッセージも展示。 ※忠魂碑・慰霊碑写真、軍服や生活用品、軍事郵便、戦後の写真など271点
	生誕110周年記念 廣津雲仙展	自 9月19日 至 10月11日 527人		郷土を代表する書家「廣津雲仙」の生誕110周年を記念し作品を展示 ※作品等37点
	新指定文化財展 悠久の時を経て、今ここに	自 10月16日 至 10月25日 339人		令和元年度に市指定文化財や県指定文化財となった貴重な文化財を展示 ※39点
	切手の中のアート展	自 2月20日 至 3月14日 1,046人		特殊切手帳の展示 ※1973年～2000年に国内で発行された切手をテーマ別に展示。 400点
	M・マリーニと M・シャガール版画展	自 2月27日 至 3月28日 1,150人		世界的に著名な作家の作品の展示を望む声に応え、長崎県美術館所蔵の作品を借用して展示 ※マイク・シャガール「サーカス」全38点、マリノ・マリーニ「馬と騎士」全8点

年 度	企画展名・関連イベント	期間・入場者数	ポスター等	備 考
3	飯盛町江の浦 熊野神社 天井絵・絵馬展	自 4月17日 至 5月16日 480人		熊野神社が改築された明治39年頃の作を写真パネルで展示 ※天井絵168点、絵馬2点の写真パネル
	荒木幸史展 親友・野呂邦展との出会い ■関連イベント ○荒木幸史氏、野呂邦暢氏の等身大パネル展示 ○荒木幸史画集寄贈(市内小中高校、特別支援学校、学童クラブへ贈る)	自 5月30日 至 6月13日 994人		荒木作品と荒木氏と親友であった芥川賞作家野呂邦暢関連資料を同時に展示 ※荒木幸史ゾーン25点、野呂邦暢ゾーン13点、計38点
	諫早の水害展	自 7月 3日 至 8月 1日 1,028人		諫早大水害の継承と防災意識の啓発 ※写真パネル等58点
	追憶 一戦地からの手紙— ■関連イベント ○オープニングセレモニー	自 8月 7日 至 8月22日 541人		本市出身の陸軍軍医が家族へ宛てた戦地からの葉書・封などを展示 ※絵葉書、絵も描かれた封書など174点。
	諫早の遺跡コレクション —発掘調査の成果— ■関連イベント ○ギャラリートーク4回	自 9月26日 至 10月 9日 458人		本市の旧石器時代から江戸時代の遺跡や出土品の展示、発掘調査の歴史、調査の用具の展示 ※341点
	出張美術館 in 森山図書館	自 10月 2日 至 10月24日		館が所蔵する美術品を森山図書館展示ホールで展示 ※牧野宗則などの作品23点
	馬場孟臣展 ■関連イベント ○講演会 「馬場孟臣の時代」	自 11月13日 至 12月12日 1,113人		旧制諫早中学校出身である日本画家馬場孟臣の作品展示。 ※作品50点、スケッチ36点、スケッチ帳8冊

年 度	企画展名・関連イベント	期間・入場者数	ポスター等	備 考
4	葛飾北斎 富嶽三十六景展	自 4月22日 至 5月15日 3,099人	葛飾北斎 富嶽三十六景展 	世界的にも有名な日本画家「葛飾北斎」。北斎晩年の版画シリーズ「富嶽三十六景」を展示 ※江戸日本橋からの46点(複製版)及び北斎漫画2冊を展示
	美歴こどもWEEK ～知的好奇心を呼び覚ませ!非日常体験～ ■イベント内容 ○美術(芸術) ・揮毫にチャレンジ、映えるスマホ講座、私もピカソ!?コラージュ制作、いけばな体験 ○考古(弥生) ・オリジナル貫頭衣づくり、勾玉アクセやミニチュア土器づくり、火起こし体験・野外活動 ○歴史(江戸) ・歴史絵巻物づくり、端午の節句工作、春の茶会 ■関連イベント ○謎解き×美術・歴史館 ○うないさんを探せ ■協賛イベント ○第57回諫早市子ども大会 「続・忍者修行―潜入!諫早城の巻一」(主催:諫早市子ども会育成連合会)	自 5月 3日 至 5月 5日 1,190人		子供が体験を通して楽しみながら歴史や芸術等を学ぶイベントを市内の様々な団体と連携して実施
	諫早大水害展 ～諫早大水害殉難者への供養～	自 7月 2日 至 7月31日 1,099人	諫早大水害展 	水害写真、殉難者名簿、5か所の水害水位点などを紹介・表示 ※水害写真77点、殉難者名簿(写真パネル)37点など全151点。
	諫早の歴史 face展	自 8月 6日 至 8月27日 349人		フリーペーパー「face isahaya」で掲載されてきた「諫早歴史旅」より関連する資料やフェイス表紙撮影の裏側の映像を展示 ※全315点
	西九州新幹線開業記念 諫早市友好交流都市出雲市・津山市 「三市交流展」 ■関連イベント ○開会式(出雲・津山市関係者を含む)	自 11月 3日 至 12月18日 2,941人		友好交流都市出雲市・津山市・諫早市の歴史・文化を紹介する。西九州新幹線開業を契機に一層の観光振興、歴史・文化の交流を図る。

年 度	企画展名・関連イベント	期間・入場者数	ポスター等	備 考
4	<p>○新幹線開業コーナー (木製新幹線かもめ、弱虫ペダルスタンブラリー)</p> <p>○記念講演 ・「出雲王登場 ～背景と弥生・古墳時代の埋葬儀礼～」 ・「津山藩主森家と松平家」 ・「長崎警備と諫早家」</p> <p>○キッズワークショップ ・古代—勾玉づくり— ・江戸—からくり工作— ・現代～未来 —電子工作、科学実験—</p> <p>○ギャラリートーク</p>			※出雲市「古代から現代」74点、津山市「津山松平家」23点、諫早市「長崎警備」104点、観光物産コーナー設置
	<p>エル・グレコを描く 野田みち子展</p> <p>■関連イベント ○開会式 ○野田みち子氏による作品解説 ○講演会 ・「プラド美術館にみるスペインの精神—エル・グレコからゴヤまで—」</p>	自 2月18日 至 3月21日 729人		エル・グレコの作品などの模写絵を描く、世界的に評価の高い野田みち子氏の作品を展示 ※模写絵/油絵・素描17点、オリジナル作品/油絵・素描13点、計30点
5	<p>開館10周年記念 諫早の美術家展</p> <p>■関連イベント ○開会式・オカリナ演奏・作品解説 ○アート体験「ハンカチを化学藍で染めよう」 ○ギャラリートーク</p>	自 4月15日 至 5月14日 2,484人		諫早の美術家展実行委員会(市美術協会・市芸文連代表者)を組織し、諫早の美術家の作品を一堂に展示 ※洋画、書、日本画、写真、水墨画・南画、彫刻・工芸、デザイン、計155点
	<p>美歴こどもWEEK～知的好奇心を呼び覚ませ! 非日常体験～</p> <p>■イベント内容 ○美術(芸術) ・揮毫にチャレンジ、えのぐを使ったマーブリングでアート体験 ○考古(弥生) ・オリジナル貫頭衣づくり、勾玉アクセやミニチュア土器づくり、火起こし体験・野外活動 ○歴史(江戸) ・眼鏡橋クラフト、江戸のものづくり</p> <p>■関連イベント ○甲冑体験! 写真撮影会 ○謎解き×美術・歴史館 ○うないさんを探せ!</p>	自 5月 3日 至 5月 5日 867人		子供が体験を通して楽しみながら歴史や芸術等を学ぶイベント。市内の様々な団体と連携して実施 ※【甲冑体験】 諫早高城会より寄付された諫早由来の甲冑をもとに製作した子供向け「甲冑」を初公開。甲冑着用希望の子供が甲冑を着た記念撮影会を実施。

年度	企画展名・関連イベント	期間・入場者数	ポスター等	備考
5	諫早市美術・歴史館コレクション展 —中村家寄贈の屏風・牧野宗則版画展—	自 6月 3日 至 6月25日 201人		中村家からの新たな寄贈品と 牧野宗則版画作品(有明海シ リーズ)全点の展示
	諫早大水害展—66年前と現在— ■関連イベント ○講座 ・「諫早大水害写真について」 ○ギャラリートーク8回	自 7月 1日 至 7月25日 1,180人		諫早大水害の継承と防災意識 の啓発 (災害発生時の写真や映像と 現在の写真を比較) ※被災写真と現在比較写真 149点、諫早水害関連職など 160点
	開館10周年記念・西九州新幹線開 業1周年記念 ウルトラ空想特撮ワールド —ウルトラマンと夢見る未来— ■関連イベント ○特別コーナー ～ウルトラマンと諫早～ 市川森一 創造の世界 ○開会式(ウルトラマンAと写真撮 影) ○内覧会 ○トークショー ・高峰圭二氏と柴田美保子氏 ○ワークショップ ・いけばなで好きな世界を創ろう ・こねこね粘土で夢の生き物を作ろう ・君だけのカラータイマーを作ろう ○ヒーロー撮影会(3回) ・ウルトラマンプレーザー、ウルトラセ ブン、初代ウルトラマン ○ウルトラクイズラリー この夏諫早の謎を追え! (創成館高校生徒協力)	自 7月29日 至 9月24日 8,711人		空想特撮シリーズと銘打たれた 「ウルトラQ」「ウルトラマン」「ウ ルトラセブン」などの作品と共 に、諫早市美術・歴史館建設・ 開館に深く関わられた諫早市出 身の脚本家市川森一氏の功績 に関する資料展示
	開館10周年記念 歴史を醸す醸造口マンがある 諫早の酒造り展 ■関連イベント ○酒米(山田錦)の稲飾りワーク ショップ ○民俗講座「諫早の酒造り」 ○諫早の酒造り探訪バスツアー	自 12月16日 至 1月14日 641人		明治から昭和にかけての諫早 の酒造りの道具などを展示 148点
	開館10周年記念 野口彌太郎展 ■関連イベント ○開館10周年記念式典・企画展開 場式・ミモザ忌 ○ファミリーヒストリー(講話) ○まちなかパブリックアートめぐり	自 2月17日 至 3月24日		本市ゆかりの洋画家野口彌太 郎の作品展示 ※92点

3 教育普及

(1) 館長・美術・歴史(含:史跡見学)・民俗の各講座及びその他講演等

年度	期日	分類	テーマ等
26	8/2	歴史	夏期子ども講座「伊佐早と諫早」
	8/10	歴史	夏期子ども講座「江戸時代の諫早」
	8/23	歴史	夏期子ども講座「おばあちゃん達のころ」
	10/19	美術	長崎県諫早の焼物(講師 活水女子大学教授 下川達彌氏)
27	6/20	館長	諫早の七不思議「諫早にはなぜクスノキが多いか」
	8/22	その他	夏休みアート&ヒストリー講座2015 「初心者のための茶道教室」、「アクセサリ作り」、「美術・歴史館体験ツアー」
	8/23	その他	夏休みアート&ヒストリー講座2015 「いけばな教室」、「空のパズルを作ろう」、「初心者のための茶道教室」
	11/14	歴史	史跡見学バスツアー(真崎城、大雄寺、奥ノ院、平松城、高城等)
	11/15	歴史	「西郷氏と龍造寺」—西郷氏からみる高城の攻防—
	11/22	館長	諫早の七不思議「十二支園はなぜ生まれたか」
	12/19	館長	諫早の七不思議「本明川の飛び石について」
	1/16	民俗	諫早の産育習俗
	2/13	歴史	史跡見学バスツアー(唐比天満宮、陣野家墓地、善神さん古墳等)
	2/20	館長	諫早の七不思議「なぜ『のんのこ』と呼ばれるのか」
	3/19	歴史	古写真で見る諫早の変遷(交通編)
28	4/30	館長	諫早の七不思議「諫早公園のあの像はな〜に？」
	5/28	歴史	歴史探訪ツアー —多良見町・飯盛町の史跡を巡る—
	6/18	館長	諫早の七不思議「諫早にはなぜこんなにえびすさんがあるのだろうか」
	7/17	民俗	きもの・かぶりもの・はきもの
	8/20	その他	夏休みアート&ヒストリー講座2016「版画でうちわを作ろう」、「眼鏡橋のひみつを探ろう」
	8/21	その他	夏休みアート&ヒストリー講座2016「アクセサリ作り」、「カメラガール☆ステキな写真術」
	9/18	歴史	諫早市内の石造物—石造物の見方や市内の石造物の特色—
	10/8	館長	諫早の七不思議「諫早にクジラ専門店がなぜこんなにある？」
	11/13	その他	諫早の文化の源流を覗く(長崎県美術館館長 米田耕司氏)
	11/20	歴史	史跡巡り—高来・小長井—
	12/4	美術	近代長崎の日本画家たち(講師 元長崎県美術博物館学芸員 徳山光氏)
	12/10	館長	諫早競馬場類末記「諫早競馬場から運動公園への変遷等」
	1/22	民俗	正月の行事
	2/18	館長	諫早の七不思議「諫早と島」
	2/25	歴史	石橋の歴史から見る諫早眼鏡橋(長崎大学名誉教授 岡林隆敏氏)
	3/12	歴史	絵図を持って散策(天満町方面)
	3/19	歴史	絵図を持って散策(仲沖町方面)
	3/26	歴史	絵図を持って散策(原口方面)
29	4/23	歴史	史跡見学ツアー(光江津〜八坂神社)

年度	期日	分類	テーマ等
29	5/27	歴史	史跡見学バスツアー(金泉寺歴代住職墓、太良嶽一ノ鳥居等)
	6/3	館長	諫早の七不思議「数字で見る諫早」
	8/5	館長	諫早の七不思議「諫早の出来事と変化」
	8/5	その他	昆虫を描こう
	8/12	その他	昆虫教室
	9/3	歴史	古文書で見る諫江八十八ヶ所
	10/7	館長	諫早の七不思議「諫早に根付く職人の技と業」
	11/25	歴史	諫早家ゆかりの地を巡る佐賀探訪・史跡探訪バスツアー(越川橋、十三塚、嘉瀬刑場跡、諫早家屋敷跡、佐賀城跡、海中鳥居等)
	12/2	歴史	史跡見学散策ツアー(天祐寺～西郷の板碑)
	12/9	館長	諫早の七不思議「宮本常一に学ぶ①」
	1/27	歴史	伊能忠敬と諫早測量
	1/28	歴史	伊木力墓石と千々石ミゲル(講師 大石一久氏)
	2/3	館長	諫早の七不思議「宮本常一に学ぶ②」
	2/4	歴史	千々石ミゲル墓所推定地の発掘調査(講師 別府大学教授 田中祐介氏)
	2/24	民俗	嫁入り・婿取り
	3/3	館長	諫早領主と領民の絆(講師 諫早高城会 向井安雄氏)
	3/11	歴史	浦手台場跡巡り(手先島、魚見岳、経ヶ岳、黒瀬、魚見嶽、釜崎、東望の各台場跡等)
	3/18	歴史	幕末日本の危機(講師 長崎市歴史民俗資料館学芸員 永松実氏)
	3/31	歴史	諫早家から見た幕末の長崎港・橘湾沿岸警備
	30	5/12	歴史
6/2		館長	諫早の金融機関「諫早一学と諫早銀行等」
7/7		民俗	魂送り(葬送儀礼)
8/4		館長	諫早の奉仕団の活躍「諫早の奉仕団の概要等」
9/1		歴史	古文書に書きとめられた日本史―黒船来航―
10/27		歴史	多良岳散策ツアー(金泉寺歴代住職墓などを巡る)
11/10		館長	諫早の学校の変遷
11/11		民俗	ござんばさん
11/17		歴史	佐賀藩のすがた展関連 親類同格展講演会 「長崎警備とは何か」(講師 鍋島徴古館主任学芸員 富田紘次氏)
11/18		歴史	佐賀藩のすがた展関連 親類同格展講演会 「早田運平と電信機」(講師 佐嘉歴史研究会 多久島澄子氏)
11/24		歴史	古写真を見て散策(喜々津方面)
11/25		歴史	佐賀藩のすがた展関連 親類同格展講演会 「親類同格とは何か」(講師 佐賀県立佐賀城本丸歴史館 藤井祐介氏)
12/1		館長	館長講座特別編「メディアから見た諫早のあれこれ」(特別講師 長崎新聞社社長 才木邦夫氏)
12/22		美術	大貝彌太郎を語る(講師 向井安雄氏、佐藤幸乃氏)
1/5		歴史	古文書に書き留められた日本史―安政年間の出来事―
1/12		美術	大貝彌太郎と無言館(講師 長崎県美術協会会長 木下伸弘氏)

年度	期日	分類	テーマ等	
30	1/19	歴史	愛宕山散策ツアー	
	2/2	館長	諫早のメディアの変遷	
	2/3	歴史	史跡探訪ツアー(飯盛方面)	
	3/9	歴史	島原半島に残る西郷氏・龍造寺氏のゆかりの地を訪ねて	
	3/16	館長	諫早を3分間で紹介する	
	3/24	その他	ミュージアムの楽しみ方世界のミュージアム(講師 大分県立美術館館長 新見 隆氏)	
元	5/19	歴史	宗方地区史跡巡り(文化財・史跡・遺跡を巡る)	
	6/9	歴史	古写真を見ながら散歩―建物・風景編―	
	7/13	民俗	七夕と盆―七夕と盆の関係・諫早の盆―	
	7/27	その他	親子で協力して植物の不思議発見をしよう―上山公園散策―(講師 元長崎大学教授 陣野信孝氏)	
	8/3	その他	植物標本の作り方やラベルの付け方を勉強しよう(講師 元長崎大学教授 陣野信孝氏)	
	8/4	その他	架橋180年記念「眼鏡橋を科学する?!」―眼鏡橋の歴史解説と周辺散策―	
	8/10	歴史	諫早の歴史①佐賀藩諫早領―前編―(西郷・龍造寺系図、西郷氏と龍造寺氏の高城攻防、佐賀藩諫早領の成立)	
	8/24	その他	8/3の継続で標本にした植物の同定教室(講師 元長崎大学教授 陣野信孝氏)	
	9/21	歴史	諫早の歴史②佐賀藩諫早領―後編―(領内の村名・石高・人口)	
	10/13	歴史	小長井町史跡巡り(文化財・史跡・遺跡を巡る)	
	11/10	民俗	狛犬・神使めぐり(諫早市内の狛犬・神使等の石造物を巡る)	
	12/14	民俗	諫早湾と干拓―諫早湾を中心に奈良時代から現代までの干拓―	
	1/12	歴史	干拓地を歩く(明六・明十六干拓地等)	
	1/19	美術	講演会「日本の書と画」(講師 元県立美術博物館学芸員 徳山光氏)	
	2/9	歴史	輪内三十三所観音霊場巡り	
	2/22	歴史	古文書に見る諫早眼鏡橋	
	2	6/14	歴史	諫早騒動
		6/21	館長	諫早菖蒲日記と諫早の歴史「ロシア船来航、安勝寺の鐘等」
7/12		民俗	稲作―荒起こしから田植えまで―	
8/23		館長	諫早菖蒲日記と諫早の歴史「島原の乱と諫早領、諫早一揆」	
9/5		歴史	小学校区史跡巡り①―諫早小学校区―	
10/3		歴史	小学校区史跡巡り②―喜々津小学校区―	
11/7		歴史	小学校区史跡巡り③―諫早小学校区―	
11/22		館長	諫早菖蒲日記と諫早の歴史「鍋島家の主であった龍造寺氏等」	
12/5		歴史	小学校区史跡巡り④―真崎小学校区―	
1/10		民俗	盆と正月	
2/13		歴史	史跡巡り―諫早の寺社―	
2/14		歴史	江戸時代の災害I(自然災害に関する石造物、元禄12年大水害)	
2/21		館長	諫早菖蒲日記と諫早の歴史「西郷氏の出自等」	
2/28		美術	長崎の絵画学校①(講師 元県立美術博物館学芸員 徳山光氏)	
3/7		美術	長崎の絵画学校②(講師 元県立美術博物館学芸員 徳山光氏)	

年度	期日	分類	テーマ等
2	3/13	歴史	諫早のお寺巡り
	3/14	歴史	江戸時代の災害II(文政11年8月9日台風)
	3/21	美術	長崎の絵画学校③(講師 元県立美術博物館 徳山光氏)
3	6/20	館長	諫早菖蒲日記と諫早の歴史「諫早万人講、家臣の切腹、長崎仕組等」
	6/27	民俗	昭和の漁労—有明海—
	7/25	歴史	江戸時代の災害III(防火に関する石造物、寛政3年の火災)
	8/1	その他	自然講座①—植物標本作り—(講師 元長崎大学教授 陣野信孝氏)
	8/8	その他	自然講座②—小野金毘羅山の植物観察—(講師 元長崎大学教授 陣野信孝氏)
	9/26	民俗	諫早の諸職—下駄—
	10/2	歴史	小学校区史跡巡り⑤—湯江小学校区—
	10/10	館長	諫早菖蒲日記と諫早の歴史「佐賀での大調練等」
	12/4	歴史	小学校区史跡巡り⑥—小野小学校区—
		その他	馬場孟臣展関連講演会「馬場孟臣の時代」(講師 自彊館主 馬場史子氏)
	12/5	館長	諫早菖蒲日記と諫早の歴史「龍造寺家晴の伊佐早討入等」
	12/25	歴史	森山・飯盛の寺社巡り
	12/26	歴史	江戸時代の災害IV(寛政4年雲仙岳噴火による諫早の被害状況)
	3/26	歴史	諫早の寺社 金泉寺
	3/27	歴史	江戸時代の災害V(飢饉による諫早の被害と対策)
4	4/17	その他	美術・歴史館ボランティア歴史ガイド養成講座I
	4/24	館長	諫早菖蒲日記と諫早の歴史「寛政島原大地震と諫早家対応等」
	5/15	その他	美術・歴史館ボランティア歴史ガイド養成講座II
	5/28	歴史	諫早の寺社巡り—高来地区の寺社—
	6/11	民俗	クジラ(講師 生月町博物館 中園成生氏)
	6/19	その他	美術・歴史館ボランティア歴史ガイド養成講座III
	7/17	その他	美術・歴史館ボランティア歴史ガイド養成講座IV
		歴史	長崎街道I(一の瀬口から永昌宿までの史跡紹介)
	7/23	民俗	諫早の昔話(講師 武庫川女子大学 高木史人氏)
	8/21	歴史	長崎街道II(永昌宿から俵坂峠までの史跡紹介)
		その他	美術・歴史館ボランティア歴史ガイド養成講座V
	9/20	その他	美術・歴史館ボランティア歴史ガイド養成講座VI
	9/25	館長	三市交流展関係特別講座「津山藩と松江藩の歴史概要等」
	10/1	歴史	長崎街道—諫早駅～喜々津駅—(永昌宿から喜々津駅までの長崎街道沿いの史跡巡り)
	11/5	その他	三市交流展記念講演 出雲市関係 「出雲王登場～その背景と弥生・古墳時代の埋葬儀礼～」 (講師 弥生の森博物館学芸員 坂本豊治氏)
	11/13	その他	キッズワークショップI「古代のものづくり—勾玉づくり—」
	11/20	その他	三市交流展記念講演 津山市関係 「津山藩主森家と松平家」(講師 津山市郷土博物館学芸員 梶村明慶氏)
11/26	その他	キッズワークショップII「江戸時代のものづくり—からくり工作—」	

年度	期日	分類	テーマ等
4	11/27	歴史	多良海道(多良海道の概要と永昌宿から塩田宿までの史跡紹介)
	12/4	その他	三市交流展記念講演 諫早市関係 「長崎警備と諫早家」(講師 長崎県立大学教授 松尾晋一氏)
	12/10	歴史	多良海道—諫早駅～肥前長田駅—(永昌宿など多良海道近辺の史跡を巡る)
		その他	キッズワークショップIII 「現代～未来のものづくり—電子工作・科学実験」(イサハヤ電子株式会社・長崎総合科学大学)
	1/29	歴史	島原街道(諫早城下から島原城下までの史跡を紹介)
	2/4	歴史	島原街道(諫早駅から西諫早駅)
	2/12	館長	諫早菖蒲日記と諫早の歴史「佐賀藩主の蛸狩り、魯西亜記等」
	2/25	歴史	諫早の寺社巡り(小長井 竹崎の寺社)
	3/4	その他	野田みち子展関連特別講演 「プラド美術館にみるスペインの精神—エル・グレコからゴヤまで」 (講師 長崎県美術館学芸員 森園敦氏)
5	5/20	歴史	諫早の寺社巡り—多良見の寺社—
	5/28	館長	諫早菖蒲日記と諫早の歴史「佐賀藩西洋砲術導入、鑄造技術研究等」
	6/18	民俗	年中行事—春—
	7/16	歴史	江戸時代の武具職人
	7/17	歴史	諫早大水害展講座
	8/5	その他	ワークショップ「いけばなで好きな世界を創ろう」(講師 諫早市いけばな連盟会長 芳賀知瞳氏)
	8/19	その他	ワークショップ「こねこね粘土で夢の生き物を作ろう」(講師 長崎県美術協会 近藤浩一氏)
	8/26	その他	ワークショップ「君だけのカラータイマーを作ろう」
	10/8	館長	諫早菖蒲日記と諫早の歴史「抜け荷、天然痘対応等」
	10/28	歴史	諫早の寺社巡り—諫早の寺社—
	11/19	歴史	江戸時代の力士と相撲興行
	12/23	その他	酒米(山田錦)の稲飾りワークショップ(講師 地域おこし協力隊 菊山達也氏)
	12/24	民俗	諫早の酒造り
	1/13	その他	諫早の酒造り探訪(バスツアー)
	1/28	館長	諫早菖蒲日記と諫早の歴史「龍造寺氏の系譜、江戸参府等」
	2/10	歴史	小学校区史跡巡り⑧—小長井小学校区—
	3/3	その他	野口彌太郎展ファミリー—ストーリー—(講師 諫早市美術協会会長 木下伸弘氏)
	3/20	美術	まちなかパブリックアートめぐり(館周辺の美術品鑑賞)

(2) 学校の学習支援、出前講座、博物館実習受入等(令和元年8月から令和5年12月まで)

年度	期日	内容(館の対応)
元	8/18	長崎国際大学学生博物館実習受入31日迄(指導)
	8/28	明峰中学校2年3名職場体験学習受入29日迄(指導)
	9/5	明峰中学校1年諫早さるく(講師派遣)
	9/26	県立諫早東特別支援学校生徒館内見学
	10/16	長田中学校2年諫早さるく(講師派遣)
		県立諫早高等学校附属中学校2年3名職場体験受入17日迄(指導)
	10/21	みはる台小学校6年社会科見学(講師)
	11/7	御館山小学校長崎街道講話・現地説明(講師派遣)
	11/8	森山東小学校3年社会科見学(講師)
	11/21	みはる台小学校3年社会科見学(講師)
	11/25	県立諫早高等学校教諭初任者研修(講師)
	11/27	真津山小学校3年社会科見学(講師)
	11/27	街道観光案内人育成講習会(小長井へ 講師派遣)
	11/28	飯盛西小学校3年社会科見学(講師)
	12/12	小野小学校3年社会科見学(講師)
	1/16	高来西小学校3年社会科見学(講師)
	1/17	真崎小学校3年社会科見学(講師)
	1/18	街道観光案内人育成講習会(小長井へ 講師派遣)
	1/29	上山小学校3年社会科見学(講師)
	1/31	長田小学校3年社会科見学(講師)
2/5	本野小学校3年社会科見学(講師)	
2/27	県立諫早東特別支援学校生徒館内見学	
2	4/16	諫早市中央公民館講座(講師派遣)
	5/20	上山小学校6年社会科見学(講師)
	6/4	北諫早小学校6年歴史講話(講師派遣)
	6/18	北諫早小学校6年歴史探索(講師派遣)
	6/19	明峰中学校1年歴史講話(講師1名派遣)
	6/22	本野小学校6年歴史講話(講師派遣)
	6/24	真城中学校1年歴史講話(講師派遣)
	7/31	学童「真城っこ」来館講話(講師)
	8/28	明峰中学校2年職業講話(講師派遣)
	9/25	明峰中学校1年諫早さるく(講師派遣)
	10/7・8	県立諫早高等学校1年書道授業廣津雲仙展来館
	10/15	長田中学校生徒企画展見学
	10/23	真城中学校1年郷土学習(講師)
	11/12	御館山小学校6年講話と長崎街道調査(講師派遣)
	11/25	喜々津小学校3年社会科見学(講師)

年度	期日	内容(館の対応)	
2	11/26	県立諫早高等学校初任者教諭常設展示参観(講師)	
	12/4	上山小学校通級指導教室児童館内見学(講師)	
	12/15	街道観光案内人育成講習会(高来支所 講師派遣)	
	12/20	高木中学校社会科見学(講師)	
	1/15	高来西小学校3年社会科見学(講師)	
		真崎小学校3年社会科見学(講師)	
	1/20	みはる台小学校3年社会科見学(講師)	
	1/21	小栗小学校3年社会科見学(講師)	
	1/28	小野小学校3年社会科見学(講師)	
	1/29	長田小学校3年社会科見学(講師)	
	2/3	上諫早小学校3年社会科見学(講師)	
	2/8	上山小学校3年社会科見学(講師)	
		上山小学校6年市小中学校美術展参観	
	2/10	本野小学校3年社会科見学(講師)	
	2/28	長崎の絵画学校①(講師 徳山光氏 元県美術博物館学芸員)	
	3/1・3	北諫早小学校3年社会科見学(講師)	
	3/7	長崎の絵画学校②(講師 徳山光氏 元県美術博物館学芸員)	
	3/21	長崎の絵画学校③(講師 徳山光氏 元県美術博物館学芸員)	
	3	5/21	諫早中学校1年郷土学習(講師派遣)
		6/3	北諫早小学校6年郷土学習(講師派遣)
6/4		鎮西大学大学院生常設展示見学(講師)	
6/10		北諫早小学校6年地域学習さるく(講師派遣)	
6/16		県立諫早東特別支援学校生徒館内見学(講師)	
6/18		諫早小学校3年地域学習さるく(講師派遣)	
6/28		森山中学校6年平和学習講話(館内・講師派遣)	
7/7		諫早小学校5年社会科見学(講師)	
7/8		明峰中学校1年歴史講話(講師派遣)	
7/16		真城中学校1年諫早さるく(講師派遣)	
8/18		九州産業大学学生博物館実習生受入9月1日迄(指導)	
9/22		明峰中学校1年諫早さるく(講師派遣)	
9/29		小野中学校6年郷土学習(講師派遣)	
10/1		県立島原特別支援学校生徒館内見学(講師)	
		真崎小学校4年水害講話(講師派遣)	
10/6		諫早中学校教諭1名経年研修社会体験研修受入8日迄(指導)	
10/13		長田中学校美術・歴史館周辺さるく(講師派遣)	
10/15		小野中学校地域学習(講師派遣)	
10/18		真崎小学校4年浮立講話(講師派遣)	
10/27		諫早・大村地区教員初任者研修郷土研修(講師派遣)	

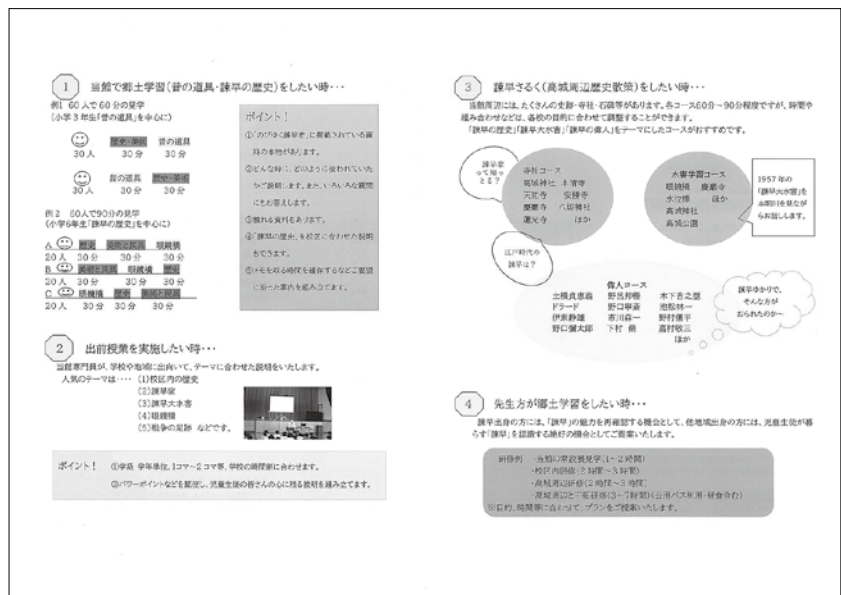
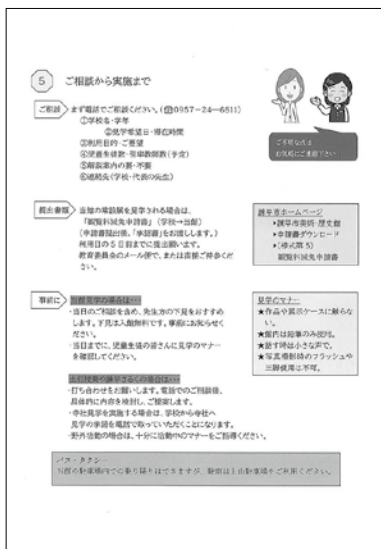
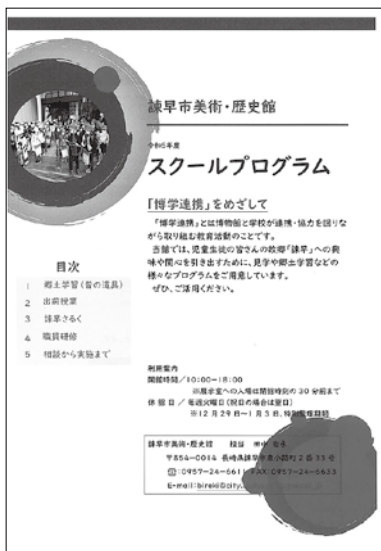
年度	期日	内容(館の対応)
3	11/11	湯江小学校3年社会科見学(講師)
	11/17	飯盛公民館講座館内見学(講師)
	11/22	明峰中学校1年諫早さるく(講師派遣)
	11/25	真津山小学校3年社会科見学(講師)
		県立諫早高等学校教員初任者研修(講師)
	12/11	高来公民館講座(講師派遣)
	12/16	御館山小学校6年歴史学習(講師派遣)
	12/24	長崎日大中学校歴史講話(講師派遣)
	1/14	高来西小学校3年社会科見学(講師)
		真崎小学校3年社会科見学(講師)
	1/19	みはる台小学校3年社会科見学(講師)
		上山小学校3年社会科見学(講師)
	1/24	小野小学校3年社会科見学(講師)
	1/27	長田小学校3年社会科見学(講師)
	1/28	喜々津小学校3年社会科見学(講師)
	2/3	本野小学校3年社会科見学(講師)
長崎日大中学校歴史講話(講師派遣)		
4	5/9	県立諫早高等学校附属中学校2年社会科見学(講師)
	5/16	県立諫早特別支援学校生徒館内見学(講師)
	6/3	北諫早小学校6年郷土学習講話(講師派遣)
	6/10	北諫早小学校6年諫早さるく(講師派遣)
	6/20	上山小学校6年諫早さるく(講師派遣)
	6/24	県立諫早特別支援学校高等部館内見学(講師)
	6/29	県立諫早東特別支援学校生徒館内見学(講師)
	7/6	諫早小学校6年諫早大水害展見学(講師)
	7/7	明峰中学校1年歴史講話(講師派遣)
	7/11	諫早小学校3年諫早さるく(講師派遣)
	8/22	喜々津中学校教諭1名経年研修社会体験研修受入25日迄(指導)
	8/24	明峰中学校1年諫早さるく(講師派遣)
	9/4	長崎国際大学学生博物館実習受入16日迄(指導)
	9/15	みはる台小学校6年社会科見学(講師)
		小野中学校地域学習講話(講師派遣)
	9/29	県立諫早東特別支援学校中学部生徒4名職場体験30日迄(指導)
	10/12	小栗公民館講座講話(講師派遣)
	10/13	長田中学校1年郷土学習(講師)
	10/24	諫早・大村地区教員初任者研修郷土研修(講師派遣)
	11/5	三市交流展記念講演(出雲市関係:弥生の森博物館学芸員 坂本豊治氏)
11/7	諫早中学校2年三市交流展見学	

年度	期日	内容(館の対応)
4	11/14	湯江小学校6年三市交流展見学(講師)
	11/18	真城中学校2年諫早さるくと三市交流展見学(講師派遣)
	11/20	三市交流展記念講演(津山市関係:津山市郷土博物館学芸員 梶村明慶氏)
	11/21	西諫早中学校2年歴史学習(講師派遣)
	11/24	県立諫早高等学校初任者教諭2名館内見学(講師)
	11/25	真津山小学校3年社会科見学(講師)
		有喜中学校2年三市交流展見学(講師)
	12/4	三市交流展記念講演(諫早市関係:長崎県立大学教授 松尾晋一氏)
	12/8	県立諫早高等学校附属中学校1年三市交流展見学(講師)
	1/9	鎮西学院高等学校箏曲同好会新春琴演奏
	1/16	上山小学校3年社会科見学(講師)
	1/18	真崎小学校3年社会科見学(講師)
	1/20	高来西小学校6年郷土学習(講師)
	1/23	小野小学校3年社会科見学(講師)
	1/25	御館山小学校3年社会科見学(講師)
	1/27	長田小学校3年社会科見学(講師)
	2/2	みはる台小学校3年社会科見学(講師)
	2/3	飯盛東小学校3年社会科見学(講師)
	2/6	本野小学校3年社会科見学(講師)
	2/9	北諫早小学校3年社会科見学(講師)
2/13	森山公民館講座受講者見学(講師)	
3/4	野田みち子展関連講演会(長崎県美術館学芸員 森園 敦氏)	
3/16	本野公民館講座受講者見学(講師)	
5	4/18	小野公民館講座講話(講師派遣)
	5/12	本村老人会館内見学(講師)
	5/18	諫早小学校5年社会科見学(講師)
	5/26	諫早ロータリークラブ講話(講師派遣)
	6/1	北諫早小学校6年歴史講話(講師派遣)
	6/8	北諫早小学校6年諫早さるく(講師派遣)
	6/21	県立諫早特別支援学校生徒館内見学
	7/6	明峰中学校1年歴史講話(講師派遣)
	8/15	長崎国際大学学生2名博物館実習生受入26日迄(指導)
		喜々津中学校教諭1名経年研修社会体験研修受入24日迄(指導)
	8/21	県立諫早高等学校教員2名初任者研修(講師)
		明峰中学校1年諫早さるく(講師派遣)
	8/23	明峰中学校2年2名職場体験学習受入24日迄(指導)
		明峰中学校2年2名職場体験学習受入24日迄(指導)
9/2	長崎日大高等学校新聞部取材(ウルトラ空想特撮ワールド)	
9/6	小野中学校地域学習講話(講師派遣)	

年度	期日	内容(館の対応)
5	9/11	みはる台小学校6年諫早さるく(講師派遣)
	10/11	県立諫早高等学校附属中学校2年2名職場体験学習受入13日迄(指導)
	10/12	喜々津中学校2年歴史講話(講師派遣)
		長田中学校1年諫早さるく(講師派遣)
	10/27	諫早小学校3年美術・歴史館周辺さるく(講師派遣)
	11/10	北諫早中学校1年館内見学
	11/22	真津山小学校3年館内見学(講師)
	12/1	真城中学校1年諫早さるく(講師派遣)

○諫早市美術・歴史館スクールプログラムの策定

令和5年度には、諫早市内児童生徒の故郷「諫早」への愛着と興味・関心を引き出すため、見学や郷土学習の様々なプログラムを掲載し、「博学連携」(博物館と学校が連携・協力を図りながら取り組む教育活動)を推進する「諫早市美術・歴史館スクールプログラム」を作成した。市内全小・中学校へ説明・配布しており、今後も活用を期待したい。

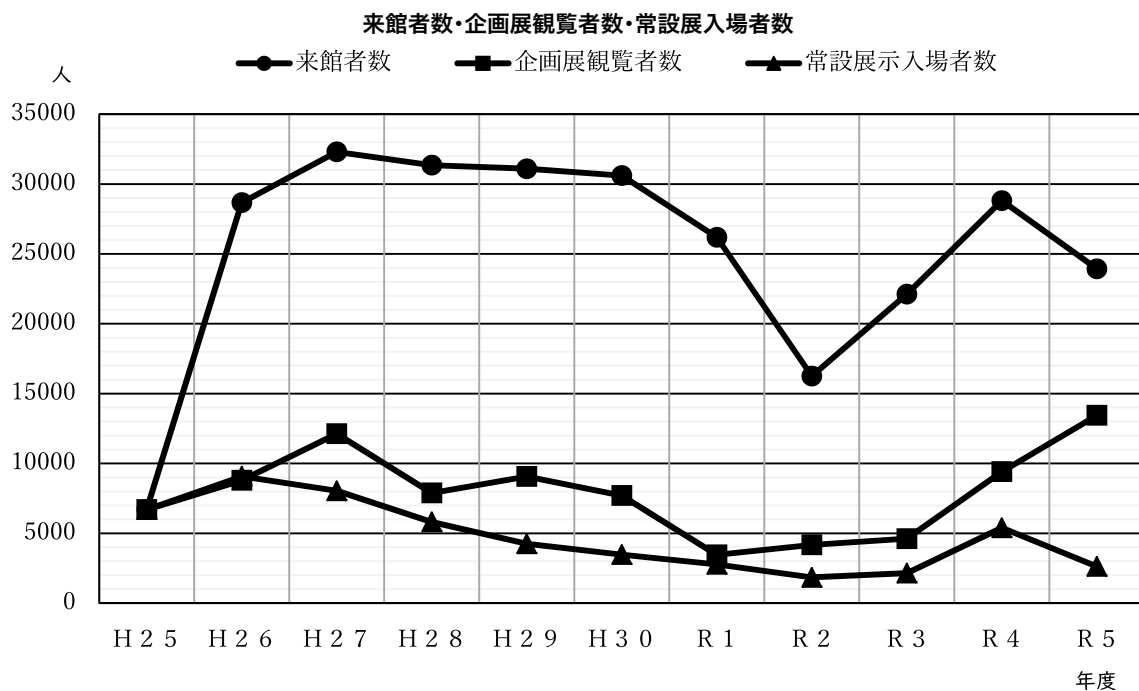


4 主な貸館の実績

年 度	使用目的	期 間
平成26年度 貸館利用 81件 15,149人	長崎国体	7/2-24
	MOA美術館長崎県児童作品展	11/13-16
	諫早市美術展覧会	11/20-24
	「ココロモノとアート展」 —長崎県特別支援学校高等部生徒作品展—	1/28-2/2
	諫早市小中学校美術展	2/6-9
平成27年度 貸館利用 79件 12,667人	第40回長崎県書道展諫早展	5/22-29
	長崎県高等学校文化連盟デッサン展	7/30-8/3
	市内中学校4校合同美術部展(諫早、北諫早、西諫早、明峰各中学校)	8/19-23
	飛龍書道展	8/27-30
	諫早市小中学校科学展	9/4-7
平成28年度 貸館利用 99件 18,710人	三軌会諫早支部結成記念写真展	8/3-8
	諫早小中学校科学展	9/9-16
	アール・ブリュット・フェスティバル	10/8-10
	第10回ログハウスの会作品展	12/5-12
	第47回諫早市小中学校美術展	2/8-14
平成29年度 貸館利用 95件 18,404人	第1回3クラブ合同写真展	5/25-6/1
	飛龍書道展	8/24-27
	諫早市小中学校科学展	9/8-11
	創成館高等学校デザイン科作品展	11/29-12/15
	第48回諫早市小中学校美術展	2/8-14
平成30年度 貸館利用 66件 20,892人	長崎日大デ美術展授業作品展「名画な諫早」	6/29-7/9
	諫早市小中学校科学展	9/7-14
	創成館高等学校デザイン科作品展	11/8-26
	アール・ブリュット・フェスティバル2018	11/29-12/2
	第49回諫早市小中学校美術展	2/7-13
令和元年度 貸館利用 55件 19,585人	第71回三軌展長崎巡回展	6/1-10
	諫早市小中学校科学展	9/11-18
	第58回諫早市美術展覧会	10/30-1/6
	創成館高等学校デザイン科作品展	11/7-25
	第50回諫早市小中学校美術展	2/6-13
令和2年度 貸館利用 24件 8,624人	諫早市小中学校科学展	9/9-16
	第40回県央地区書作家協会展	11/5-8
	第1回諫早市老人クラブ連合会生きがい作品展	1/14-17
	長崎県高等学校総合文化祭書道部門書道展	1/27-31
	第51回諫早市小中学校美術展	2/4-10
令和3年度 貸館利用 40件 12,606人	パッチワーク作品の展示会	5/31-6/7
	飛龍書道展	8/26-29
	諫早市小中学校科学展	9/15-22
	第60回記念諫早市美術展覧会	11/3-10
	第52回諫早市小中学校美術展	2/3-9
令和4年度 貸館利用 64件 20,260人	木村昌 型絵染展	5/12-16
	諫早市小中学校科学展	9/14-21
	アール・ブリュット・フェスティバル2022	9/22-25
	第61回諫早市美術・展覧会	10/19-24
	第53回諫早市小中学校美術展	2/2-8

5 来館者数・企画展入場者数・常設展入場者数

年度	来館者数	企画展入場者数	企画展数	常設展入場者数	開館日数	1日平均
平成 25	6,696	6,696	1	6,696	27	248
26	28,670	8,790	6	9,079	309	93
27	32,304	12,124	9	8,038	309	105
28	31,353	7,886	9	5,813	307	102
29	31,093	9,064	10	4,251	307	101
30	30,604	7,704	6	3,472	308	99
令和 元	26,187	3,456	5	2,774	309	85
2	16,257	4,172	7	1,842	289	56
3	22,118	4,614	7	2,144	307	72
4	28,111	9,407	6	5,395	300	96
5 (12月31日現在)	23,933	13,443	5	2,628	229	104
合計	278,026	87,356	71	52,132	3,001	93



- 平成26年6月に来館者数1万人、平成27年10月に5万人、平成29年5月に10万人、令和3年2月に20万人、令和5年3月末25万人を超えている。
- 令和2年度の来館者数、企画展入場者数は、新型コロナウイルス感染症流行の影響で、臨時休館、当館を利用する県展、市展の中止や学校関係の展示内容の削減などにより大幅に落ち込み、流行前の平均の約54%となった。新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着きを見せ、令和3年度、4年度の「ウィズコロナ」という対応に変わり始め、来館者数及び企画展入場者数ともに回復傾向となっている。

V 広報活動

1 ポスター、チラシ

- 市内各施設への企画展ポスターやチラシ(市内小中学校へは全児童・生徒数)を掲示・配布依頼。
- 自治会長会での各自治会への配布、周知依頼。(ポスターは自治会掲示板への掲示依頼)

2 広報いさはや

- 毎月発行の広報誌内「イベント情報」の中で館のイベント情報掲載。
- 令和4年度は、「市政トピック」の「おしえて美歴さん」コーナーで、美術・歴史館の紹介や西九州新幹線開業記念として開催した友好交流都市出雲市・津山市・諫早市「三市交流展」について紹介。

3 新聞、ナイスいさはや

- 新聞への掲載は、企画展への取材による記事掲載や一部の企画展についての広告の掲載。
- 「ナイスいさはや」への、企画展記事掲載。

4 ホームページ、SNS

- 諫早市美術・歴史館公式ホームページに催し物掲載。
- インスタグラムによる企画展開催の紹介や開催期間中の様子などの発信。

5 テレビ、ラジオ

- 令和4年度西九州新幹線開業記念として開催した友好交流都市出雲市・津山市・諫早市「三市交流展」や令和5年度開館10周年記念・西九州新幹線開業1周年記念「ウルトラ空想特撮ワールドーウルトラマンと夢見る未来ー」は、テレビでの定期的なスポット告知。
- 各企画展への取材社(テレビ)による県内ニュース内での放映。
- ラジオについては「FMいさはや」番組内で館職員の定期的な出演による催しもの等の紹介。

【FMいさはやへの職員の出演(令和2年度から)】

- 館長出演(月2回第1、第3水曜日、14:00-14:25、諫早関係歴史講話と館の催し紹介)

年度	期日	歴史講話内容	館の催し紹介内容
2	8/19	天草・島原の乱	飛龍展(書道)、廣津雲仙展等
	10/29	諫早の歴史	史跡巡り、創成館高校デザイン展等
	1/27	諫早一揆 酒屋七五郎	M・マリーニとM・シャガール展等
3	4/7	野呂邦暢と「諫早菖蒲日記」	飯盛町江の浦熊野神社天井絵・絵馬展等
	4/21	諫早家が保有していた船舶	同上、金泉寺の木造不動三尊像
	5/5	時刻を告げる安勝寺の鐘	諫早眼鏡橋解体前断面図等
	5/19	長崎警備	荒木幸史展(野呂邦暢との関係)等
	6/9	刑罰:業柱抱き	諫早大水害展
	6/23	江戸時代の刑罰	同上、諫早の地図比較(明治・大正・昭和)
	7/7	船越氏と伊佐早氏の存在1	自然講座(児童・保護者)
	7/21	船越氏と伊佐早氏の存在2	追憶～戦地からの手紙～展
	8/4	文献初出の諫早の人「藤井宮時」	同上
	8/18	佐賀藩からの米・領地取上	飛龍書道展、多良海道写真展等
	9/1	佐賀藩からの武家に対する米取上	館の新型コロナ対策、開館時間変更等
	9/15	諫早はなぜ長崎県?(リスナーからの質問に答えて)	

年度	期日	歴史講話内容	館の催し紹介内容
3	10/6	江戸湾台場建造と佐賀藩・諫早領	
	10/20	諫早家家臣への内職奨励等	出張美術館IN森山図書館等
	11/3	漢方医から蘭方医へ	エーセルテレカラフ、諫早市美術展覧会等
	11/17	伊能忠敬諫早測量	馬場孟臣展、講座
	12/1	まだら節	馬場孟臣展、諫早いけばな花展等
	12/15	大川の蚩	幕末の諫早(パネル展)
	1/5	龍造寺家と鍋島家1	多良海道写真展、講座等
	1/19	龍造寺家と鍋島家2	諫早家11代茂圖公作品等
	2/2	龍造寺家と鍋島家3	各種講座
	2/16	龍造寺家と鍋島家4	新型コロナ対策対応
	3/2	龍造寺家と鍋島家5	野口彌太郎展、講座
	3/16	龍造寺家と鍋島家6	同上、ボランティア歴史ガイド募集
4	4/6	龍造寺家と鍋島家7 ※三市交流展	葛飾北斎 富嶽三十六景展等
	4/20	龍造寺家と鍋島家8 ※三市交流展	美歴こどもWEEK等
	5/4	龍造寺家と鍋島家9 ※三市交流展	木村昌型絵染展等
	5/11	龍造寺家と鍋島家10 ※三市交流展	3クラブ合同写真展等
	6/1	龍造寺家と鍋島家11 ※三市交流展	
	6/15	龍造寺家と鍋島家12 ※三市交流展	諫早大水害展
	6/29	龍造寺家と鍋島家13 ※三市交流展	歴史・民俗講座応募締切等
	7/20	三市交流展(津山藩の歴史)	諫早大水害展
	8/3	龍造寺家と鍋島家14	諫早歴史face展「諫早歴史旅」等
	8/17	三市交流展(松江藩・津山藩接点)	飛龍会書道展、異色コラボ展等
	9/7	龍造寺家と鍋島家15	久保洋三絵画展、諫早市小中学校科学展等
	9/21	三市交流展(出雲市展示資料)	MOA児童作品展等
	10/5	西郷氏出自と伊佐早領主時代1	長崎県美術展覧会等
	10/19	三市交流展(津山市展示資料)	諫早市美術展覧会、臨時休館告知、三市交流展等
	11/2	西郷氏の伊佐早領主時代2	三市交流展出雲市関係記念講演等
	11/16	西郷氏の伊佐早領主時代3	津山市関係・諫早市関係各記念講演
	12/7	龍造寺家晴の伊佐早討入1	三市交流展キッズワークショップ等
	12/14	龍造寺家晴の伊佐早討入2	創成館高校作品展、臨時休館告知等
	1/4	龍造寺家晴の伊佐早討入3	初春箏曲の響き、市老蓮作品展等
	1/25	龍造寺家晴の伊佐早討入4	市川森一記念文化講演会等
	2/1	佐賀藩での諫早家の位置づけ	諫早市小中学校美術展、独立書人展
2/15	長崎警備と西洋新式銃の導入1	エル・グレコを描く野田みち子展等	
3/1	長崎警備と西洋新式銃の導入2	野田みち子展関連講演会等	
3/15	長崎警備と西洋新式銃の導入3	ミモザ忌と野口彌太郎作品展等	
5	4/5	高島秋帆事件後の佐賀藩西洋銃	開館10周年記念諫早の美術家展等
	4/19	佐賀藩洋式砲製造と江戸お台場	諫早の美術家展、美歴こどもWEEK

年度	期日	歴史講話内容	館の催し紹介内容
5	5/3	元禄12年の洪水被害と復興	インスタフォトコンテスト等
	5/17	文化年代の洪水被害と炊き出し	3クラブ合同写真展等
	6/7	佐賀諫早屋敷の奥女中選考	美歴コレクション展等
	6/21	奥女中お役御免後の諫早家の処遇	諫早大水害展等
	7/5	田圃の虫追い(実盛虫)	市内中学校4校美術部展等
	7/19	諫早での万人講	ウルトラ空想特撮ワールド等
	8/2	「無礼お咎め一切あるまじき事」	市川森一氏の功績等
	8/16	諫早家家臣の切腹1	ウルトラ空想特撮ワールド(展示資料)
	9/6	諫早家家臣の切腹2	ウルトラヒーロー追加撮影会
	9/20	諫早家領主の節約	臨時休館日告知、諫早市小中科学展等
	10/4	家老以下一般の緊縮令	MOA児童作品展等
	10/18	長崎警備「長崎仕組」の編成1	長崎県美術展覧会等
	11/1	長崎警備「長崎仕組」の編成2	諫早市美術展覧会、創成館生徒作品展
	11/15	諫早での調練(実弾発射訓練)	歴史講座案内、森一忌等
	12/6	佐賀での大調練1	諫早の酒造り展
	12/20	佐賀での大調練2	諫早の酒造り展、休館日告知
	1/10	佐賀での大調練3	諫早の酒造り展、すまいるスマイル展
	1/17	正保4年ポルトガル船入港	諫早市老人クラブ連合会作品展、諫早市小中美術展等
	2/7	フェートン号事件	書道展、野口彌太郎展、ミモザ忌
	2/21	(予定)佐賀藩主の本明川の蛍狩り	野口彌太郎展
3/6	(予定)佐賀藩主の長崎出張と諫早領主嫡子の随行1	野口彌太郎展	
3/20	(予定)佐賀藩主の長崎出張と諫早領主嫡子の随行2	次年度企画展等告知	

○ 館長以外職員出演(月1回月曜日14:00～14:25 館の催し紹介)

年度	期日	内 容	年度	期日	内 容
2	6/29	ブックデザイン展	3	4/19	飯盛町江の浦熊野神社天井絵・絵馬展
	7/20	諫早大水害展		5/17	荒木幸史展
	8/10	戦中・戦後の諫早展		6/21	自然観察会
	9/21	生誕110年廣津雲仙展		7/5	諫早大水害展
	10/19	新指定文化財展		8/9	追憶―戦地からの手紙―展
	11/2	エーセルテレカラフ展示		9/13	諫早の遺跡コレクション展
	12/7	民俗講座「盆と正月」		10/4	出張美術館 in 森山図書館
	1/11	歴史講座「江戸時代の災害」		11/15	馬場孟臣展
	2/22	切手の中のアート展		12/20	小学校区史跡巡り
	3/1	M・マリーニとM・シャガール展		1/24	民俗講座「餅・団子・赤飯」
			2/21	歴史講座「江戸時代の災害」	
			3/28	プレゼンテーションウォール	

年度	期日	内 容	年度	期日	内 容
4	4/25	葛飾北斎富嶽三十六景展 美歴こどもWEEK	5	4/17	諫早の美術家展 美歴こどもWEEK2023
	5/23	民俗講話(昔話)		5/1	同上
	6/27	歴史講座		6/5	史跡見学報告、民俗講座
	7/4	諫早大水害展、民俗講座		7/3	諫早大水害展、歴史講座
	8/8	諫早歴史face展		7/31	ウルトラ空想特撮ワールド
	9/12	史跡巡り、西九州新幹線開業		8/21	ウルトラ空想特撮ワールド
	10/3	長崎県美術展覧会、諫早市美術展覧会、貸館利用		9/4	ウルトラ空想特撮ワールド
	11/7	三市交流展		10/16	長崎県美術展覧会、諫早市美術展覧会、貸館利用
	11/21	三市交流展		11/20	諫早の酒造り展、文化の秋
	12/5	三市交流展		12/18	諫早の酒造り展、民俗講座
	12/12	三市交流展		1/8	諫早の酒造り展、史跡探訪
	1/30	諫早の寺社巡り		2/19	(予定)野口彌太郎展
	2/20	野田みち子展		3/11	(予定)野口彌太郎展
	3/27	プレゼンテーションウォール		3/25	(予定)プレゼンテーションウォール

VI 歴代職員(各年度4月時点)

(注) ○印は主任、※印は学芸員有資格

	平成26年3月	平成26年度	平成27年度	平成28年度
館長	中村秀憲	鈴木勇次	鈴木勇次	鈴木勇次
副館長	諸岡昌史	諸岡昌史	川瀬雄一 ※	川瀬雄一 ※
事務職員	川瀬雄一 ※○	川瀬雄一 ※ ○	山本 貢 ○	山本 貢 ○
事務職員	山本 貢	山本 貢	松本恵美 ※	松本恵美 ※
専門員	織田武人	織田武人	川内知子 ※	川内知子 ※
専門員	大島大輔	大島大輔	大島大輔 ※	大島大輔 ※
専門員	牛嶋朋子	川内知子 ※	百崎恭子 ※	百崎恭子 ※
専門員	百崎恭子 ※	百崎恭子 ※	田中郁子	田中郁子

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
館長	鈴木勇次	鈴木勇次	堀 輝広	堀 輝広
副館長	川瀬雄一 ※	川瀬雄一 ※	川瀬雄一 ※	川瀬雄一 ※
事務職員	山本 貢 ○	山本 貢 ○	野田さやか ○	野田さやか ○
事務職員	松本恵美 ※	松本恵美 ※	松本恵美 ※	松本恵美 ※
専門員	川内知子 ※	川内知子 ※	川内知子 ※	川内知子 ※
専門員	大島大輔 ※	大島大輔 ※	大島大輔 ※	大島大輔 ※
専門員	江口喬裕 ※	江口喬裕 ※	江口喬裕 ※	江口喬裕 ※
専門員		福井遥香 ※	福井遥香 ※	柿田佳央理 ※

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
館長	堀 輝広	堀 輝広	堀 輝広
副館長	川瀬雄一	坪内理子	坪内理子
事務職員	野田さやか ○	松本恵美 ※ ○	村川留美子 ○
事務職員	松本恵美 ※ ○	森 健史 ※	森 健史 ※
専門員	川内知子 ※	川内知子 ※ ○	川内知子 ※ ○
専門員	大島大輔 ※	大島大輔 ※ ○	大島大輔 ※ ○
専門員	江口喬裕 ※	岩永郁子	岩永郁子
専門員	江上玲子 ※	渡邊栄生	田中麻衣子 ※
受付案内員			市ノ木初美
受付案内員			吉良麻由美
受付案内員			古川知佳

◎令和5年度から受付案内員を新設。

VII 収蔵資料

※令和5年3月31日現在

分類	点 数				
	寄 贈	寄 託	購 入	管理換え	計
絵 画	361	13	1	190	565
彫 塑	8	0	0	1	9
書 跡	291	0	0	68	359
工 芸	363	4	0	41	408
考 古	5,700	856	0	0	6,556
文 書	12,073	1,125	0	0	13,198
写 真	6,188	1	0	5	6,194
博 物	33	0	0	0	33
水 書	480	0	0	0	480
金 石	0	0	0	0	0
歴 史	558	2	0	0	560
民 俗	7,997	2	0	0	7,999
小 計	28,007	2,003	1	305	36,361
図 書	10,525	0	0	0	10,525
総 計	44,577	2,003	1	305	46,886

VIII 図録紹介

1 諫早市美術歴史館 開館記念特別企画展

文道全則 武威是備 諫早ゆかりの品々展

掲載出品 龍造寺御系図(写)、金泉寺千手観音像、
明珍作うこん威甲冑一両、諫早城下図、
松鶴図屏風など、計105点

協力機関 金泉寺、熊本学園大学付属図書館、慶巖寺、
正応寺、性空寺、稱念寺、大雄寺、大興寺、
高城神社、天祐寺、徳養寺、長崎県立諫早高等学校
長崎歴史文化博物館、平仙寺、蓮光寺

協力者 諫早道子氏、古賀 力氏、早田ハツ氏、藤山徳二氏、向井安雄氏

題 字 諫早市美術協会会長 立野松雲氏

発行日 平成26年3月1日

発行所 諫早市美術・歴史館

印刷所 株式会社昭和堂

価 格 1,100円



2 諫早家を支えた家臣たち 諫早家家臣寄贈・寄託資料展

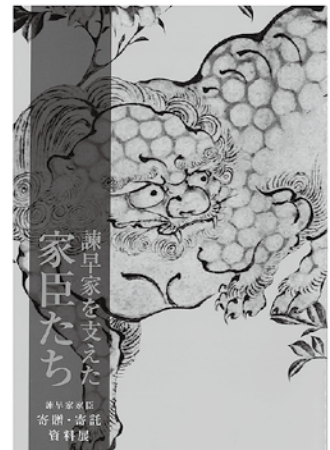
掲載出品 エーセルテレカラフ、火縄銃、萌黄糸威桶側二枚胴具足、
剣花菱紋火事装束など、計127点

発行日 平成27年6月25日

発行所 諫早市美術・歴史館

印刷所 株式会社昭和堂

価 格 510円



3 諫早市美術・歴史館所蔵陶磁器展

諫早・長崎焼物の美

土師野尾・現川・亀山・長与・鵬ヶ崎・瀬古・甕山

掲載出品 三耳付葉茶壺(土師野尾)、刷毛地藤蝶文皿(現川)
染付貝づくし文鉢(亀山)、三彩筒形花生(長与)、
釉描彩丁字文小鉢(鵬ヶ崎)、鍾馗様(甕山)、
瀬古焼破片など、計119点

発行日 平成26年10月13日

発行所 諫早市美術・歴史館

印刷所 株式会社昭和堂

価 格 710円



4 諫早市制施行(合併)10周年

諫早市美術・歴史館開館1周年記念

ふるさと諫早を愛した画家 近代絵画の巨匠

野口彌太郎 大回顧展

掲載出品 自画像、夏の琵琶湖、江の浦風景、諫早の眼鏡橋、
コンコルド広場、那智の滝など、計87点

協力機関 株式会社菓秀苑森長、株式会社昭和堂、
株式会社山下画廊、福岡市美術館、長崎県美術館、
長崎市、長崎市野口彌太郎記念美術館
諫早市芸術文化連盟

協力者 野口太郎氏、河野露團氏、山下秀人氏、北島和夫氏
久保田順一氏、城野 忠氏、助村大作氏、西村房子氏
向井安雄氏

野口彌太郎大回顧展実行委員会

会長 森 長之氏、 副会長 鈴木勇次氏、 委員長 木下伸弘氏、
委員・プロデューサー 山下博之氏、 委員 馬場正邦氏、 委員 谷口 啓氏、
委員 中村秀憲氏、 委員 中溝文明氏、 学芸員 川瀬雄一、 学芸員 百崎恭子

発行日 平成27年3月1日

編集 野口彌太郎大回顧展実行委員会

発行 諫早市美術・歴史館

印刷 株式会社昭和堂

価格 1,320円



5 諫早眼鏡橋展(since 1839)

掲載出品 眼鏡橋(水害前後)、解体前実測図、キーストーン、
チキリ鉄、ダボ鉄、重要文化財眼鏡橋関係書、
日記(諫早家文書)など、計101点

発行日 令和2年2月21日

発行 諫早市美術・歴史館

印刷 株式会社昭和堂

価格 750円



(付録) 諫早市美術・歴史館条例

第1条(目的) 本市にゆかりのある美術・歴史、民俗等に関する資料(以下「資料」という。)を収集し、保管し、展示し、及び調査研究して市民等の利用に供するとともに、市民に美術作品及び歴史、民俗等に関する調査研究等の成果の発表の機会を提供することにより、市民の文化の発展に寄与し、併せて地域の振興に資するため、諫早市美術・歴史館(以下「美術・歴史館」という。)を設置する。

第2条(位置) 美術・歴史館の位置は、諫早市東小路町2番23号とする。

第3条(事業) 美術・歴史館は、次の事業を行う。

- (1) 資料の収集、保管、修復及び展示等に関すること。
- (2) 資料に関する研究調査及びその成果等の公表に関すること。
- (3) 市民による美術作品等の発表の機会の提供等に関すること。
- (4) 他の施設との連携等に関すること。
- (5) 前各号に掲げるもののほか、第1条の目的を達成するために必要な事業

第4条(観覧料) 常設展示室の展示資料を観覧しようとする者(以下「観覧者」という。)は、別表第1に定める観覧料を入室の際に納入しなければならない。

- 2 市長は、市が主催する特別の展示会等について、観覧料を徴収することができる。
- 3 前項の規定により徴収する観覧料の額は、市長が別に定める。

【別表第1(第4条関係「観覧料」)】

区 分	観覧料(1人1回につき)	
	個 人	団 体
高校生・大学生・一般	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

第5条(専用) 市長は、別表第2左欄に掲げる美術・歴史館の施設(以下単に「施設」という。)を専用させることができる。

- 2 施設を専用しようとする者は、あらかじめ市長の許可を受けなければならない。
- 3 市長は、前項の許可の申請が次の各号のいずれかに該当するときは、同項の許可をしてはならない。
 - (1) 公の秩序を乱し、又は善良な風俗を害するおそれがあるとき。
 - (2) 集団的に又は常習的に暴力的不法行為を行うおそれがある組織の利益になると認めるとき。
 - (3) 美術・歴史館の建物、付属設備、備品等を滅失し、損傷し、又は汚損するおそれがあるとき。
 - (4) 専ら営利を目的とする施設の専用であると認めるとき。
 - (5) 前各号に掲げるもののほか、美術・歴史館の管理上支障があるとき。
- 4 第2項の許可には、美術・歴史館の管理上必要な条件を付することができる。

第6条(使用料) 前条第2項の許可を受けた者(以下「専用者」という。)は、別表第2に定める額の使用料を専用の許可を受けた際に納入しなければならない。

【別表第2(第5条、第6条関係「使用料」)】

施 設 名		使用料(1時間当たり)
ホール		1,040円
研修室	和 室	310円
研修室	(1)	200円
	(2)	200円
	(3)	310円

企画展示室	(1)	520円
	(2)	310円
	(3)	310円

(備考) 使用料の額を計算する基礎となる専用時間が1時間未満であるとき、又は専用時間に1時間未満の端数があるときは、その時間又は端数時間は1時間として使用料の額を計算する。

第7条(権利の譲渡等の禁止) 専用者は、その権利を他に譲渡し、又は転貸してはならない。

第8条(許可の取消し等) 市長は、専用者が次の各号のいずれかに該当するときは、第5条第2項の許可を取り消し、又は施設の専用を停止し、若しくは制限することができる。

- (1) この条例若しくはこの条例に基づく規則又は第5条第4項の許可の条件に違反したとき。
- (2) 偽りその他不正の手段により許可を受けたとき。
- (3) 第5条第3項各号のいずれかに該当するに至ったとき。

2 市長は、公益上の理由により必要と認めるときは、前項の処分をすることができる。

3 市は、第1項の規定による処分によって専用者に損害が生ずることがあっても、その責めを負わないものとする。

第9条(立入り等) 市長は、美術・歴史館の管理上必要な限度において、許可をした専用の場所に立ち入り、専用者から必要な報告を求め、又は必要な支持をすることができる。

第10条(原状回復) 専用者は、施設の専用を終了したとき、又は第5条第2項の許可を取り消されたときは、直ちにその専用の場所を現状に回復しなければならない。

第11条(観覧料等の不還付) 既納の観覧料及び使用料(以下「観覧料等」という。)は、還付しない。ただし、次の各号のいずれかに該当する場合はその限りではない。

- (1) 災害その他観覧者又は専用者の攻めに帰することができない理由により観覧又は施設を専用できないとき。
- (2) 公益上の理由により第5条第2項の許可を取り消したとき。
- (3) 前2号に掲げるもののほか、観覧料等を還付することにつき相当の理由があると市長が認めるとき。

第12条(観覧料等の減免) 市長は公益上その他特別の理由があると認めるときは、観覧料等を減免することができる。

第13条(資料の公開) 美術・歴史館の資料の公開は、館内に展示するほかは行わない。ただし、保管する資料について特に学術上の研究調査等の目的で閲覧を求められたときは、市長が必要と認めるものに限り、閲覧させることができる。

第14条(写真の撮影等) 市長は、美術・歴史館の資料について特に学術上の研究調査の目的で撮影、印刷物等掲載、模写、模造その他これらに類する行為又は館外貸出し(以下「撮影等」という。)を求められたときは、市長が必要と認めるものに限り、撮影等をさせることができる。

第15条(準用) 第5条第2項から第4項まで、第7条及び第8条の規定は、第13条の規定による資料の撮影等の場合に準用する。

第16条(入館の制限) 市長は、次の各号のいずれかに該当する者に対して、美術・歴史館への入館を拒み、又は退館を命ずることができる。

- (1) 他人に危害を及ぼし、又は他人に迷惑になるおそれがある者
- (2) 美術・歴史館の建物、属設備、備品等を滅失し、損傷し、又は汚損するおそれがある者。
- (3) 前2号に掲げるもののほか、美術・歴史館の管理上支障があると認められる者

第17条(損害賠償等) 自己の責めに帰すべき事由により、美術・歴史館の建物、付属設備、備品等を亡失し、滅失し、損傷し、若しくは汚損した者は、直ちにこれを原状に回復し、又はその損害を賠償しなければならない。

第18条(委任) この条例の施行に関し必要な事項は、別に定める。

【付則】 この条例は、平成26年3月1日から施行する。ただし第4条から第15条までの規定は、平成26年4月1日から施行する。



開館10周年記念
研究紀要

諫早市美術・歴史館



開館10周年記念

研究紀要

目次

館長講座

芥川賞作家野呂邦暢作『諫早菖蒲日記』にみる諫早関係歴史事象 47

諫早市美術・歴史館 館長 堀 輝広

美歴こどもWEEK ～教育普及における地域連携と館の役割 56

諫早市美術・歴史館 副館長 坪内 理子

諫早の酒造り 瀬頭酒屋—瀬頭彌八の時代 61

諫早市美術・歴史館 主任専門員 川内 知子

諫早の歴史と文化の特徴 75

諫早市経済交流部文化振興課 主任 野澤 哲朗

江戸時代の土師器皿からみた諫早の祈り 80

諫早市経済交流部文化振興課 主任 野澤 哲朗

愛宕山三重塔の出土品について 85

諫早市経済交流部文化振興課 主任 野澤 哲朗・専門員 福井 遥香

諫早との関わりからみる韓国 90

諫早市経済交流部文化振興課 専門員 福井 遥香

館長講座報告

芥川賞作家野呂邦暢作『諫早菖蒲日記』にみる諫早関係歴史事象

諫早市美術・歴史館 館長 堀 輝 広

はじめに(野呂邦暢と「諫早菖蒲日記」)

令和2年度からの館長講座は、「諫早菖蒲日記と諫早の歴史」というテーマで年3回程のペースで実施してきた。「諫早菖蒲日記」は、諫早ゆかりの作家である野呂邦暢による初めての中編歴史小説である。昭和48年(1973)に執筆した作品「草のつるぎ」で、翌年第70回芥川賞を受賞したあと執筆され、昭和51年(1976)に文芸春秋が発行する月刊誌「文學界」10月、11月、12月の各号に「諫早菖蒲日記」、「諫早舟歌日記」、「諫早水車日記」として掲載された作品である。その後、昭和52年(1977)に出版された単行本では、全体を「諫早菖蒲日記」と題し、第1章、第2章、第3章として編集されたものである。

野呂邦暢は、昭和51年の月刊誌「文學界10月号」が発行される直前に「諫早菖蒲日記」について次のように述べている(昭和51年9月28日付長崎新聞)。

『諫早菖蒲日記』は安政2年(1855)、この家に住んでいた砲術指南の15歳の娘を主人公に、当時の諫早藩士の生活、主家である佐賀鍋島藩との関係、仲沖の漁師たち、黒船の来航によって焦慮する父親のことなどを書いた130枚の中編小説である。(中略)安政2年の初夏に始まった物語は翌年の春に終わる。(中略)資料はおもに※諫早市史全4巻によった。当時の記録がなまの文章で引用されているのが有難い。(中略)諫早はわが国の歴史ではなばなしい役割を果たしていない。特記するに足りるこれといった事件も起っていないし有名な人物も出ていない。だからといって歴史小説の素材にならないという理屈は通用しない。いまから120年ほど前の諫早には何があったか。当時の藩士は何を考え、どんな言葉をしゃべっていたか。このようなことを考えるのはたのしい。(中略)歴史に登場しない諫早藩も鍋島藩の命で長崎港警備を担当している。西泊、戸町など十数ヶ所に砲台を築いて黒船に備えていた。(中略)砲術指南は長崎出張の折り奉行所で外国の形勢はもれ聞いている。情報は現代の日本人が考えるほど乏しかったわけではない。」(※諫早市史:江戸時代に諫早家が記した「諫早日記」等をもとに編纂され昭和30年3月30日発行)

また、昭和52年4月発行の単行本でのあとがきでは次のように述べている。

「私がいま住んでいる家は、本書の主人公藤原作平太の娘志津がくらしていた家である。明治38年に建てかえられたのであるが、(中略)この家の家主さんA夫人と私は同じ棟に住んでいる。ふとしたことで土蔵に御先祖の古文書がしまわれていることを知り、秘蔵の砲術書や免許皆伝の巻物などを見せていただいた。(中略)120年前、諫早藩鉄砲組方の侍たちが砲術を学び、その術を口外しないこと、また奉公に懈怠なきことを誓って署名血判した誓紙もあった。(中略)初めての歴史小説ゆえ資料考証に万全を期したつもりであるが、あやまちが皆無とはいえない。故意にフィクションをまじえた個所もある。しかし物語の大筋に虚構はない。(後略)」

これらの記述から以下のことがわかる。

- ① 野呂邦暢は、砲術指南役の家に伝えられていた古文書を目の当たりにしていること。
- ② 物語の舞台は、安政2年(1855)初夏から安政3年(1856)の春までの諫早であること。

- ③ 歴史事象の資料考証は、主に「諫早市史」によること。
- ④ 幕藩体制の中で諫早領主と諫早家臣がどのように考え、行動したかを記述していること。
- ⑤ 諫早家は長崎警備を務めるとともに、幕末の黒船来航は、諫早領にも少なからず影響があったこと。
- ⑥ 「諫早菖蒲日記」には、資料考証で過ちがあったかもしれないことやフィクションも含まれていること。

1 館長講座のテーマを「諫早菖蒲日記と諫早の歴史」に設定した理由

「諫早菖蒲日記」(以下「小説」と表記する。)を読むきっかけとなったのは、令和元年度の当館を会場として行われた「菖蒲忌」(野呂邦暢を顕彰する催し)であった。その中で市内高校生による小説の一部朗読が行われたが、その内容に感銘を受けたからである。小説を読んでみると、当時やそれ以前の諫早での出来事、主家である佐賀鍋島藩との関わりなどが多数記されている。中でも、野呂邦暢も記しているように「我が国の歴史においてはなばなしの事柄」ではないが、まぎれもなく諫早の歴史の1頁をなす事象もある。例えば、「諫早家が保有していた船は?」「奥女中はどのように選考し御役を解かれた奥女中はどのような処遇をなされたか?」「諫早での佐賀藩主の蛸見物は?」などである。そのような事象もやはり諫早の歴史なのである。小説に記述されているそのような歴史事象をきっかけにして、詳細を調べ、市民にそれを伝えることで諫早の歴史に少しでも触れてもらいたいと考え、講座のテーマを「諫早菖蒲日記と諫早の歴史」とすることとした。

2 小説に綴られた内容をきっかけにした筆者が考える諫早関連歴史事象

小説に綴られている歴史事象の項目(項目名は筆者が設定した)は次の通りである。

	諫早内の歴史事象	佐賀藩関係の歴史事象	江戸幕府関係の歴史事象
第1章	● 諫早家の保有船と注進	● 佐賀藩から命じられた長崎警備	● ロシア軍艦4隻長崎入港
	● 安勝寺の時の鐘	● 長崎港に据えられた台場	● 伊能忠敬の諫早領測量
	● 五反屋敷の辻での業柱抱き	● 漢方医から蘭方医へ	● 品川台場の築造
	● 平松神社近くの城跡	● 佐賀藩の新式砲導入	
	● 伊佐早氏と船越氏	● 諫早領の減地(蔵入地)	
	● 伊佐早を領していた百済人の末裔	● 諫早一揆(騒動)	
	● 平松神社の創建	※第3章に詳細な記述あり	
	● 高城廃城と諫早家御屋敷	● 諫早一揆「酒屋七五郎」	
	● 諫早のまだら節	● 龍造寺家と鍋島家の関係	
	● 本明川での蛸狩り	● 御親類同格の諫早家 (佐賀藩家臣団組織)	
	● 島原の乱への諫早家の対応		
	● 諫早家の砲術御前流儀		
	● 諫早家中への内職奨励		
	● 諫早西洋新式銃購入の件		
	● 江戸時代の諫早の水害と 諫早家の対応		
	● 領内での煙硝づくり(屋敷で)		
	● 佐賀諫早屋敷の奥女中選考と 役を退いた奥女中の処遇		
	● 田圃の虫追い(実盛虫)		

第2章	<ul style="list-style-type: none"> ● 諫早での家臣の切腹 ● 佐賀藩士への無礼御法度 ● 諫早での白帆注進(長崎仕組) ※第3章にも記述あり ● 諫早日代野での調練 ● 諫早領主の倭約 ● 諫早の郷校「好古館」 ● 龍造寺家晴公の伊佐早討ち入り ※第3章にも記述あり ● 魯西亜記 ● 西郷氏の出自 	<ul style="list-style-type: none"> ● 佐賀藩興行元の万人講 ● 佐賀藩の洋式砲の導入 (武雄領主鍋島茂義) ● 佐賀での銃隊大調練 ● 佐賀藩主の諫早虫見物 	<ul style="list-style-type: none"> ● 米沢藩(渡部主水) ● 高島秋帆による江戸での洋式調練 ● 高島秋帆 ● フェートン号事件と佐賀藩への処罰、茂圖公の対応 ● 長崎港口の警備
第3章	<ul style="list-style-type: none"> ● 柿渋の利用 ● 絹物の御法度 ● 寛政の島原大地震と諫早家の対応 ● 諫早庶民の婚礼 ● まだら節の由来 ● 諫早領での天然痘対策 ● 龍造寺氏の系譜 ● 白帆注進百挺鉄砲 250人駆け出し ● 諫早家家臣の江戸参府 	<ul style="list-style-type: none"> ● 西洋新式火術奨励の達し ● 佐賀藩砲術「円極流」に統一 ● 佐賀藩火術方の蘭館訪問 ● 長崎台場での発射調練(佐賀藩独自の長崎台場) ● 佐賀藩の天然痘対策 	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸表の大地震と被害 ● 欧州の争いとオランダの衰退

3 小説に記述された歴史事象から深化させ講座で取り上げた内容例

講座では、前項3で示した項目について、小説に記された内容を掘り下げた内容にしてきた。ここでは、第3章内の項目として挙げた「寛政の島原大地震と諫早家の対応」を例に紹介する。

小説では、藤原家の下男吉爺が、主人公志津へ以下のように話している。

『島原はこのごろさいさい地鳴り鳴動しますげな、寛政の島原大地震は吉が物心つかぬ時分のことでごんした』

下線は、所謂「島原大変、肥後迷惑」といわれた寛政4年(1792)の雲仙普賢岳の噴火と眉山崩壊により発生した災害を指している。小説に記述されている内容はこれだけであるが、諫早領とは隣藩の島原藩で発生したことから次のような疑問が生じる。

- ① 諫早領でも被害が生じたのではないか。
- ② 諫早家による何らかの対応があったのではないか。

「諫早市史」を調べると①、②について記録されていた。(一部抜粋・筆者整理)

(1) 「①諫早領でも被害が生じたのではないか。」について

○寛政4年(1792)3月1日暮れ六ツ時(午後6時頃)、諫早地方に大地震が起こった。

- ・最初の大地震で諸寺社の石塔や石灯籠が歪み倒れたところもあり、諸屋敷の石垣がわずかずつずれを見せ崩れたところもあった。
- ・古町の石橋(眼鏡橋ではないが本明川に架かっていた石橋)の梁が二本折れ目が生じたが落ちてはいない。

・2日の夜明けまでに約10回の地震があり、2日、3日、4日も絶えず家鳴りを起こす地震の連続であった。

○唐比(諫早市森山町唐比)は5日朝2度の地震が起った。

・愛津(現雲仙市愛野町)も同様だったが、崩残りの石垣は皆崩れ水は皆泥水のようになった。

○5日までに天祐寺の諫早家墓地の石塔、石灯籠がほとんど倒れていた。お屋敷練堀も一部倒壊した。

○3月1日夜の津波で竹崎は手強い損害を蒙った。(※津波も発生していることがわかる。)

・竹崎は死人怪我人が出て家屋家財の被害も多く、細民達は早速食料に困り救済分を申請した。

○3月10日附で佐賀に送られた唐比村の被害状況

・倒壊家屋11軒、石垣被害延長70間位、煉堀倒れの家30軒、同灰小屋倒壊83軒、呑水は全て濁り、使用されているのは村中の一ヶ所のみである。

○4月1日夜五ツ頃、普賢岳が再び大爆発。(※「島原大変、肥後迷惑」大津波の要因)

・東目筋(長田・高来・小長井・太良の有明海沿岸)は、大汐にて竹崎津其外破損した。

・汐は三度打ち返したが其内最初が一番ひどかった。大汐大風波で海上に火が見え西向きに来たようであった。

・海岸を打崩し、家屋の全壊が11軒、他は残らず半壊、男女3人が死亡、内2人の屍骸は不明。

・船の破損や行方不明は判らない。

・御番所は押し流されたが、道具や印鑑掛札は紛失していない。

・潮は平生より約7尺高く来て、小川原は津方人家、橋、繫船などは大破した。

○4月2日東目の被害視察者からの報告。

・竹崎の溺死者の検分が済み、筆紙でつくせない厳しき。

・半壊家屋も人は住めない。土は盤土ばかりになったところが多い。

・御番所は石垣が大崩れを起こし、死人は西の平の者で老人の女2人、3歳の子供が1人。

以上の記述からわかる通り、諫早領内においても、輪内(高城周辺の武家屋敷など)や島原領に接する唐比や竹崎などの有明海沿岸地域において被害が出ている。特に寛政4年4月1日に発生した普賢岳大爆発・眉山崩壊後に起きた大津波は、有明海沿岸の村に甚大な被害をもたらしたことがわかる。

(2) 「②諫早家による何らかの対応があったのではないか。」について(※報告書等の内容は概略)

○(寛政4年(1792)3月)4日に至って唐比御番所詰の家臣から報告書。

・島原藩松平家やその家臣及び島原市中の領民の避難の状況。

・長崎へ向かう避難民の宿の提供について諫早家役所への指示を仰ぐ。

○3月4日、情報を集めに行った唐比の庄屋の報告。

・城下は御家中・領民も皆避難。前山は漸次崩れて城内に落ちてきている。

○3月5日に島原へ出張した御目付の7日報告。

・島原藩松平家家族の避難(山田村から守山村へ)

・島原街道の避難者の様子。

・城下近くの海岸から見た普賢岳の様子と山崩れによる島原の様子。

・城下の地割れや島原城の様子。

○3月8日付諫早郡方から島原藩へ飛札にて公文書を送る。

・諫早家郡方役中中島九左衛門は島原役中へ御様子承りたく、また島原藩からの何かの要請があれば受け賜るとの内容。

○神代(佐賀藩神代領)まで視察に派遣された家臣の報告書。

・神代へ逃げ込んだ島原領民。



(国土地理院地図利用)

- ・溶岩流の状況。
- ・諫早領主の使者。
- ・普賢岳頂上の様子。
- 3月15日諫早から島原に正式な見舞いの使者派遣。
 - ・使者は早田嘉(※喜)左衛門主従と馬一匹である。
 - ・島原藩主への口上。(島原藩主(主殿頭様)ますますご健勝のこととお喜び申し上げる。さて、御領内普賢岳の噴火の件を承知しており、御機嫌はいかがかと使者を送りました。)
- 3月28日島原藩から見舞いへの答礼あり。
 - ・諫早では田町の山崎源太夫宅に着き宿泊。歓待が行われた。
- 4月1日夜五ツ時頃(午後7時頃)普賢嶽大爆発。大津波発生。三往復。
- 4月2日朝、諫早から「末次恰」を神代、島原へ派遣、翌3日には更に宮崎此面を派遣。
- 「末次」からの第1報。
 - ・2日に森山まで行き島原の様子を問合わせする。(誠に言語道断の大惨事)
 - ・神代郡代へ書状を出す。
 - ・森山へ逃げて来た者からの島原城下の様子を聴取。
- 4月4日付「末次」からの報告。
 - ・神代村着。宿泊先の領民から神代から多比良までの状況聴取。
 - ・神代内の被害状況。
 - ・明早朝、島原へ向かう。
- 4月4日島原に片田江理助(※諫早家番頭?)外従者を使者として島原へ派遣。
 - ・5日九ツ頃森山着。
 - ・島原藩使者の宿は三寶村(※三室村ではないか?現:雲仙市吾妻町)農民宅。そこで役を果たす。
- 4月5日付「末次」からの後便(報告)。
 - ・島原へ赴く途中の被害状況。
 - ・島原城下の被害状況。
 - ・前山からの大崩れの状況。(視察に行こうとしたが危険で断念)
 - ・佐賀からの視察員派遣情報。
- 森山村に出張った末次が4月2日に神代郡代伊藤左衛門へ送った問い合わせの返事。
 - ・4月1日夜五ツ頃津波がきたので、神代浜辺の家大破し往還筋に困難な所もある。
 - ・島原の様子は御城は別條ないが市中は悉く打流され、残る家は78軒、死人は分からない。
 - ・三會村か土黒村まで浜辺の家は一軒残らず流され、死人はまだ判明しない。
 - ・主殿頭や御連枝、御家中は残らず昨2日島原を立退き、森山村山田村へ御退座である。
 - ・誠に前代未聞の大変災で言語に絶するものがある。
- 4月5日島原の「末次恰」から藩廳(諫早会所)の中島久左衛門に急用の書状。
 - ・病人怪我人が沢山いるので内科外科の医師を急いで神代まで送るよう要請。
- 又同日付(4月5日)の別便。
 - ・主殿頭はじめその外皆船がないので諫早から早船を2艘借り受けたいとの相談があった。
 - ・神代家中江田勘兵衛から末次恰へ明6日の神代領家臣90人の宿泊申し込み。(諫早から警固派遣)
 - ・諫早領内へ島原領から避難の者は、4月6日迄に宗方村へ1人、福田村へ3人、中町へ4人。
- 島原藩からの苗代援助の申込と竹崎への援助。

・差し迫る田植時の苗代がない。島原藩役所から申込みに応じ、有喜と唐比で苗を仕立てる。

・津波の大被害地である竹崎について、佐賀藩からの補助を願い出る。

○島原藩主の死去。

・5月8日に死去(※島原藩主松平主殿頭)が発表される。

・諫早藩では8日に主殿頭重体と聞き容態伺いの文笥を送ったが、直ぐに弔礼を送った。

・主殿頭は出身地(参州深溝(※三河。現:愛知県西尾市))へ送られることになり、諫早通過は5月26日で本陣は慶巖寺と決定した。

・26日は梅雨の雨天で本明川は水流が増していたが渡した。

以上の記述から、諫早家の対応を整理すると

■家臣派遣や神代領家臣等からの島原藩領内の普賢嶽噴火や眉山崩壊にかかる被害情報収集

■諫早領内や長崎へ避難する被災者への宿の世話

■諫早家から島原藩への状況確認と見舞いなどの書状と訪問

■神代や島原へ医師派遣

■島原藩への諫早家船の貸出

■島原藩への苗代の援助

■島原藩主死去に伴う弔礼

■島原藩主遺骸を生誕地へ送る際の諫早通過時の本陣と川渡り

小説には『寛政の島原大地震』があったことだけ記されていたが、①、②の疑問を持ち調べてみると、諫早家にとっても被害は甚大であり、その上で他藩他領での大災害に対し、家臣等を送り被害状況の情報収集・確認をするとともに、その結果から、島原藩主・家臣・領民の安寧を慮っての対応がなされていたことがわかった。

これらのことを館長講座を通して受講者へ伝えることは、単なる知識だけではなく郷土諫早への誇りや愛着をもってもらおうといった点においても、価値ある講座内容となったのではないかと考える。

4 年代を変更した事象、年代を誤認した事象、人物を変えて表現した事象の各例

(1) 時代を変更し記述されている事象(例)

○小説第2章内「佐賀表での大調練」

小説内では「佐賀表でもまもなく銃隊大調練がある。鍋島様の支藩である小城、蓮池、鹿島の組方ものぼってくる由である。(本記述から数頁後に調練の詳細も記述されている。)」というものであり、諫早家の調練が称賛され、諫早家15代武春公も喜ばれたという内容である。

つまり、小説の舞台である安政2年(1855)に実施されたことになっている。それに対し「諫早市史(諫早日記)」には、内容は小説の記述とほぼ同じだが、諫早家第16代一学(茂陳)公の御代である元治2年(1865)の佐賀での大調練が記録されている。

佐賀藩主の命令で佐賀表まで部隊を派遣しなければならない諫早の状況や大調練が終了し諫早に戻ってから砲術指南役である父「藤原作平太」が居室に引きこもり報告書を作成する苦勞など、当時の武士の勤めも表現されている。

※参考: 上記と同様「時代を変更して記述」されている項目

「諫早家中への内職奨励」、「諫早領主の儉約」、「諫早目代野での調練」、「魯西亜記」、「佐賀藩主の諫早虫見物」

(2)年代を誤認したと思われる事象

○小説第1章内「ロシア軍艦4隻長崎入港」

野呂邦暢は、「実は第一部(第1章)で私は安政元年の初夏と設定するあやまちをおかした。書いた後に気づいたのだが嘉永7年から安政と改元されたのは11月である。当然、菖蒲が咲くのは安政2年の初夏でなければならない。」と述べている。

小説の冒頭の記述に、「去年の暮れ、嘉永の御代が安政となりかわってからは・・・」とあり、その後「ただならぬのは佐賀とかぎらず長崎もそうである。去年入港したロシアの軍艦四隻が去ったのはようやく今年に入ってからである。」とロシア船の長崎入港に関して記述されている。この記述を小説の舞台となった年に当てはめると、「去年」は「嘉永7年又は安政元年」となり、「今年」は「安政2年」ということになる。

しかし、このロシア船の長崎入港、つまり「プチャーチンの長崎来航」のことだとすると、1回目の長崎来航は「嘉永6年(1853)7月18日」。一端出航し2度目の来航は「嘉永6年12月2日」、そして出航は「嘉永7年(1854)1月8日」である。野呂邦暢がおかしたあやまちは、この事象のことかもしれない。(但し、プチャーチンは、その後下田に来航し、戸田村(現沼津)を出航している。この時期は、小説の記述に合致する。)

(3)人物を変えての表現(例)

○小説第2章内「諫早における諫早家家臣の切腹」(※時代の違いもある)

小説(舞台は安政2年)では、佐賀藩が講元となる「万人講(現在の宝くじのようなもの)」が安勝寺を拠点として行われることになった。諫早家家臣の間では反対論もあったが、先に領主武春公が認めていたことや佐賀藩からのお達しとあっては受けざるを得なかった。安勝寺で佐賀藩担当家臣との打合せの役目を反対者の一人でもあった好古館剣術指南役であり御蔵出入役の「野村六兵衛」が担う。その時、安勝寺境内で、野村六兵衛が「お上のお達しであればやむをえない。」と言ったことに立腹した佐賀藩の役人が、刀を抜き六兵衛の髻を払ったのに対し、野村六兵衛が応戦したことで刃傷(佐賀藩士重傷)沙汰になってしまう。諫早では「佐賀藩の武家からどのような無礼をはたらかれても一切反抗してはならない」との達しが出ており、結果「野村六兵衛」は咎められ切腹の命令がくだされる。検使役(切腹を執行する係役長)は志津の父「藤原作平太」であった。そして、志津にその様子を話して聞かせる場面で、切腹の様子を紙幅をさいて解説している。

「諫早市史」には、1巻第9章「過失、犯罪者の処分」第1節「切腹の措置」で諫早家の家臣の切腹について記述されている。寛政4年(1792)8月21日(小説の約60年前)、諫早家家臣が、同家臣『末次恰』(寛政の島原大地震の際に島原へ派遣された家臣)の弟『國助』を刃傷した罪で切腹を仰せつけられた記録である。詳細は省略するが、「切腹」のための係役、切腹の手続き、しきたり、状況(係役の動きや言葉)が記され、検使役(係役の長)の心得も追記されている。切腹となった家臣(本人)や原因は違えども、「切腹」に係る内容は小説の記述と大きくは変わらない。

野呂邦暢は、「諫早市史」のこの記述をもとにして、「万人講」と「切腹」を関係づけ、佐賀藩からの命令に抗うことが難しい諫早家の置かれた立場を表現したかったのではないかと推察する。

※参考:この他の人物を変えての表現 「諫早家の砲術御前流儀」

※(1)、(2)、(3)以外に、“理由の違い”(小説第1章「高城廃城と諫早家御屋敷」)、“人物の発言の違い“(第1章「諫早一揆『酒屋七五郎』)、“内容を総合的に表現“(第2章「江戸時代の諫早の水害と諫早家の対応」)、“場所の違い”(第2章「田圃の虫追い」)が見られる。

5 各講座で解説した項目

令和2年度以降の館長講座で取り上げた内容は以下のとおりである。

	第1回	第2回	第3回	第4回
令和2年度	<ul style="list-style-type: none"> ● 諫早家の保有船と注進 ● ロシア船プチャーチンの来航 ● 時を知らせる安勝寺の鐘 ● 業柱抱き ● 伊佐早氏と船越氏 ● 佐賀藩から搾取される諫早領 ● 漢方医から蘭方医へ ● 伊能忠敬の諫早領測量 ● 諫早のまだら節 ● 諫早の蛸 ● 江戸湾のお台場 	<ul style="list-style-type: none"> ● 島原の乱と諫早領 ● 諫早一揆(騒動) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 鍋島家の主であった龍造寺氏 ● 諫早一揆「酒屋七五郎」 ● 諫早家の砲術御前流儀 ● 諫早家中への内職奨励 ● 大水害の状況と諫早家の対応 ● 煙硝・佐賀藩の反射炉 	<ul style="list-style-type: none"> ● 西郷氏の出自 ● 龍造寺家晴の伊佐早討入(概要) ● 諫早家の弓組 ● 佐賀諫早屋敷の奥女中 ● 田圃の虫追い
令和3年度	<ul style="list-style-type: none"> ● 諫早万人講 ● 高島秋帆について ● 佐賀藩士への無礼御法度 ● 諫早家家臣の切腹 ● 佐賀藩親戚家老以下への緊縮令 ● 長崎仕組 	<ul style="list-style-type: none"> ● 諫早での調練 ● 佐賀での大調練 ● 西洋銃の導入 ● 諫早領主の節約 	<ul style="list-style-type: none"> ● 龍造寺家晴の伊佐早討入(詳細) ● フェートン号事件 ● 正保4年(1647)ポルトガル船入港 	
令和4年度	<ul style="list-style-type: none"> ● 皮革の取り扱い ● 諫早の農民への儉約令 ● 寛政の島原大地震と諫早家の対応 	<p>※特別講座</p> <p>西九州新幹線開業記念 諫早市友好交流都市 出雲市・津山市「三市交流展」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 佐賀藩主の諫早蛸見物 ● 佐賀藩主の長崎勤番と諫早勇太郎(13代茂喬) ● 魯西亜記とロシア船長崎入港(レザノフ)の様子 	
令和5年度	<ul style="list-style-type: none"> ● 江戸表の大地震 ● 佐賀藩西洋砲術導入 ● 佐賀藩砲術「円極流」 ● 佐賀藩の大砲製造に係る鑄造技術研究 ● 嘉永7年江戸幕府による長崎港台場巡視 	<ul style="list-style-type: none"> ● 抜け荷 ● 安土・桃山時代頃の西洋の状況 ● 佐賀藩及び諫早領での天然痘への対応 	<p>【予定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 龍造寺氏の系譜 ● 諫早領主と家臣の江戸参府の様子 	



おわりに

これまで「諫早菖蒲日記」に記された歴史事象の中で、年代の誤認、人物を変えて違う事象を組み合わせたの記述(万人講と切腹)、年代を変えての記述など、厳密に言えば史実との若干の違いを思わせるものもあったが、小説の「流れ」の中で諫早に関する歴史が多く盛り込まれ、諫早等の歴史事象を知ることへの探究意欲をいささかも阻害するものではない。野呂邦暢は、「フィクションもある」と明確に述べている。むしろ、野呂邦暢という作家が、この小説の執筆に際し、諫早市史や他の資料(佐賀藩火術方による「松乃落葉」等)を精査し、詳細な内容については間違いのない歴史事象であることに驚くばかりである。それらを小説の中に無理なく取り込み、物語を紡ぎながら、幕末の安政の御代を舞台とした諫早家の様子、主人公志津や父藤原作平太等の登場人物の思いなどを表現している。「諫早菖蒲日記」は、歴史小説としてのだけでなく、「諫早の歴史を知る上で素晴らしい『道標』になる小説」としての味わい方もあるのではないだろうか。

美歴こどもWEEK～教育普及における地域連携と館の役割～

諫早市美術・歴史館 副館長 坪内 理子

はじめに

諫早市美術・歴史館は、平成26年3月1日に開館し、今年度で10周年となる。

開館に先立ち、平成22年に作成された『(仮称)歴史文化館 建設基本構想』の基本理念の中に『周辺に点在するさまざまな歴史的文化的な遺産や豊かな自然、図書館などの公共施設と連携し、市全体をひとつの「エコミュージアム」ととらえ、これらを総合的に結びつける交流拠点』との表記がある。

この「エコミュージアム」の取り組みとして、「美歴こどもWEEK」を令和4年度と5年度に実施した。

当館の企画展の来館者は、中高年が中心であり、小中学校の学校単位での来館や小中学生の作品を展示する「小中学校科学展」「小中学校美術展」以外では子どもや子育て期の家族の来館が少ない現状がある。

そういった世代へ美術・歴史館を周知するとともに、周辺環境を活かしたエコミュージアムの要素を取り込み、体験を通して美術や歴史を学ぶ機会を創出する「美歴こどもWEEK」から、当館の役割を考察する。

1 周辺環境、時代背景

諫早市美術・歴史館は、市の中心部に所在しながら、近隣には、国指定天然記念物諫早市城山暖地性樹叢の諫早公園や上山公園、一級河川の本明川があり、自然環境に恵まれた立地にある。

また、その諫早公園内には、国指定重要文化財の眼鏡橋が、館収蔵品には、国指定有形文化財エーセルテレカレフ(寄託)、県指定有形文化財大雄寺の十一面観世音菩薩坐像や金泉寺の不動明王と二童子立像があるなど、本市の歴史的文化的な遺産が多く存在している。

さらには、芸術文化に長けた関係団体など市民の協力が得られる体制があり、人的な環境にも恵まれている。

令和2年に突如として世界を襲った新型コロナウイルス感染症。美術・歴史館も波が押し寄せるたびに休館や開館時間の短縮を実施した。

しかしながら、元来、美術館や図書館は、静かに過ごす空間であることから、スポーツ施設など他の公共施設と比較し、早い段階で使用自粛の緩和が可能となった。

令和4年の春は、第6波の終息時期であり、「ウィズコロナ」という言葉が使われるようになった時期である。世間では、まだ、行動を自粛しながらも、こどもたちにのびのびと活動させる場がないか模索を始めた時期でもあった。

こうした周辺環境や時代背景があったことが、「美歴こどもWEEK」を企画立案するきっかけとなった。

2 館の特長を活かした子ども向けプログラム

美歴こどもWEEKのプログラム作成にあたっては、館の特長を活かし、美術、考古、歴史と3分野に日程を分けて

組み立てた。その際、心がけたことは次の5点である。

① 周辺環境を活かす

美術・歴史館の隣接地にある、諫早市体育館や諫早公園も活用した。また、諫早公園近くの本明川河川敷を臨時駐車場とした。

② 市内の様々な分野の様々な団体の方々と連携する

体験プログラムとして、諫早市美術協会書部による揮毫体験、諫早いけばな連盟によるいけばな体験、プロカメラマンによる映えるスマホ講座、諫早青少年自然の家によるまちDAYキャンプ・火起こし体験・昔遊び、茶道裏千家淡交会長崎青年部による春の茶会を実施した。

連携イベントとして、諫早市子ども大会、ルノンマルシェ、森と泉のコンサートを諫早公園での開催を誘致した。

また、館内全体を周遊するイベント「うないさんを探せ」では、諫早のゆるキャラ「うなぎの妖精うないさん」に出演いただいた。

さらに、ボランティアスタッフとして、鎮西学院大学の学生ボランティアの協力を得た。

③ ちょっと知的な体験プログラムとする

当館専門員によるコラージュ制作や歴史巻物づくり、端午の節句工作、文化振興課専門員による貫頭衣づくりや勾玉アクセ・土器づくりでは、それぞれの分野の担当者が創意工夫を凝らした体験プログラムとし、解説も実施した。

④ 子どもの日を含むゴールデンウィークに実施する

会期は、5月3日から5日までの3日間。館内外を活用し、晴天時でも雨天時でも活動できるプログラムとし、子どもたちがのびのびと過ごすことができる空間を創出した。

⑤ 魅力的なプログラムとすることで、美術・歴史館の周知を図る

職員が一丸となり試行錯誤を繰り返し、魅力的なプログラムを組み立てた。

企画展を同時期に開催することで、子どもや子育て期の家族が企画展を鑑賞するきっかけづくりとした。

また、チラシを市内の全小学生に配布するなど、広報活動にも力を入れた。

周辺環境を活かした取り組みとして、もっとも際立っていたものが諫早市子ども大会であった。

第57回目となる諫早市子ども大会は、これまで、県立総合運動公園のソフトボール場を会場としていたものを諫早公園に誘致して実施された。諫早公園は、戦国時代の山城址を公園化したものであるため、テーマである「続・忍者の修行-潜入!諫早城の巻-」にぴったりのシチュエーションとなった。

歴史博士(当館専門員)による説明で諫早の歴史を学び、戦国時代に思いをはせ、忍者の修行と銘打たれた修行体験をしながら本丸(山城址)を目指す。新緑の諫早公園を縦横無尽に飛び回る子ども会の忍者の修行風景はテレビでも紹介され、まちなかに自然がある諫早の恵まれた環境のアピールにつながった。また、諫早市子ども会育成連合会の経験と企画力とチームワークは圧巻であった。

美歴こどもWEEKの最大の強みは、様々な分野の様々な団体の皆さんの協力が得られたということである。

館主催イベントとして、揮毫体験やいけばな体験は初めてのことであったが、諫早市美術協会書部や諫早いけばな連盟の皆さんの指導助言のもとスムーズに進めることができた。映えるスマホ講座や春の茶会についても同様



続・忍者の修行



揮毫体験

で、専門家のノウハウを伝授いただきありがたかった。

館の展示物を観ながら、館全体を周遊してもらうための取り組みとして、「謎解き×美術・歴史館」と「うないさんを探せ!」を実施した。「謎解き×美術・歴史館」は小学校高学年向きに、「うないさんを探せ!」は未就学児や小学校低学年向きに作成した。

謎解きゲームや脱出ゲームは近年たいへん話題となっている。難易度がやや高めの設定の方がリピート率が高いようであったため、「謎解き×美術・歴史館」は、美術・歴史館常設展示室の展示にヒントがある、諫早の歴史や美術、民俗の謎を出題したが、難しすぎるとの声もあった。

「うないさんを探せ!」は、小さい子どもが保護者と楽しく館内を周遊するゲームとして、大小さまざまなうないさんが館内に隠れているものを探す内容とした。うないさんは、キーホルダーやステッカーのイラストと、運がよければ、本物にも会える、楽しい内容となった。

館の特長がアピールできた取り組みとしては、学芸員資格を持つ当館と文化振興課の専門員が創意工夫した、ちょっと知的な体験プログラムであった。

切って貼って想像力を刺激したアート体験のコラージュ制作や新聞紙を折って作った端午の節句工作の兜は、祖父母世代からも大変好評であった。

大きいビニール袋に古代文様をマジックで書き、頭と腕の部分のビニールをハサミで切って作ったコスチューム「貫頭衣」を着て、勾玉アクセサリを首にかけ、弥生人になりきったファミリーが諫早公園芝生広場に数多く集い、諫早青少年自然の家の皆さんによるまちDAYキャンプで、火起こし体験やハンモック体験、竹馬などの昔遊びをしている様子は、まさに、非日常体験であった。



いけばな体験



うないさん



コラージュ制作

3 美術展を平行して開催

美歴こどもWEEK開催時に合わせ、令和4年度は「葛飾北斎 富嶽三十六景展」を、5年度は「諫早の美術家展」を開催した。

令和4年度の「葛飾北斎 富嶽三十六景展」は、江戸時代後期の浮世絵師で、世界的にも著名な日本画家である葛飾北斎の晩年の代表作富嶽三十六景の全46図を展示した。

令和5年度の「諫早の美術家展」は、美術・歴史館開館10周年を記念し、諫早で活動している現役の美術家153人の作品155点を展示した。諫早に多くの芸術家が存在し、素晴らしい作品を創出されていることを周知するとともに、幅広い年代層が鑑賞する機会となった。中には、家族3世代が一緒に来館し鑑賞する姿も見受けられた。

普段、美術展に行かないけれど、子ども向けのプログラムがあったので、美術・歴史館に行ったら美術展が開催中だった。鑑賞してみたらとてもよかった。これからもまた時々、美術・歴史館に行ってみようかと思う。そういうきっかけになったのではないかな。

そう考えたのは、自分の子育て期に美術展を鑑賞する機会がなかったこ



弥生人のコスチュームでガラポン抽選会



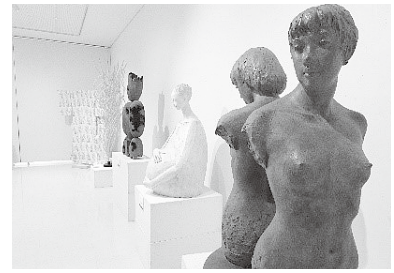
諫早の美術家展 洋画部門

とが一つの要因である。

まだ、美術・歴史館が建設される前ではあったが、他市の美術館にも行こうとは思わなかった。

しかし、子どもの情操教育にいい体験や経験をさせたいという思いはあったので、童謡コンサートや子ども劇場などでは音楽や演劇に、図書館では絵本や紙芝居に触れさせる機会は作っていた。

では、なぜ、美術館に行こうと思わなかったのか。美術館がどこにあるのか、美術館にはどんな展示がされているのか知らなかったというのが一番大きな要因である。



諫早の美術家展 彫刻部門

おわりに

令和4年5月、美歴こどもWEEKの開催時期は、第6波が落ち着きはじめ、感染症に留意しながらも外出やイベント参加を模索し始めた時期であった。しかしながら、他県への外出はまだ少ない時期でもあった。

市内、県内の新型コロナウイルス感染症罹患者数のニュースを見ながら、開催の可否を模索した。「波は落ち着いた、谷間なのは。ゴールデンウィーク、子どもの日、コロナ禍の混沌とした時代に育つ子どもたちが、自由にのびのびと体験や経験ができるプログラムをやるなら今だ!!」スタッフの想いが一致した。

天気予報は快晴。天気が味方してくれている。それだけで十分。

開館時には入口に開館待ちの列ができた。

3日間で約1,200名の来館があった。

まだ3密を避ける必要がある時期であったが、たいへん賑わった。

みんな、元気に楽しい体験ができたと好評であった。

たまたまコロナの波の谷間で、出掛けたいが市外には外出しにくい時期だったため、市内からの来館者数が多かったのではと推測した。



端午の節句工作 兜

令和5年は、ゴールデンウィーク明けから、新型コロナウイルスの感染症法上の分類が季節性インフルエンザと同等の「5類」に引き下げられることが報道された。

いよいよ「アフターコロナ」、イベント関係はコロナ前と同様に、市内県内で再開され始めた。県外へも遠慮なく出掛けられる雰囲気になってきたため、集客減は避けられないと思っていたが、3日間で約900人と多くの来館があった。

子どもや子育て期の家族は、体験型のプログラムを望んでおり、その情報を探していることが明確になった。

本市は人口13万人ほどの中規模のまちでありながら、図書館や公民館、文化施設が充実した、「子育てのまち」「生涯学習のまち」であることをどれほどの市民に周知できているのか。

では、当館は、どうあるべきか。

職員は最大限の創意工夫をしながらも、館内に留まらず、様々な地域の団体と連携することで、体験や創造の可能性が何倍も広がる。建設基本構想の基本理念に描いた交流拠点としての役割の重要性和必要性を感じた。

恵まれた環境に立地し、美術や郷土の歴史を担当する当館の役割として、今後も魅力的な企画展やイベントを継続的に企画開催し、市民文化の向上や地域経済の活性化を図っていきたい。

そして、様々な媒体を活用した告知を行うことで、次代を担う子どもや子育て期の若者から高齢者まで幅広い層に伝わる情報発信を続けていきたい。

美歴 2022
非日常体験 知的好奇心を呼び覚ませ！
美歴 2022
5/3火 - 5/5水
10:00-15:00
観覧無料

諫早市美術・歴史館
〒854-0014 諫早市小瀬町2番33号
TEL:0957-24-6677

「美歴 2022」のチラシ：A3両面三つ折り

DAY 1 5/3 火 芸術は爆発だ！
DAY 2 5/4 水 芸術は爆発だ！
DAY 3 5/5 木 江戸時代にタイムスリップ！

3火
4水
5木
3日間開催

美歴 2023
非日常体験 知的好奇心を呼び覚ませ！
美歴 2023
5/3火 - 5/5水
10:30-15:00
観覧無料

諫早市美術・歴史館
〒854-0014 諫早市小瀬町2番33号
TEL:0957-24-6677

「美歴 2023」のチラシ：A3両面三つ折り

DAY 1 5/3 水 芸術の日 集まれ！未来の技術家
DAY 2 5/4 木 芸術の日 変身！おしゃれに弥生人！
DAY 3 5/5 金 芸術の日 めげせ！ものづくり職人！

3水
4木
5金
3日間開催

諫早の酒造り 瀬頭酒屋－瀬頭彌八の時代

諫早市美術・歴史館 主任専門員 川内 知子

この稿は昭8(1933)年頃まで諫早瀬頭酒屋の杜氏の一人であった故田中仁さん(明治37(1904)年生北高来郡森山町慶師野名)より当時の酒造りについて採訪したもので、昭和初期の諫早の酒造りをうかがえる資料である。

はじめに

昭和初め頃、諫早には中島、竹下、毎熊、瀬頭の酒造場があった。中島は田川酒場、木下酒場、溝上酒場を経て大正5(1916)年頃から、竹下は藤瀬酒場を引き継いで大正から、毎熊は清水酒場、山口酒場を経て明治24(1891)年頃から、瀬頭は西村酒場から犬尾酒場となったのを明治41(1908)年引き継いだ酒場である⁽¹⁾。中島は現本町にあって「峰の雪」、竹下は現天満町にあって「雪の竹」、毎熊は現東本町にあって「呉錦」を、瀬頭は現八坂町(現十八親和銀行諫早支店及び駐車場の所で通称三角屋敷)にあって「正宗」をそれぞれ主力商品とした酒造りであった。酒屋は造り酒屋の他に小売りの酒屋もあり、崎村では鹿島や佐賀の酒造場から買い付けて「四海波」を店先に並べていた。

そうしたなか明治41年、30才の瀬頭彌八(1878-1958)が佐賀県藤津郡塩田町五町田村(現嬉野市)を出て、諫早での酒造りを継いだ。塩田町五町田村には造り酒屋が多く、明治以来ここでは瀬頭平八が瀬頭酒屋を営んでいた。五町田村の瀬頭酒屋は瀬頭平一が継ぎ、平一の弟の平治は五町田酒造株式会社を設立。平八の弟の彌八が諫早に出ると彌八蔵を開いた。瀬頭の本家は「東一」を主力とした造り酒屋で、平八はまた「東長」をも売り出していた。

明治末頃、話者の叔父石島三平は五町田村にある瀬頭酒屋(平八)の杜氏の一人であった。ここでは丹波杜氏が仕切り、彌八蔵にも丹波杜氏の系統が受け継がれた。その当時、竹下と毎熊は柳川杜氏の系統であった。瀬頭平八の蔵は五つあり、4号蔵の杜氏をしていたのが石島三平で、その縁で話者も五町田村の瀬頭酒屋へ務めるようになった。17才のときである。話者が五町田村へ行く頃彌八はすでに諫早で造り始めていて、当初は三角屋敷と呼ぶ新倉屋敷川の傍ら(現八坂町)で500石から始め、その横に彌八蔵を新たに建て2,000石を生産するほどとなる。この頃になると三角屋敷の方は竹や木材置き場、米洗い場、酒売場、調合場として使うようにして、三角屋敷と彌八蔵とは2本のレールを通して道具を運搬していた。その後大正13(1924)年頃に新蔵を造り、ここで500石造った。これで2,500石の酒造高としたのだが、こうなると人手が不足してくる。話者の父松尾吉郎は当時、産業組合長を務めていて彌八とは親しかったことから、五町田村にいた話者は彌八蔵へと移ることとなった。話者は五町田村へは3年通った後で、新蔵が出来た頃に彌八のもとに来た。それ以降、話者は諫早の瀬頭酒屋で昭和8年頃まで杜氏を務めた。当時、酒屋へは12月20日頃から2月いっぱいまで奉公する者が多かったなか、話者はその前の準備

から火入れを済ませた後片づけまで、年に200日程を酒蔵に務めた。

酒は米1升(せっかん、麴、甌を一緒にした全体の量)に水1升が原則で、これを杜氏の考えで調節するのだが、酒は蔵ごとに造り、1回造るのに20日前後かかった。造る酒の量は蔵による。酒蔵でよく使う桶がある。縦1間、横1間、差し渡し1間の桶で、5尺の桶という。この桶には米10石、水10石の20石を仕込む。これで14石の酒が出来た。1日にこの1桶ずつを毎日造ることを1本仕舞いといい、瀬頭酒屋では1日に2本半造りであった。1本仕舞いに対してその半分を造る所は片手仕舞いといった。酒は12～2月の寒い時季に造り、火入れを3月に行う。酒屋で造る酒は蔵の代名詞といえる銘柄にかぎらず、いく種類か造っていた。瀬頭酒屋では最上級の「黎明」、一般用「マルヤ正宗」、それより買い求めやすい値の「ミツル」を造っていた。「黎明」は初め「潜龍」と言い、昭和10(1935)年頃から「黎明」の名称にしたものである。「黎明」は490石を造ったが「マルヤ正宗」と「ミツル」は売れ行き次第での酒造とっていた。この3つの銘柄で年間2,500石の製造であった。

瀬頭は2,500石、竹下は2,000石(四面橋際の第一酒場で1本半の1,500石、本町の第二酒場で片手仕舞いの500石)、毎熊は500石の規模で、それぞれ「黎明」「雪の竹」「呉錦」といった主力商品をもっていた。酒造りは時代とともにあり、技術の進歩や施設の充実はこの後さらに酒造高を増していった。一方で諫早での造り酒屋も昭和30年頃になると瀬頭、竹下、毎熊の3軒となった。

1 材料

(1) 米

酒は米によって品質に違いがでる。いわゆる特級や一級といった区別で、等級に合わせた米を使う。米の吟味や選定などの基本的なことは杜氏の仕事の一つで、ここでは最高級酒の「黎明」に岡山の酒米・雄町を使った。粒が大きく、5割減まで磨いても砕けず、良質の酒米として広く知れ渡った品種である。諫早では長田や本野の米が上等の方だった。酒米には必ず新米で、1ヶ所の1種を使って工程(酒造り)を終える。他の米と混ぜると特質が出ないからである。早稲や晩稲ということは酒に殆ど影響はなく、産地が重要だった。昭和始め頃、酒米を専門に扱う商人がいた。雄町は岡山の商人が売り込みに来ていたのを買い付けていたのだが、最高級の酒が1升80銭、一番安い酒で1升35銭というとき雄町は4斗俵1俵で4円と高値で、大量に仕入れのできるものではなかった。米は貨車で輸送され、諫早駅に着くと馬車に積みかえて運び込むが、強い馬だと1台で4斗俵(60kg)を25俵積むことができ、瀬頭の米は上野町の橋本某が馬車1台につきの運び賃で運んでいた。雄町は「黎明」に使い、「マルヤ正宗」には菊池米、「ミツル」には地元の長田や本野の米で造っていた。諫早の干拓平野は県内第一の米どころであるが、そこからの米は酒造りに適した米ではなかった。

米は1本仕舞いで1日に4斗俵を25俵使う。2本仕舞いだと50俵からの米が1日に要り、酒を造る期間中の米となると大変な量となる。大量の米は一度に買い入れても乾燥させた状態での保管は難しく、保管して置く大きな倉もない。そのため数回に分けて買い求め、酒を造る間は米を途切らすことはしなかった。どの米も少しずつ補充し続けるが、酒米の確保は難しく小野、宗方、森山などを回り、量が十分にあり酒に適した米を買い付けた。米は現金での購入で、買い付けには主人に信用のある者が現金を持って回る。地元での買い付けは買い付けに行く者の出身地を回ることが多かった。米がどの家にどれくらいあるということを把握していたからである。他に太平洋戦争までは朝鮮米も購入したが良い米だった。酒にはときに糯米を入れることがあった。甘く、旨味がつくためモロミになる僅か前に、蒸した糯米を入れたもので、糯米は溶けるので旨味を付けるには適していた。

(2) 水

酒屋はたいいてい大きな川の側にある。水を大量に使い、排水も溝などでは間に合わず、川に流すからで、その川も小さいのは用を足さなかった。川の水は瀬に打たれた水がまるやかで良く、井戸水は貝殻を通ってきた水が良いと言う。もともと瀬頭では初めの頃高麗小路(こうらいしゅうじ・東小路町)の井戸水を使っていたのだがそれでは間に合わず、長田川の水、その後本明川の水も使うようになった。上級の酒には長田の御手水観音や湯江川の水を使ったが、なかでも湯江川のは最上の水で、4斗樽に入れ、馬車1台に20丁積み、運び込んでいた。これらの水は「黎明」の仕込みに使ったもので、黎明以外の酒には本明川の水を使った。山下淵から蔵の近くまで引き、鉄管を通して汲み上げていた。また蔵内に井戸を掘り、脇に石を積み上げて塔のように造り、それに打たせた水も使った。

2 工程

(1) 道具揃え

酒屋では酒造りに入る前、まず使う道具を揃えることから始める。

酒屋の使う桶は一般の家庭のものと違い大きく、それだけを専門とする桶職人が必要とされ、市内には流町(現高城町、本町にかかる本明川沿い一帯)にそうした職人がいた。佐賀県の鹿島から移り住んだもので近隣の酒屋の道具もまかなっていた。桶は酒造りの期間中、毎日使い、毎日洗う。とりわけ仕込みの桶には前回造った酒が僅かでも残らないようにするもので、質の落ちる酒が残っていると次の酒も悪くなりやすく、時が経つと酒が腐ることもある。洗った後は必ず熱湯を入れ、前回の酒を拭いとる。こうした手入れをする桶は痛みも早かった。

桶洗いは中洗いと言い9、10月の間のひと月に10人程で行う。道具の繕いで、この作業には桶職も加わった。修繕し、洗ったのは天日に干し、乾いたところで柿渋を塗り、再度干す。その後乾いたのはいったん蔵にしまう。この時揃えた道具は使う直前にもう一度洗う。ササラ(竹のたわし)でよく磨くため渋はほとんど落ちるが残っていても酒造りに影響はなかった。こうした桶は酒造りが終わると洗い、滑車で天井に吊りあげて、囲う(仕舞う)。

<主な道具>

樽: 杉樽で、なかでも吉野杉は最上等で値もはった。内側が赤身、外側が白身の材で作ったものが最も良く、香りも最も強が、この樽は1本の吉野杉から一回りしかとれない。

桶: 桶の材は秋田杉や吉野杉、大分杉。囲い桶には吉野杉か秋田杉で、こうした材は船で運び込んでいた。使う桶には親桶などの仕込み用の大桶から小桶まであり、1本仕込みでは毎日3尺を2本、親桶を1本、添え桶を2本など使う。桶は大きいため転がして運ぶが、思うように転がすにはコツがあった。

- ・小桶: 運搬用の小さめの桶。
- ・大桶: 甑桶、添桶などを入れる桶で、大きさにもいくつかあり、色々な用途に使う。
- ・タメシ桶: 1斗ずつ入れ、肩に担いで片手を添えて運ぶ。持ち手がついた桶。
- ・5尺の桶: 縦1間、横1間、差し渡し1間の桶。20石仕込む大きさで、米10石、水10石を入れる。これで14石位の酒ができる。
- ・半切り桶: ハンギイと呼ぶ。6斗から1石入りで、高さ1尺5寸、直径3尺あるところから3尺桶とも呼ぶ。
- ・ダキ: 暖気。高さ3尺、直径1尺程の大きさの持ち手のついた湯桶で、上部には栓をつけた蓋をはめ込み、樽に近い。中に2斗程の熱湯を入れ、すった甑の中に入れてわかすためのもの。

(2) 精米

酒米は一度に500～600俵を搗く。搗く(精米する)ことを磨くと言った。これは4人がかりでの作業で、「黎明」の

酒米は4～5割減るくらいによく磨く。ここまで磨くと芯だけが残る、玉のようになる。米は芯ほど質が良く、このところが酒米なのである。雄町は5割減るまで磨いても砕けずに玉のように磨けた。地元の米をここまで磨くと砕けてしまう。もっとも米の磨き具合は造る酒により、「マルヤ正宗」は2割減、「ミツル」は1割弱減るくらいに磨いた。搗いた分は4斗ずつカマスに入れ、湿気のこないように米倉に入れた。米は搗く前に湿気ると搗く時に砕けやすくなるが、搗いた米も湿気ると洗うとき砕けることがあった。

<新粉>

米を搗いて2割程減った分の粉には黒いのが混じっている。これは牛馬のヌカにする。それを除いてさらに搗き、3割程減った(磨いた)ところに出た粉が新粉。コーサコ(落雁)の材料に菓子屋に卸していた。コーサコの新粉は米を挽いたものより、このように搗いて出た粉が良く、上等でしなやかだった。

(3) 洗米、米研ぎ

午前中の作業で、5斗入りの桶に米1斗ずつ入れて洗う。1人が米を計り入れ、一人が洗い、米洗い唄にあわせて研ぐ。米を桶にとり、水を入れるとまず手で米を浮かすように、とくに底の隅をさらうように洗う。洗った水をすため、今度は足を入れて研ぐ。洗い場では横に長く手すりを渡してあり、それに掴まり、米洗い唄を1口半唄う間に1回研ぐ。上手と下手がはっきりする要領のいる作業で、爪先より、やや斜めかげんに米の中へ足を入れる。踵は動かさず、片側の足先を桶の隅にそって90度程回すと元へ戻す。左右の足先が揃うと、反対側の足先を桶の隅に沿って90度程回し、その後戻す。桶の底の隅に沿って左、右と足先で交互にキュッキュッと研ぐ。米が上がるように研ぐもので、この米研ぎが下手だと足で押し付けるだけで、底まで足が通らず研げなかった。新参には難しい作業だった。足で研いだところで水を加え、手で桶の隅に沿って丁寧に、米が浮くように洗う。その水を落とすと再び足で研ぎ、その後また水を加えて手で洗う。足研ぎ2回、手洗い3回での米洗いで、洗った米は2斗入りのショウケに取り、水を濁り(白い研ぎ汁)が出なくなるまでかけて、水を切る。その後浸桶(かしおけ)に入れて、水に浸けて置く。浸桶は25俵の米を入れることのできる程大きなもので、梯子を掛けて登り、米を入れると飛び降りていた。25俵の研いだ米を入れたところで水を張る。浸けておいて、米に水が浸み込むのに6時間以上はかかった。浸桶の下所には栓をはめてあり、蒸す直前に栓を抜いて水を落としていた。

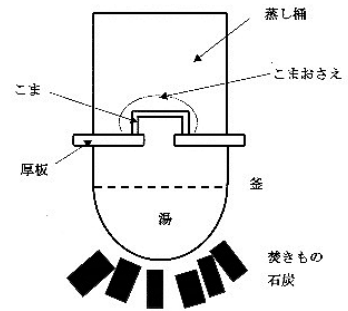
昭和10年頃からは洗米機を使いだす。大阪での製造品だったが、これがきた時にはもう手足で米を洗わなくてすむと皆で喜んだということである。

(4) せっかん蒸し(米蒸し)

蒸した米をせっかんという。初めは配の分の麴を作るだけの量2石4斗の米を蒸し、本調子となって25俵(10石)を蒸す。甑番3人でせっかんを作るが、甑番には蔵男が交代であったり、蔵の中で最初に起き出して作業にかかる。だいたい午前0時頃から準備にかかり1時半頃から蒸し始める。燃料には石炭を使う。以前は薪を使っていたが、薪は石炭よりも火力が弱く、蒸し上がるのに時間がかかった。また消す時も石炭はかき出して広げておくと消えるが、薪は水をかけないと消えなかった。石炭は話者の勤め初めの頃から使っていた。せっかんは大きな釜の上に板を乗せ、そこに蒸桶(6石入り)を置いて蒸すが、板と桶の底板の中心部に蒸気を通す孔を作ってあり、孔の真上に蒸気を送るためのコマを置く。コマは1尺2寸四方の四角い作りで、四方に同じ大きさの窓を作り付けてあり、この窓から蒸気を蒸桶の中へ均等に送る。コマは蒸すには大事なもので、位置がずれると蒸桶への蒸気の伝わり方にばらつきができ、せっかんにむらが出来た。釜には8分目程の水を入れておく。沸くとジンと音がする。これを釜鳴りといい、釜鳴りがすると間もなく沸騰する。この釜鳴りがしだしたところで、コマ押えといってコマの上に(周りに)、2斗程の米を置く。初めは蒸気の勢いが強いので吹き上げぬよう、コマ押えに置くのである。コマが被さるように均等な厚さで置くが、この時は火を抑えていた。火を抑えないままだと強い蒸気がコマに入り、米に伝わって煮立て

てしまう上、蒸気の出口の窓も塞いでしまうことになった。このため甑番は火の加減を慎重にしなければならなかった。また、この時釜に水をいっぱい入れておくと、蒸気ではなく、湯を吹き上げ、コマ押えに置いた米は飯になってしまった。コマ押えが飯になると蒸気が通らず、せっかんは出来なかった。せっかんは一度に蒸すのではなく、コマの回りに置いた米の上に少しずつ、蒸気が上がるだけ米を足していく。米を被せて蒸気が上がると次の米を被せ、暫くしてまた蒸気が上がったところで、また米を被せるといった作業を繰り返す。本調子ではこの1桶で5石を蒸す。釜で蒸すのは5石が限度であった。

せっかん蒸し一断面



こうしたせっかん蒸しも昭和7(1932)年頃ボイラーを使い蒸気を送り込む方法にかわる。これだと15石入りの桶に10石の米を入れて蒸せるようになった。ボイラーで蒸すのも釜でのやり方と同じで、パイプで蒸気を下から送り、蒸気が上がり始めると次の米を少し入れるという作業の繰り返しである。蒸し上がるとコックをひねるだけですぐに蒸気を止められた。湯が米にかかる心配もなくなり、薪や石炭でよりもボイラーの方が蒸気の操作が簡単で作業しやすかった。蒸し上がりは釜で蒸したものと大きな差異はなかったがボイラーの方が無駄がなかった。この作業は蒸気が出て40分位で蒸しあがった。せっかんが蒸しあがる前、午前2時頃には他の蔵男も起き出し莫産を広げてせっかんが蒸し上がるのを待つ。せっかんは蒸桶から全部出すのに1時間はかかる。蒸桶の中に足駄を履いた者が入り、スコップのようなカイ(櫛)でほぐしていく。これを蒸桶の縁についた者が掻き出し、1斗を桶に取ると、1枚の莫産に広げる。これがだいたい午前2時半頃からの作業だった。10石(100斗)蒸して莫産100枚の計算で、1枚に1斗というのは勘定しやすく、麴や仕込み桶にそれぞれ何枚と数えやすかった。莫産にとつたせっかんは先に幅広の板を取り付けたエブイで広げ、室温と同じ温度にする。蒸し米のため、エブイに付くこともなかった。なお、本調子となり25俵(10石)蒸すのは甑が使えるようになってからである。

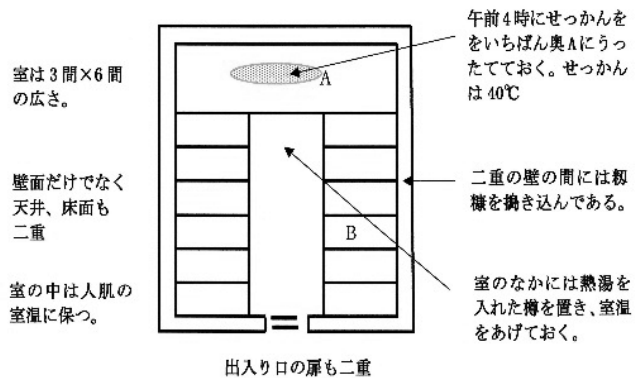
(5) 検杖

杜氏は蒸し上がったばかりのせっかんを蒸し桶から出す前にひとすくい手にとり、丸めると径2寸程の竹竿に両手でこすり付けるように押しつけて揉み、餅に作る。これがあか餅で、手で広げてみて米粒が見えるようなのは失敗で、もう一度蒸しなおす。あか餅で米の蒸し方の善し悪しを見るのである。このあか餅はたいてい土産に丸めて持ち帰り、なかには枇杷や葡萄、鯛の形に細工する者もいた。あか餅は粳米ですぐに冷えるため細工しやすかった。

(6) 麴づくり

麴は特別に仕切った室でつくる。室は3間に6間の広さで、室内の左右壁面には棧木で棚を作り、奥に床揉みの場Aを設けてある。周囲の壁は二重とし、そのあいなかに粉糠を搗き込んである。天井も床も二重で、室の中は人肌に保つ。麴づくりは室師と室ん子での作業で、1本仕舞いには2石4斗の麴が要る。かき出したせっかんは徐々にひと肌近く冷ます。室師は指先をせっかんの中にたびたび入れては温度を測り、体温よりもやや高めにし、それより下がらないようにする。午前4時近くになる頃せっかんを室に入れるが、室にはあらかじめ熱湯を入れた樽を据えて温度を上げておいた。そうしたところで室の奥Aにせっかんを入れ、盛りたてるように置く。この時せっかんは40℃前後。あまり熱いとべたついてしまう。盛りたてたせっかんには何枚かの筵を被せて温度が下がらないようにする。

麴室(こうじむろ)一平面



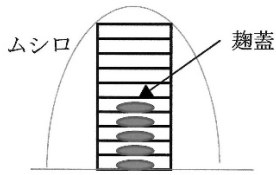
午前4時近くになる頃せっかんを室に入れるが、室にはあらかじめ熱湯を入れた樽を据えて温度を上げておいた。そうしたところで室の奥Aにせっかんを入れ、盛りたてるように置く。この時せっかんは40℃前後。あまり熱いとべたついてしまう。盛りたてたせっかんには何枚かの筵を被せて温度が下がらないようにする。

<麴つくり一図解>一断面

4:00頃 蒸したせっかんを麴室の奥Aに入れる。筵を掛けて40℃に保つ。

1晩目

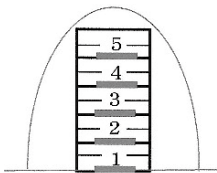
22:00過ぎ このあたりから種付け。せっかんを柄の長い崩シ棒で切り崩し、麴菌を加えて揉む。床揉みの作業で、室師と室ん子、加勢の蔵男とで揉む。菌をせっかんの中に入れるため、強くごしごし揉むことはなかった。だいたい24時までの間の作業で、床揉みした後、もとのように盛り立て、一晩置く。室師は指先を頻繁に麴の中に入れて体温よりやや高めに保っていた。



3:00頃 せっかんの中に白いぶつぶつがつく。麴蓋1枚の真ん中に1升ずつ取り分け、5枚重ね、上に空の麴蓋5枚を重ねて10枚一組とし、Bの棧棚に置く。2石4斗を並べ、筵を被せる。空の麴蓋を重ねるのはこれもいっしょに温めるため、筵はその時の外気の温度を勘定に入れ、室師の判断による、筵の枚数も加減した。室師は時々、麴蓋の中の麴の温度を指先ではかり、高いと揉んで下げた。

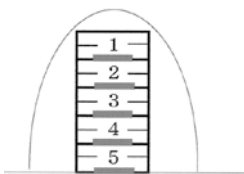
5時間後

この間40℃以上にあがると揉む。盛った麴を広げ40℃程に加減にする。



8:00頃 上段の空の麴蓋と下5段の麴蓋をそれぞれ腹合わせに重ね、筵を被せる。これは麴蓋の内側空間をひろくし、中の温度を上げないため、温度を一定にする。被せる筵の枚数は室師の経験によった。

5時間後



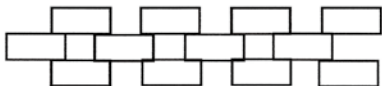
13:00頃 上下の段の温度に差が出るため、上下の段を入れ替える。

5時間後

○ 18:00頃 筵を取り、そのまま更に5時間置く。

5時間後

2晩目



23:00頃 レンガ積み。1枚の麴蓋の周りを空けた積み方で、これ以上に温度を上げないため。この積み方だとどの麴も一樣な温度で仕上がる。

2:00頃 室から出す。麴はそのまま置きすぎると色がつき、よくなかった。麴蓋は蓋に使った方はその都度洗うことはないが、麴を盛るほうのは麴をつくるたびに洗う。

4:00頃 次のせっかんを麴室Aに運び入れる。

(7) 酏もとすり

酏は酒母のこと。蒸し米に麴を加えて発酵させたもので醪の元となる。酏は酒を造り始める前に何日分かを造っておく。酏2石で5本分できるため、ある程度の量を造り貯めると、毎日のようにする作業ではなかった。酏師が仕切る工程で、その日酏すりした分ずつを桶ごとに貯める。継ぎ足しはしない。酏はすった順に発酵するとは限らず、15日から20日かかるものもあった。そのため本調子に入る前、発酵するまでの期間に余裕を持たせてすり貯めて置き、発酵した順で使う。本調子になると3日おきぐらいで酏をする。ハンギイにせっかん1斗、水1斗、麴2升5合を午前8時から10時の間に仕込んでおく。まぜて置いておくだけだが、酏すりはせっかんが水を十分に吸収しておかないと出来ないため5時間以上置いた。夕飯の後酏すりの作業にかかる。ハンギイの周りに3人程立ち、先に小さめの厚板を取り付けたエブリを入れ、底の所を左、右、左、右とする。途中で真ん中が膨れるがこれを芯が残るといい、そうすると芯取りが箒のような道具でもって膨れあがっている芯を四方へ分けていた。すりやすくしていく作業で、芯取りは桶から桶を回り、すっている間から芯を分けた。酏すりでは糊状になるくらいまですり、エブリが軽くなったところで上げる。この時米粒が無くなっているとすり上がりである。酏すりは堅いせっかんをすり潰す力が必要で、この後も中すりといって夜なべにすっていた。すった酏はぶつ(泡)が出てわき(発酵)はじめ、それがおさまり、ぶつが消えた頃がわいた時である。酏は麴が入っているためそのままでもわくが、それだけではわくのが遅く、1日1本造るのに間に合わないこともあり、本調子を継続するのに不安定になる。そこでダキを入れて発酵を早め本調子に支障がないようにする。ダキは2時間程は高い温度を保つ。冷めてくると中の湯を入れ替えて使う。ダキは酏の中に入れて置いただけでは全体に熱がいかない。そこでダキ回しといって、ダキの持ち手を持って酏の中を回し、ゆっくりとわかす。回す回数も4回ほどと決めていた。外気の冷たい時にダキ回しはよくしていた。1日に通常4回は熱湯を入れ替えてダキを回し、とりわけ冷える場合にはさらにトメダキする。本来、ダキは全てに入れるというのではなく、間に合わない時のものだった。酏はその日すって、わいた後のを酏桶(酒母桶)に移す。酏桶は2、3石入りの大桶でせっかん10斗(莫塵10枚)の分量を入れていた。酏桶は蓋をせず、酏蔵に入れて置く。酒1本造るのに酏を4斗は使う。寒くて気温の低いなか酒は酏の力で発酵するが、その酒の善し悪しは水の他、酏のすりようで決まる。酏は急に発酵させたのは酸っぱくなる。これは腐敗の前兆である。酏の成熟には20日は見ておいた。1本分の酒米25俵蒸すのは酏が使えるようになってからである。酏師は成熟までの間中、雑巾を持って、酏桶から外へとわき出るぶつを拭いて回っていた。

(8) 添

酏桶より添桶2つにそれぞれ酏を1本分(4斗)ずつ取り分ける。^{さんじやく}三尺とも呼ぶ8石入る大きな桶である。始め添は2本分を使う。4斗ずつ入れた添桶2つ(2本分)は一晩置く。一度に仕込むのはどんぶり仕込みといってよくないやり方としていた。翌朝、添桶にせっかん9斗、麴3斗、水1石2斗を加える。これを混ぜて昼間は筵をかけてそのまま置く。ここでは気温10℃程の高めの温度で仕込む。晩方にはフワーツと膨れあがる。これを添搗きする。4人程が桶の縁に上がりエブリを持って、上から垂直にまんべんなく搗く。酏すりとは違って添搗きは、左、右とエブリを動かして搗く。1時間ばかり搗くとドロツとした液状になり、こうなったらそのまま朝まで置く。

(9) なか

翌朝、搗いた添をかき混ぜておいて晩になか搗きする。これは添の仕込みよりも低めの5°Cくらいの気温の中で行う。なか搗きは1人での作業で添搗程の時間はかけない。なか搗した後はそのまま置く。

(10) 留め

翌朝、留め仕込み。昼前に仕込むが最も低い5°C以下の気温の中で仕込む。水も氷が張るくらいに冷やし、せっかんもこの時はできるだけ冷やしていた。2つの添桶より半分ずつを親桶に入れる。その後2つの添桶と親桶にそれぞれ水、麴、せっかんを加えるのだが、添桶には水3斗、麴1斗5升、せっかん1斗5升を、親桶には水6斗、麴3斗、せっかん3斗を加えてその晩は置く。翌朝から搗く。この仕込みでは、わくのは遅いほうが良く、早すぎた場合は糶で混ぜ、外気に触れさせて温度を下げ、わくのを抑える。留めは温度を下げて仕込むのが肝心で、仕込みの間は毎日エブリで搗く。蔵男が桶の縁に立ち、エブリを真っ直ぐ入れて真ん中を円くかき回すのと、横から斜めに入れて隅に沿って大きく一回り回すの二通りで搗いていた。留めを仕込んで7日程して二つの添桶の残った分を親桶に入れる。この時、外気が高いと遅めに入れ、低いと早めに入れる。これは杜氏が調整する。この添桶から親桶に移す頃にはわいてぶつぶつしてくる。次から次ぎに泡が出るが、この吹き上がる泡は掻くように散らして消し、消すための泡番がついた。4~5尺長さの竹の枝を3本、一方を括り、もう一方の開いた泡消シで吹き上げる泡を掻き混ぜて消す。泡が吹き出るのをそのままにしておくで桶の縁を越してきた。寝ずの番で、これもなかなか疲れるものだった。熟成してくると泡もなくなる。これが醪で、わいて7日程たったものである。これを搾るのだが、留め仕込みをしてほしい14~18日後に搾ることになる。醪16石を搾ると14石の酒になった。酒には時に糯米を入れることもあった。甘み、旨味をつけるため、醪になるわずか前に蒸した糯米を入れる。糯米はとけるため、この段階でいれてもかまわなかった。

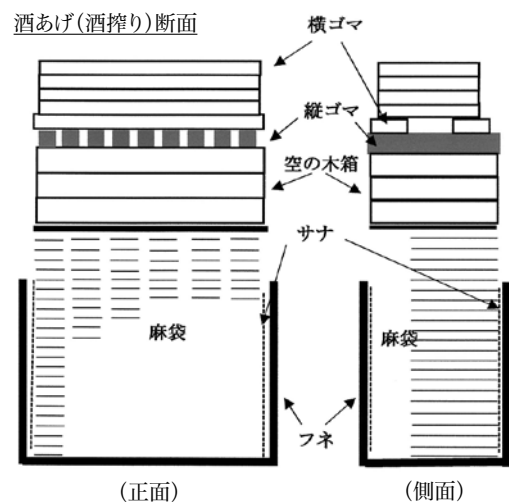
瀬頭では漏斗に吉野紙を張り、上から醪をついで漉したのをきき酒といって、出来具合をみていた。きき酒は毎日でもして酒をしぼる頃合をはかった。

丁字屋ではポンポンという一節の竹筒できき酒していた。節の上部に縦長にいくつかの長方形の窓を作り、和紙を張る。下部には孔をつけ栓で止めておく。これを留め仕込みの中に入れて、和紙からポンポンに酒がしみ入る。これを下の孔から取り出して出来具合をみていた。瀬頭でもポンポンのようなものがあつたが話者は使ったことがなかった。酒の留仕込みの間、税務署の技師が来て、利き酒しては搾ったほうがよい頃合いを指導していた。

(11) 酒あげ

酒搾りを言い、二日がかりの仕事で朝飯前からとりかかる。搾り袋(麻袋)320枚に入れた醪16石を一度に搾る。搾り袋1枚は5升入りで、フネに積み込んで搾る。その責任者を船長と呼んでいた。フネは6、7寸厚さの樫や櫂の厚板で直方体にした長さおよそ3間、幅4尺、深さ4尺程の大きさの木槽で、内側には縦に竹(孟宗竹)のサナを貼っておく。サナは竹を平に近い形に割り削ったもので、割った面を内に向けて敷き詰めて並べる。搾り袋から押し出した酒はこのサナを伝って底の方へと下る。底にも縦に溝を切っており、ここからフネの外へと伝い出る。

醪は親桶からハンギイに取り分けておいて搾り袋(麻袋)へ入れる。二人一組での作業で、一人が指で搾り袋の口の向こう側をびんと張り、手前をだらりとゆるめて開け、寝せた格好で口を開けたところにもう一人が5升ガエの柄杓で汲み入れ



る。搾り袋には空気が入らないようにするもので、だらりと開いた方を表に、張った方を内にし、搾り袋の底から口の方へ、真ん中あたりを軽く手の甲でなで上げるようにして、中の空気を出し、すばやく搾り袋の口を折り曲げ、口を下にして積み重ねる。搾り袋は目が詰まっているため、いったん空気が入るとなかなか抜けなかった。そのため口を折るときに醪と一緒に搾り袋に入った空気を手で押し出す。これはフネの中での作業で、フネの中で折り積み上げる。フネの中には積み上げた搾り袋が10列程並ぶ。搾り袋はフネからはみ出るほど高く積む。列は片側をフネの壁面につけてもう片側をあけるが、次ぎの列は反対側に寄せて積み上げる。

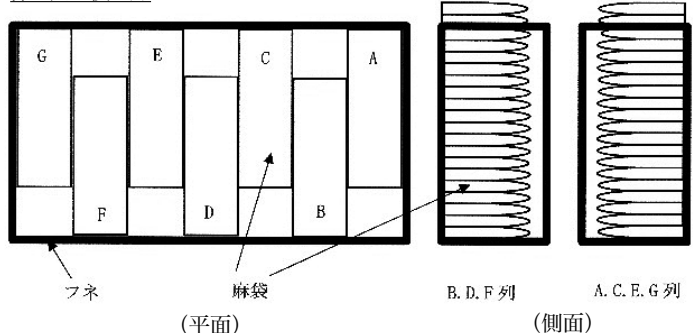
積み終わると蓋をし、その上に空の木箱を3、4個積む。木箱の上にコマを重ねる。縦ゴマを等間隔でフネの長辺に直角に9～10本並べる。その上の真ん中に横ゴマを2本渡す。これはフネの長辺程の長さで、そう間隔を開けずに並べる。この2本の横ゴマにかかるように、さらにこの上にやや幅広の横ゴマを重ねる。幅広の横ゴマは4本ほど重ねる。横ゴマは全部で5段。これで搾る。木箱はフネよりも板が薄いため、壊れないように木箱がある間はじわつと圧して搾る。フネの脇には親柱があり、その脇に3段位の梯子をたて、圧すためのハネギと呼ぶ太い丸太を支えている。ハネギは一番上の段に置いて、先に重石を付てコマを押し、搾る。少し搾ったところで一番上の横ゴマを外し、次の横ゴマからはハネギの枠と呼ぶ、中を窪めた木枠をハネギにあてる。これでハネギを固定してぶれなくする。搾るに従ってハネギの位置を梯子の上の段から下の段へと通しかえる。ハネギは長いのが良いが、場所がとれないと短めのも使った。この後少しずつ搾りながら木箱を一つずつ外していく。酒搾りには2日かかるが、1日目は木箱を全て外すまで。これは外へ出ていた搾り袋がフネの中に納まるまでの作業である。船長は搾り加減を塩梅する。木箱がなくなった2日目が本圧しとなる。この時、搾り袋をいったんフネから出す。それまで、圧されていた搾り袋は崩れて列の隙間がなくなっていて、そのままにしておくと搾った酒の通りが悪くなる。そこで本圧しに先だって搾り袋を積み直し、酒の通りを良くする。この本圧しからは強く搾る。サナを伝って下りてきた酒は底の縦溝を通してフネの外に用意していた瓶に溜める。フネより出た酒をヒノクチ(桶の口)といい、それを入れる瓶であるところからこの瓶を樋の口瓶と呼んだ。16石の醪から14石の酒を搾る。

(12)あげ桶

樋の口瓶にとった酒は5尺の桶(アゲ桶)にタメシ桶で移す。これをあげ桶といい、5尺の桶に移して新酒という。搾った後の搾り袋は板状に硬くなっていて、搾った翌朝、中に板状に残った滓を剥がしてとり、カマスに溜め、搾り袋は残った滓もつぶるう(しっかり振るい出す)。搾り袋は洗わず、次ぎの酒搾りに使う。繰り返して使う搾り袋は痛みも激しく、繕いはあんねやん(下働き)の夜なべ仕事だった。

新酒を入れたアゲ桶には何石何斗入りと、入れている分量を表示しておき、これを税務署の検査官が検査する。検査官はT字形の目盛りを付けた尺竹(測り用具)を波立たぬよう酒の中に入れ、量を計る。尺竹の頭の所(T字)が桶の縁にかかり、下端は桶の底につく。新酒と尺竹の頭との間には空き、隙間があり、1寸の空きがあるくらいを満という。しかし、1寸以上開いているのは認められず、その分を不足分として、厳しく調べられた。尺竹1分で酒5升の計算で、この時には酒粕も同時に量った。検査官が量った酒の量(石数)と残った酒粕の量(重さ)が適正(14石)であることを確認して検査が終わる。この確認がとれないと、つまりアゲ桶の酒の量と酒粕の重量を足して14石ないと責任を問われるわけで、酒はこうした検査が済むまではあげ桶のままとしておかなければならなかった。

搾り袋の積み方



(13) おり 澱ひき

酒はアゲ桶にとっておくと、底に白い澱が溜まる。澱は沈殿してやや厚みをもつようになると固まってくるが、その頃を見計らって澱をとる作業となる。アゲ桶の底には栓を付けた孔があり、栓を外すと栓先と呼ぶ、底の澱が入った分が勢いよく飛び出す。この澱が混じった最初の2、3升は栓先入れにとって別にしておいた。これを澱ひきという。栓先をとった後、アゲ桶の下にハンギイを据えて澄んだ新酒をとる。新酒は大きな桶に移し、蓋をすると3月の火入れまでそのまま置いた。ここでひいた澱は集めて白酒とした。

(14) 火いれ

3月頃、新酒を沸かす作業で。1本仕舞いで1日に4本、片手仕舞いで1日に2本沸かす。沸かすといっても酒は沸騰させることはしない。ここで熱く沸かし過ぎると酒は変質し、低いと腐る。古くは指先を入れても長くはつけておけない熱さ(3回くらいしかつけきれない熱さ)としていた。酒は金気を嫌うため銅に錫をはった釜に入れ、その釜ごと大きな羽釜に入れて沸かした。48℃になるとすぐ、完全に火を止める。止める時は素早く焚き物を掻き出し、杉の青葉をいれ焚口を閉じる。これで火はすぐ消え、温度は上がらなかった。後になると酒をいれた釜を大桶に入れ、釜と大桶との間にボイラーで沸かした熱湯を注いで沸かすやり方となった。これは熱湯をすぐに落とせるため便利であった。その後ジャ釜を使い出すようになった。これは48℃程の湯の中に錫の管を幾重にも回し、その中へ酒を通して沸かすといったやり方だった。火入れの後の酒は熱いままカコイ桶に移す。カコイ桶は5尺の桶で、蓋をすると縁を和紙で目張りして密封する。これが原酒で、このままでも3年はもった。カコイ桶は吉野杉、秋田杉と大分の竹とで作っていたが、なかでも吉野杉で作ったものを上等とした。もっとも最高級の吉野杉の桶は初めて使う時は香りが強い。使い始めて3年目(3回目)のを最も良しとしている。カコイ桶はカコイ蔵(酒蔵)にしまうが、この蔵は外の影響を受けにくくした蔵で、内側では床や壁面に筵を敷きまわして暗くし、温度変化を極力避けた。酒蔵に地下が良いとされるが、温度変化が小さく、カコイ蔵に適していたからである。火入れの後、酒は秋まで置くのが本来であった。

3 仕事唄

ところで、仕事には流れ、手順があり、個々でするほか数人での作業もある。きついときもある。そこで仕事には調子をとる、あわせることも必要で、そうしたときのために仕事唄がうたわれていた。酒造りで仕事唄は酒場により違いがあり、瀬頭酒場の杜氏は丹波との結びつきがあり、そうしたことは仕事唄からもうかがえた。

(1) 米洗い唄

1. あー 清き流れの本明川の水で ヨーイショ ヨーイショ
朝もはよから米洗いよ ヨーイヨイヨイノヨイ
さいば米洗え アーヨイショヨイショ ヨーイヨイノヨイ
2. あー 朝ははよから唄いともないが アーヨイショ ヨイショ
唄でなければ米研げぬよ ヨーイヨイヨイノヨイ
さいば米研げぬ アーヨイショヨイショ ヨイヨイノヨイ
3. あー 雨も降らんのに本明川の濁る アーヨイショ ヨイショ
これはマルヤの米の洗い汁よ ヨーイヨイヨイノヨイ
さいば米の洗い汁 アーヨイショヨイショ ヨーイヨイノヨイ
4. あー 酒屋男の罰<ばち>かぶらんとが不思議 アーヨイショ ヨイショ

足で米研ぐ、手で流すよ ヨーイヨイノヨイ

さいば手で流す アーヨイショヨイショ ヨーイヨイノヨイ

5. あー わたしや備前の岡山育ち アーヨイショ ヨイショ

米のなる木をわしや知らん ヨーイヨイノヨイ

さいばわしや知らん アーヨイショヨイショ ヨーイヨイノヨイ

6. あー 米のなる木を知らずば教ゆ アーヨイショ ヨイショ

米の実る木は藁じゃもの ヨーイヨイノヨイ

さいば藁じゃもの アーヨイショヨイショ ヨーイヨイノヨイ

7. あー 清め磨いだる浸桶見れば アーヨイショヨイショ

なかに真珠の粒光るよ ヨーイヨイノヨイ

さいば粒光る アーヨイショヨイショ ヨーイヨイノヨイ

*マルヤは瀬頭酒屋のこと。

(2) 醋すり唄

1. あー もとはすり もと作りは改良 ア ヨイショヨイショ 出来たその酒みな銘酒よーい

2. あー 清き流れの多良岳の水で ア ヨイショヨイショ 造りあげたるこの銘酒よーい

3. あー 旦那喜べ 今年の酒は ア ヨイショヨイショ モトも良ければ香り良い よーい

4. あー 銘酒出る出る 樋の口瓶に ア ヨイショヨイショ お国自慢の唄も出る よーい

5. あー 揃うた揃うたよ 親桶子桶 ア ヨイショヨイショ 棚に尺竹タメシ桶 よーい

6. あー 掃き清めた蔵内見れば ア ヨイショヨイショ 庭に銘酒の影映す よーい

7. あー 国の掟や松尾の神は ア ヨイショヨイショ 守るほどよい酒も出る よーい

8. あー 五百万石御国の宝 ア ヨイショヨイショ ほんに肩身が広くなる よーい

なかの芯木におしたてて よかるじゃないか ヨーイ ヨーイノヨイ (唄ではなくあいの言い回し)

(3) 甑の中すり唄 これは丹波杜氏だけが伝承する。

1. やれー 宵のもとしり ヨーコイナ 夜明けの甑よー

やれー 朝の洗い場のよーお ヨーコイナ 身のつらさー

2. やれー 銘酒出る出る ヨーコイナ 樋の口瓶によー

やれー 瓶に黄金の ヨーコイナ 花が咲くー

3. やれー 銘酒造りて ヨーコイナ 店場に出せばよー

やれー 好きなお方が ヨーコイナ 買いに来るよー

4. やれー 造いもしたなら ヨーコイナ はよ帰らぬせよー

やれー 暑さ寒さも ヨーコイナ はよ寝て暮らそー

5. やれー 酒屋男に ヨーコイナ 何処見て惚れたよー

やれー 色の白いのを ヨーコイナ 見て惚れたー

6. やれー 酒屋男は ヨーコイナ 殿様の位ー

やれー 五尺三尺 ヨーコイナ 据えて飲むー

7. やれー 酒屋 酒屋は ヨーコイナ どの蔵見てもよー

やれー 下戸のたてたる ヨーコイナ 蔵はないー

(4) 添え搦き唄

1. 酒に酔うた酔うた五勺の酒に アーヨイショヨイショ やれ 飲まぬ五尺の酒に酔うた

2. 酒に酔うた酔うた五勺の酒に アーヨイショヨイショ やれ 一合飲んだら由良の助
3. 一合飲む酒五勺と決めて アーヨイショヨイショ やれ 所帯持つ気になりなされ
4. 所帯初めにゃブンジ(杓子)のあげも アーヨイショヨイショ やれ 味噌の小出しにねや殿御
5. 所帯初めにゃ川原の石も アーヨイショヨイショ やれ 漬の重石にゃねや殿御
6. 娘喜べ来年の春に アーヨイショヨイショ やれ 好きな殿御と三度さす
7. 春はうれしや殿御と二人 アーヨイショヨイショ やれ 二人揃うて宮参り
8. 宮に参りて何というて拝む アーヨイショヨイショ やれ とかく殿御がまめなよに
なかの芯木におしたてて よかるじゃないか ヨーイ ヨーイノヨイ (唄ではなく合の言い回し)

4 店売り

酒について現在は甘口や辛口で区別しているが、以前は良いか悪いで判断していた。それは味、香り、色であった。味は舌の先ではかり、ややピリッとしたのを良しとし、だらっとしたのは味が落ちるものであった。口に含み、吐き出した後の舌のさわり具合なども味の善し悪しを判断する材料だった。色は琥珀色を良しとしていた。

酒は通常水を加えて売る。例えば4斗樽には3斗2升程の酒をあらかじめ入れておき、客とのやりとりの中で井戸端の上等を8升ばかり持ってこいと言って水を8升持ってこさせると、そのまま樽に加えていた。買う方はその場で混ぜられてもなかなか分からなかった。大体酒3斗2升到水8升というのが多かった。ところで、蔵はそれぞれに銘酒を持つが、銘酒は初めから薄めぬよう水を塩梅してあり、売るときに水を加えることはない。酒には水を加えて分からない酒と分かる酒とある。大体水を加えてもすぐには味は変わらないが、これは長く置いておくと腐るため、早く飲んでしまうと見極めがついたのに売っていた。例えば、田祈禱や祭りといった場合の酒はすぐに飲んでしまうため、埋栓(空気孔)から少々水を入れていた。店先での売り買いではカコイ桶の新酒を別の酒と混ぜて店の商品に作ってもいた。酒には他の酒と混ぜた場合、悪い方のは良い方にひかれて良くなるといった性質があった。また、酒の中で原酒はほとんど売ることにはなかった。原酒売り＝蔵出しで、よほどの間柄でもそっと渡すくらいであった。仲買には近郷の他に京都などからも来ていた。仲買に売る場合、1番;原酒9水1、2番;原酒8水2、3番;原酒7水3といった割合で、いく通りかの酒を利き酒させる。仲買はその内から選んで2番を20丁といった具合に買い付ける。仲買のは本人の立ち会いで詰める。なかには水を多くしてごまかすところもあった。仲買がそれを小売りする時には、更に水を加えて売る。水は多いほど腐れやすいが、水の分が儲けである。こうした樽売の他、顧客にはあらかじめ水をブレンドした酒を杓で量り、徳利に入れて売っていた。徳利は酒屋からの貸し出しで、竹の皮の札を付けておく。酒を買った人の名をこの札に書き込み、札は店に徳利は客にと渡す。客はこの徳利を1年間使う。正月過ぎに店の者が徳利寄せ、あるいは樽拾いとも言って、オウコと竹の札を持って家々を回って回収し、集めた徳利はオウコに結んで持ち帰った。店に戻ると札の名を消す。そしてまた新たに徳利を貸し出す。竹札の名は墨で表に書いてあるため水で洗い落とし、何度も使った。

酒の代金は現金払い、掛けとあった。年末は掛け金の回収で、大晦日まで掛け取りに回ったが、なかにはわざと留守にするところもあった。

徳利は酒屋と客の間を行ったり来たりしていたわけだが、戦後の昭和20(1945)年頃から瓶売りが流行りだし、徳利は次第に見かけなくなる。昭和30年以降、酒にも大きな変化が現れる。酒は男が飲むものとは限らなくなり、女性が飲むことも多くなる。そうした時勢からそれまでの酒だけでなく、酒に水あめを入れるようになった。ブレンド＝酒＋水飴＋水というふうな女性に好まれる酒も造るようになり、酒は社会のありよう応じた飲み物としてより

広く親しまれるようになった。

また、酒はこうした店売りのほかに桶売りがあった。京都などの大手の酒造メーカーは桶ごと大量に買い付け、船で運搬していた。後にはこれがタンク売りとなる。

■ おわりに－日本の酒造

日本の酒が古くはどういったものかは不明であるが、『古事記』(712)や『万葉集』(759)などに酒が度々見える。酒の材料には木の実や雑穀もあったであろうが、稲作の始まりは酒造りの飛躍を促したと考えられる。『播磨国風土記』(714)⁽²⁾や『風土記逸文 大隅國』などからは米を材料とした酒であったことが記されている。『延喜式』(927)造酒司には新嘗會の酒料を醸すにあたって酒殿、白殿、麴室が見え、麴を使った酒造りがあったことが裏付けられる。もっともこの頃の酒は売買目的ではなく、神祭りなど何事かの折に醸されていた。

そうした酒・酒造りが市井に広がるのは中世の貨幣経済の到来をまってである。鎌倉時代頃からは農業の面でも換金作物としての畑作物が多くなり、生産品を商品として販売することが多く見られ、民間の経済活動が活発になる。酒もこれに並行するように市井での販売も始まり、『七十一番職人尽絵』⁽³⁾には酒作もあり、酒が普通の飲み物として受け入れられている様が描かれている。中世末頃になると『多聞院日記』⁽⁴⁾にも酒に関する記述が多く見えるようになる。天文18(1549)年5月3日に条に「酒上了」、永禄12(1569)5月9日の条には「酒上了、ツホーツニ袋一八ニテ皆上了」とあり、僧房での酒造りが繁く行われていたことがうかがえる。江戸時代になると大桶や樽が作られるようになり、酒造技術は大きく発展し、貞享(1684-87)年間に記された「童蒙酒造記」⁽⁵⁾からは現代の酒造りにかなり近い水準がうかがえる。元禄10(1697)年の『本朝食鑑』⁽⁶⁾には様々な酒が造られ、なかで米で造る諸白を第一とするとある。この時代、諸白が最高の酒とされたことは『日本山海名産圖繪』⁽⁷⁾、『海游録』⁽⁸⁾などからも裏付けられる。江戸時代中頃になると酒屋に課していた運上金が廃止され、宝暦4(1754)年に「勝手造り令」⁽⁹⁾が出されてからは新興の酒屋も多く出現し、さらなる競争、技術の進展が加速した。加えて廻船の運行は酒の輸送を拡大し、全国の酒造りに影響を与えた。

現代の我々が親しむ清酒は16世紀末頃からのものである。清酒の発展は南都(奈良)の諸白から始まる。更に技術面での改良を加えて、伊丹に継がれ寒造りは本格的にはじまるが、十水の仕込み(米10石水10石)での寒造りを完結させた灘が一等抜き出る。灘の酒は江戸で普及し、一躍有名になり、灘の杜氏は全国に招かれるようになる。瀬頭酒場の杜氏が灘からというのもそうした流れからである。

諫早でも明治以降、貨幣経済が主流となるにしたがって、酒を造り、販売する規模が大きくなった。八坂神社(八坂町)の玉垣には清水、森など明治9年頃の酒屋の名が刻まれ、その数10軒である。

註

(1)「諫早城下町酒造家の盛衰」諫早文化13号 山口祐造 1983 諫早文化協会

(2)『播磨国風土記』714。宍粟の郡(しさわのこおり)の比治の里 庭音村の条に「大神の御乾飯が濡れてかびが生えた。すなはち酒を醸させ、それを庭酒として、献って酒宴をした。…」とある。

『風土記逸文』大隅國 醸酒条に「大隅の国では一軒の家で水と米を備えて、村中に告げてあるくと、男女が一所に集合して、米を噛んで酒槽に吐き入れて、散り散りに帰ってしまう。酒の香がでてくるころまた集まって、噛んで吐き入れた人たちがこれを飲む。名づけてくちかみの酒という、…」とある。米での酒造りがこの頃から確認できる。

(3)『七十一番職人歌合』1500年末頃成立。職人歌合のなかでも最も職人の数が多い。多種多様な職種、職人が市中を埋めていたこの時代、活発な中世日本の社会の様相が理解できる。ここでは「酒作」として6番右に女性の酒作が描かれている。

(4)『増補續史料大成』第38巻(多聞院日記一) 第39巻(多聞院日記二) 1994 株式会社臨川書店

文明10(1478)年から元和4(1618)年に及ぶ日記で、奈良興福寺の塔頭多聞院の僧により書き継がれたもの。松永久秀や織田信長といった戦国武将の動きなどにも記述が及び、この時代の世相を伝える史料。

- (5)『童蒙酒造記・寒元造様極意伝』貞享4(1687)・元禄3(1690) 不詳・袋屋孫六 日本農書全集51 1968 (社)農山漁村文化協会
 摂津を中心にした酒造りに関する詳細な技術解説書。
- (6)『本朝食鑑』元禄10(1697) 人見必大(1642-1701) 東洋文庫296 1981 株式会社平凡社
 「近頃酒の絶美なるものを諸白という・南都・摂州の伊丹・池田・鴻池・豊田等の処は諸白酒を醸造して・最も極上品である・・・」
- (7)『日本山海名産圖會 卷之壹 摂州伊丹酒造』寛政11(1799)「日本庶民生活史料集成」第10巻 農山漁民生活 1972 (株)三一書房
 摂州伊丹酒造りが図繪とともに記述してあり、そのなかに「・摂州伊丹に醸するもの尤醇雄なりとて、普く舟車に載せて台命にも應ぜり。・今も遠国にては諸白をさして伊丹とのみ稱し呼へり、・されば伊丹は日本上酒の始とも云べし・・・」
- (8)『海游録—朝鮮通信使の日本紀行』 付篇 日本聞見録(抄) 1719年頃 申維翰(1681-?) 東洋文庫252 2008 株式会社平凡社
 「酒は諸白をもって上品となす。白米の麴に白米の飯を和して作る。ゆえに諸白と名づける・・・」
- (9)『日本財政經濟史料』卷二 大藏省編纂 1924 財政經濟學會
 宝暦4年甲戌11月の条に「酒造米之儀・・・以来者酒造り候儀勝手次第たるべく候・・・」

【酒造りの道具】 単位:cm



エブリ 全長376.0



カイ 全長60.5~67.0



ダキ 全高72.0
 径 37.0



ハンギイ 高40.0 径75.0



麴蓋 高6.0 縦53.9 横31.0



崩ン棒 長61.0



泡消シ 長68.5

諫早の歴史文化の特徴

諫早市経済交流部文化振興課主任 野澤哲朗

はじめに

諫早は交通の要衝(結節点)、三つの海と多良岳という言葉で表現される、人口13万人の長崎県に所在する都市である。旧石器時代から人が住み始めていることが判明しているため、1万年以上前から歴史文化が蓄積され、現在も継続し、諫早らしさは進化している。

市条例や法律等で市や県・国にとって欠かせないとされる貴重な指定文化財の件数は、令和5年4月現在で市内には90件ある。周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が諫早市内に250件、未指定の文化財が1,000件以上あり、いわゆる文化財と呼ばれるものは1,300件以上ある。これらは、諫早市の歴史文化を語る上で欠かせないもので、各地域でそれぞれの時代の人々によって、現在まで保存され、地域の伝統芸能や伝統文化として活用されながら継承されてきた。それらは諫早に住む人々にとって、いつもそばにある当たり前前の存在である。

本稿の目的は、諫早の歴史文化の特徴を、その地形と自然環境、生活様式、社会環境、信仰の4つの視点から整理し、諫早らしさを考察することである。

1 地形と自然環境

(1) 多良岳と雲仙岳の火山活動から生まれた地形と三つの海

歴史文化の舞台としてあるのが、地形とその上に形成された自然環境である。その特徴を一言で表すと「多良岳と雲仙岳の火山活動から生まれた独特の地形と三つの海」である。多良岳は、富士山と同じ成層火山の特徴を持ち、雄大な裾野をもつ形が良い休火山である。広くなだらかな裾野とそれに連なる台地は、有明海、橘湾、大村湾の三つの海に面する。

市の北西部から中央部そして東部は多良岳の山塊からなり、南部は活動中の雲仙岳に接続する千々石断層の延長線上にある。橘湾は雲仙岳の火山活動に伴うカルデラ状の窪み(断層)の一部と言われる。飯盛地域の山は粘性の強い溶岩からなる火山性の独特の形態をしており、地名の由来にもなっている。また、断層涯に面した海面にある「牛のはなぐり」(市指定名勝)は、長期間の浸食によってつくられた自然の造形である。

有明海はおよそ4万年前に噴火したと言われる阿蘇起源の火山灰が海底に厚く堆積し、6mという世界でも有数の干満差を有する九州最大の内海である。小長井地域、高来地域、そして諫早地域、森山地域のいずれもが有明海に面し、干潟特有の地形が広がる。

大村湾は1万年前の旧石器時代に海ではなく湖であったが、縄文時代に内海になり、現在も穏やかで豊かな内湾で、多良見地域と東大川などが大村湾に面している。

(2) 暖地性樹叢の植物群

地形の上に形成されたのが植物を主体とする自然環境である。諫早の中心に位置する本明川河口には「諫早市城山暖地性樹叢(国指定天然記念物)」があり、原始からの植生を色濃く残す暖地性樹叢が良好に保存され、市の中心部にあって住む人の心を安らかにする自然林である。この植物群の文化財としての普遍的な価値は、原植生であるミムズバイースダジイ群集とケヤキ・ムクノキ群落とが良好に保存されていることである。また、ヒゼンマユミの標準地としても知られ、小長井地域の長里川沿いに市指定天然記念物である「長里・阿蘇神社のヒゼンマユミ群生地」、高来地域には「天初院のヒゼンマユミ群生地」があり、ヒゼンマユミは多良岳南麓で確認される。

多良見町にある伊木力遺跡の発掘調査成果によると、縄文時代の花粉による分析でクスノキなどの暖温帯の植生が縄文時代から存在したことが判明している。諫早公園で見ることができる暖地性樹叢の植物群は、6,000年以上前から諫早の自然環境の基本となる植物群で、かつては市域全域に広がっていた自然環境であった。暖地性樹叢を特徴づける植物群は「諫早神社のクス群(県指定天然記念物)」や「飯盛町のヘツカニガキ(県指定天然記念物)」、「津水・熊野神社の植物群(市指定天然記念物)」もある。

有明海に注ぐ長里川中流にある「小長井のオガタマノキ(国指定天然記念物)」は、幹回りが日本一のオガタマノキで、暖地性樹叢の特徴を示すものである。「向島のノアサガオ群生地(市指定天然記念物)」と「池下のアコウ(市指定天然記念物)」は、橘湾に面した島及び半島にあり、原始から見られる日本固有の暖地性の植生を示す植物である。多良岳山頂近く、轟峡の上流にある「多良岳ツクシヤクナゲ群叢(国指定天然記念物)」は、九州独特の山岳に見られる非常に珍しい植物である。これら植物群や樹木は、諫早に原始からある植物の特徴を今に伝える貴重な植物群である。

「女夫木の大スギ(国指定天然記念物)」は、多数の枝を上大きく伸ばす特性を持つ非常に個性的な杉で、原始から諫早にあった暖地性樹叢の中にあつて珍しい植生を示すものである。同じく「富川のかつら(県指定天然記念物)」は、日本海側に主に分布する北方の植生を示す植物だが、湿潤で寒冷な富川溪谷に根付いた珍しい植生である。

この他に貴重な植物として江戸時代から栽培が始まった蜜柑の木の原木である「伊木力のコミカン(市指定天然記念物)」がある。また、明治期に植えられた「森山西小学校のアベマキ(県指定天然記念物)」がある。

(3) 地形と自然環境とによる遺伝子への影響

6,000年以上前から諫早に住み生活する私たちの遺伝子には、諫早独自の地形と自然環境とが影響している。私たちが多良岳や有明海を見たり、本明川などのせせらぎを聞いたり、諫早公園の林の木陰に入ると、心が安らくなる瞬間がある。長い年月で遺伝子に刻まれた効果であり、諫早に住む人にとって安心できる地形や自然環境が維持されていることに反応しているのである。

2 諫早人の生活環境

(1) 多良岳と三つの海と人々の生活

生活環境は「多良岳と三つの海と人々の生活」で、諫早は三つの海に囲まれ、それぞれの海に合った様相の遺跡が多く、当時の人々の豊かな生活や交流を知ることができる。

10,000年前の旧石器時代の諫早人の生活は、大村湾に注ぐ東大川沿いの柿崎遺跡・高野遺跡等から知ることができる。ナイフ形石器・三凌尖頭器等が発見されており、ナウマンゾウなどの大型の動物を集団で捕獲していた。また、柿崎遺跡ではナイフ形石器を作製する道具やその痕跡が確認されている。ナイフ形石器の素材となる黒曜

石を大村湾経由で佐賀や佐世保から獲得し、狩猟の道具を製作していたことが確認されている。

続く6,000年前の縄文時代には、大村湾沿岸の伊木力遺跡、有明海沿岸の西常盤貝塚、橘湾沿岸の有喜貝塚のそれぞれで生活の痕跡が確認されている。伊木力遺跡では6.5mを超えるセンダンノキをくり抜いた丸木舟1艘と10kgを超える礎石が多数出土し、内海の大村湾を飛び出し外洋航海をしていた。また多様な魚骨や貝、獣骨、多数の種子が発見され、海や山の豊かな幸を利用していたことが判明している。西常盤貝塚では、多様な魚や貝、獣骨も出土しているが、特に牡蠣殻が多く、カキを煮て加工した様子が復元され、干潟ならではの生業が行われていた。有喜貝塚でも魚や貝、獣骨の他に、黒曜石製の釣り針などが発見され、土器と弓矢の発明を契機とする縄文人の生活道具の多様さや、豊かな食生活を知ることができる。

弥生時代から古墳時代には、小野平野の小野宗方遺跡で水田の水路に利用されていた木製の杭列とイネ花粉の化石が発見され、当時から水田経営が行われていたことが確実になっている。

奈良・平安時代には、小野条里遺跡・田井原条里遺跡・田結条里遺跡で条里遺構が発見されており、その当時に日本全国にはほぼ一斉に施行された税収を割り出すための田地管理を行う条里制度が諫早でも確認され、水田経営と確実な税収が広く行われていたことが分かる。

その後、干潟特有の地形を生かし、干拓による田地の拡張が本明川河口や森山地域で行われて、鎌倉時代から江戸時代まで長い年月をかけ、広い面積の干拓が行われている。江戸時代には、飯盛地域の江ノ浦川で河口堰の設置と、干拓による田地の拡張が行われている。

有明海の干満の差を利用して営まれた漁労の仕掛けであるスクイ漁場は、江戸時代の諫早家文書の安政年間に描かれた絵図で多数存在することが確認できる。現在も、「水ノ浦のスクイ漁場(市指定有形民俗文化財)」が存在し、いつごろまでさかのぼって利用された仕掛けであるのか不明であるが、非常に単純な構造であるため、中世以前までさかのぼる可能性もある。

多良見地域では、江戸時代からミカン栽培が盛んであり、その原木と言われる「伊木力のコミカン」が市の天然記念物として指定されている。

小長井地域では、江戸時代までさかのぼる石材産地および石材加工業が発展しており、現在も帆崎石もしくは諫早石として採掘・加工・出荷されている。

(2) 三つの海と人々の生活

現在は小野平野・高来地域の境川沿いの水田経営、谷地形を利用した水田経営、橘湾岸の大地を利用した畑地経営が行われている。干拓地を利用した水田や畑地は大規模であり、水田の裏作で小麦栽培も行われ、野焼きの景観は季節を物語る風物詩である。多良見地域や小長井地域の海に面した斜面ではミカン栽培が行われている。畑で栽培されるのは、ジャガイモ、ニンジン、ショウガなどが多く、飯盛地域ではジャガイモ、早見地域ではニンジンなどが栽培され、花卉類のハウス栽培も多い。

3 歴史文化からみる社会環境

社会環境は「交通の結節点から生まれた歴史文化」という言葉に集約される。北は大村市と佐賀県太良町に、南は島原半島、東には長崎半島がつながっており、奈良時代から江戸時代、そして現在まで交通施設が発達し、交通の要衝・結節点として大きな役割を果たしている。

弥生時代前期には、風観岳支石墓群で朝鮮半島起源の墓制である支石墓が多数確認され、弥生時代中期には諫早農業高校遺跡(立石遺跡)において朝鮮半島製の細形銅剣が大型甕棺の内部から発見されており、弥生時代

からモノやヒトの交流の拠点が発見されたことが判明している。

奈良・平安時代には、物流や情報の集積拠点としての「駅」が船越地域に設置され、本明川河口の田井原条里遺跡では、平安時代の「ものさし」と貨幣が発見され、物流の拠点で利用されていたものをはかる道具である。船越地域に設置された「船越駅」から北に、大村街道を通じて大村湾沿岸には「彼杵駅」が設置され、「船越駅」から南の島原半島には高来郡の拠点である「高来郡衙」や「野鳥駅」をむすぶ道路が整備されている。船越駅には、長崎市の野母半島先端に設置された警固所（難破船等の見張り場）の情報も集積される。このように奈良・平安時代から、交通の結節点という社会的機能があり、中世においてもその機能が継続していることが確認できる。

江戸時代は、江戸幕府により長崎港に海外との結節点としての機能が設定されたため、諫早に存在した交通の結節点としての機能はより強化されることとなる。長崎街道・多良海道・島原街道の三本の陸路と三つ海を通じた海路で、多くの物や文化が交流した。特に天保10年に長崎街道と多良海道と島原街道の交差点に建造された「眼鏡橋（国重要文化財）」は、諫早らしさを示す象徴的な文化財である。江戸時代後半には、当時の最新の科学技術や医療・哲学が長崎港から、長崎街道沿いの都市を経由して日本全域へ広がっていく。その一例として佐賀藩が製作した電信機（エーセル・テレ・カラフ）が諫早領の家臣の家に伝わり、歴史資料として国重要文化財に指定されている。諫早は交通の結節点としての役割を奈良時代から担い、現在も交通の要衝として発展している。

4 歴史文化からみる信仰

諫早の信仰は「山と川の豊かな自然と平安時代から伝わる荘厳な信仰」という言葉に集約できる。多良岳は雲仙岳とともに古くから信仰を集めた山で、山頂にある山岳寺院である真言宗寺院の金泉寺や多良岳大権現をはじめ、裾野や平地に多くの寺院や神社が展開し、日本古来の信仰の姿を色濃く残し、現在もその信仰が継続している。

西常盤貝塚では縄文時代に作られた土偶の顔が出土し、表現された笑みは出産や子育ての喜びを表現したもので、出産などの人のいとなみに関する縄文時代の信仰を知ることができる考古資料である。

「金泉寺の木造不動三尊像（県指定有形文化財）」や「教専寺の木造阿弥陀如来立像（市指定有形文化財）」は、平安時代の信仰を具体的に現在に伝える美術工芸品である。船越駅にある「西郷の板碑（県指定有形文化財）」は県内でも最古の紀年銘を有する鎌倉時代の石造物で、天台宗寺院が現在もあり、平安時代の信仰が継続している。

「天祐寺の木造如意輪観音坐像（市指定有形文化財）」は鎌倉時代の作で、安勝寺所蔵「旧莊嚴寺の木造阿弥陀三尊像（市指定有形文化財）」と「和銅寺の十一面観世音菩薩立像（県指定有形文化財）」並びに「大雄寺の十一面観世音菩薩坐像（県指定有形文化財）」そして「唐比権現の神像と仏像（市指定有形文化財）」は室町時代の作であり、鎌倉時代以降に中国からもたらされた禅宗などの新しい仏教が諫早にも定着していることを物語る。これらの木造彫刻や石造物は、交通の要衝としてのヒトやモノの交流の賜物で、天台宗、真言宗、曹洞宗、浄土宗などの各宗派の寺院が建てられ、それぞれの時代の信仰理念が諫早に定着し、現在まで継続していることを物語っている。

戦国時代になり、長崎や島原半島そして大村では、キリスト教が盛んになり、それまで存在した仏教や神道の拠点が地域の人によって破壊されたことが確認できる。しかし、諫早では寺社の破壊行為は確認されず、日本古来の信仰の有り方が色濃く良好に現在も保存されいている。

江戸時代の諫早の中心的な信仰の拠点は莊嚴寺と四面宮であり、多良岳修験の拠点でもあった。「天祐寺の木造四面菩薩坐像（県指定有形文化財）」は、雲仙岳を起源とする四面神信仰が島原半島ではキリスト教により断絶するが、諫早では信仰が継続していることを物語る江戸時代の美術工芸品である。諫早の信仰関連の文化財は、日本古来のものが多く、キリスト教による破壊が確認されないことが特徴の一つである。また、江戸時代には長崎

街道を通じ、新たに中国からもたらされた黄檗宗の寺院が諫早にも定着しており、常に新しい信仰理念を受け入れる豊かさを諫早は持っている。飯盛普同寺に伝わる「林公琰肖像画(市指定有形文化財)」や「愛宕山の肥前鳥居(市指定有形文化財)」の扁額などは、国際的な文化の交流を物語る。

水害や台風、そして干ばつをはじめとする諫早ならではの土地に起因する自然災害に対応してきた諫早の人々は、「富川・大雄寺の五百羅漢(県指定史跡)」に代表されるように自然災害の記憶を石に刻み、その脅威を現在に伝え、江戸時代の諫早人の自然に対する敬意をも伝えている。

諫早にある信仰を伝える文化財や寺社には、日本古来の信仰形態を色濃く現在に伝える非常に貴重な文化財が多い。また、様々な宗派の仏教が共存しており、諫早の土地の豊かさを物語っている。そして、それぞれの時代において、交通と信仰の拠点に最新の理念が導入され、現在に伝えられていることは、諫早独自の歴史文化の特徴とすることができる。

江戸時代の土師器皿からみた諫早の祈り

諫早市経済交流部文化振興課主任 野澤 哲朗

はじめに

これまで20年ほど考古学の研究を通じて出土品を観察し、写真撮影、実測図作成などを行ってきた中で、焼成後の土師器の口縁部に施される人為的な打ち欠き事例が存在することに気づいた。時代性は古墳時代をはじめとして、古代・中世・近世に至るまでの主に土師器の坏や皿に打ち欠きが存在する。(註1)本稿は肥前国高来郡内で出土した中近世の土師器の出土事例を整理し、そこにこめられた祈りを追求する。

1 諫早市内出土の中近世土師器坏・皿の概観

(1) 上野町遺跡出土の13世紀代の土師器坏・皿(註2)

上野町遺跡は平安時代に船越駅が設置された船越丘陵の中央に所在する弥生時代から江戸時代までの複合遺跡である。諫早南部第1地区土地区画整理事業に伴い平成19年に実施された発掘調査で土師器坏・皿が出土した。C-2区SK-1は坏70点、小皿7点、F-2拡張区SK-1は坏97点、小皿10点がまとまって出土した土坑である。遺構の性格は、掘り窪められた浅い穴に土師器坏と小皿が口を上にして重ねられた状態で検出された。掘立柱建物跡の周囲に三つの土師器埋納土坑が位置する点、土師器坏が多くあり、灯火用で使用され黒変した坏もあるため、掘立柱建物跡の中で行われた供食・饗宴に伴う大量の土師器利用の結果である。供食・饗宴が行われる契機は、収穫祭や出陣等に伴う祭祀行為である。時代性は中国産青磁片が出土しているため13世紀前半とされる。上野町遺跡で検出された土師器坏は、非常にもろいため完全な形にまで復元できる個体は極めて少ないが、その法量は、F-2拡張区SK-1では、口径が7.5cm以上10cm未満で器高が1cmから2cm未満のグループと口径が12cm以上から14cm以下で器高が2cm以上3.5cm未満のグループの二つに明瞭に分かれ、C-2区SK-1も同じ傾向にある。

上野町遺跡の発掘調査報告書では県内の同じ形態の土師器の多数出土事例として、雲仙市瑞穂町の伊古遺跡で出土した旧河川脇のSX01出土の300点ほどの土師器を紹介する。その中には、口縁部に人為的な打ち欠きが認められ、祭祀利用の土器群と想定される。ここでは、河川脇という幽明境を意味するような場所への廃棄である。

諫早市飯盛町開遺跡には国道開削の際に出土したと伝わる土師器や、県道拡幅工事で出土した土師器坏があり、上野町遺跡で大量廃棄された土師器に形態的に類似する資料である。開遺跡には溶結凝灰岩製の赤みの強い石材の五輪塔が二基あり、14世紀代前半と想定され、安養寺という中世寺院跡が存在した。

(2) 諫早家御屋敷跡5号溝土器溜りの江戸期初頭の土師器坏・皿(註3)

高城跡のすぐ東に隣接する平安時代から江戸時代までの複合遺跡であり、遺構の中心は江戸時代の諫早家御屋敷跡とそれ以前の中世の遺構である。平成20年の発掘調査地点で近世初頭に造成されたV層の下(第2期面=中世)において検出された5号溝土器溜りから出土した土師器坏が注目される。調査区幅は東西10m強であるが、

それを北西から南東へ横切るように幅3mほどの石積み護岸を伴う5号溝があり、その一部に集中して西岸から投棄された土師器の集積である。時代性は西郷氏の時代であり、中世末から江戸時代初頭にかけての時期が想定される。

出土品は小型品21点、大型品15点で、いずれも燈明皿としての使用痕が認められないことと墨書が確認される個体があること、そして成形手法と法量の共通から一定の規格のもとに製作されたことなどが報告される。法量は小型が口縁部径7.25～6.3cm、平均6.8cm、器高は2.95～2.1cm、平均2.53cm、底径は3.9～2.7cm、平均2.52cmである。大型が口縁部径12.2cm～10.9cm、平均11.47cm、器高は3.9cm～2.9cm、平均3.6cm、底径5.6cm～4.6cm、平均5.35cmである。また、筆者の観察では口縁部に人為的な打ち欠きが認められる個体が小型品で2点、大型品で3点ある。溝に廃棄された後に打ち欠きされた断面に鉄分などが付着し変色している個体もあり、時代性は異なるが伊古遺跡の旧河川脇の出土品に類似する特徴である。これらの土師器は最終的には溝に投棄されているが、溝の周辺で行われた祭祀や饗宴に利用されたものもあったと考えられる。

(3) 千々石ミゲル墓所推定地横2021出土土師器皿

千々石ミゲル墓所推定地の墓坑上面で検出された土師器小皿で、ほぼ完全な形に接合復元された江戸時代の墓坑に伴う資料である。(註4) 出土状態は水平に口を上にした状態で、墓坑を覆う礫面直上で検出されている。この土器は観察・実測したところ、直径6.1cm、高さ1.1cm、底径4.3cmの小型の皿である。口縁部は上向きで断面三角形に近く、端部は丸みがある。底部は糸切離しのままでその痕跡がよく観察できる。口縁部に円周を三等分する位置に幅7mmほど深さ1～2mmの人為的な打ち欠きが確認できる。また、口唇部外面に煤の付着が6～7箇所あり、灯火用の器として利用されたことが分かる。これらの観察と出土状態から、墓坑に詰められた円礫上のほぼ中心に置かれ6～7回灯火用として利用されたことが復元できる。

(4) 沖城跡、諫早家御屋敷跡、愛宕山三重塔下出土の土師器

戦国時代から江戸時代にかけての利用が想定される沖城跡からは、大きさが三種に分類できる土師器があり、その大きな部類の中に内面に圏線をもつ坏がある。(註5) 口縁部直径12.6cm器高3cm底部径7cmで内面見込みに細い溝を一条めぐらし底部はへら切りで、内外面に黒斑がある。この土師器が注目される出土品であり、類例が森岳城跡や玖島城跡からも出土しており、江戸時代初頭以降に利用され始めた土師器と考えられる。森岳城跡の出土品は4点ありほぼ完全な形に復元でき、口縁部直径13.8～12cm器高2.8～2.2cm底部径7～6.8cmで、底部が丸くなる個体が二つある。沖城跡出土の圏線を持つ土師器の時代性は17世紀初頭以降、森岳城跡の土師器の時代性は17世紀後半代で、1668年(寛文8)に高力氏から松平氏への城主変更が契機である可能性が高い。

諫早家御屋敷跡の出土は、口縁部径9.2cm器高1.6cm底部径6cmで、内外面に黒斑がある。江戸時代中期から後期の堆積土に伴う出土品である。内面見込みに圏線はみられないが、類似する形態である。

愛宕山三重塔は1731年(享保16)に建立された信仰に係る石造物で、石塔には「仁王経千部読誦并一部一字一石石塔」及び「導師 平仙寺運盛」という銘が刻まれる。その下から土師器2点と銅銭19点、墨書のある小円礫48点が発掘されている。(註6) 銘文のとおり一字一石の小円礫が出土しており、発掘された当時の写真を見ると土師器の2点は口を合わせた状態でほぼ同じ高さの周囲に銅銭が配置され、その下には墨書のある小円礫が多数存在する。土師器は2点とも内面に圏線をもち焼成良好で黒斑は無く、法量は口縁部直径8.7cm器高1.8～1.7cm底部径6.2～5.8cmである。底部の調整は糸切離し痕跡を残すものと、へらできれいに底部の調整痕を削るものと二種ある。

これらの土師器には、法量が3種あり、口縁部に意図的な打ち欠きはいずれも確認されず、時代性は江戸時代の初頭以降となる。その用途は、森岳城跡では地下石倉の地鎮、三重塔では銅銭との併用による地鎮という目的が想定できる。地の神を鎮め、現世に生きる人々に災難が降りかからないように祈る祭祀に利用されている。

2 土師器の利用形態とこめられた祈りについて

これまで紹介してきた土師器坏皿の出土状態から想定される利用形態について整理する。住空間に近接する掘立柱建物周囲での出土事例に上野町遺跡の土師器の多数埋納土坑がある。C-2区SK-1は坏70点、小皿7点、F-2拡張区SK-1は坏97点、小皿10点がまとまって埋納された土坑である。出土状態は口を上にして重なる状態で出土し、廃棄する容量に合わせた大きさの土坑が掘られ埋められている。掘立柱建物で行われた供食・饗宴に利用された土師器が一括し投棄されており、生きていた人が利用した土師器の一括埋納であろう。

同じく住空間に近接する事例が諫早家御屋敷跡の土師器の集積である。溝に大小2種の土師器36点が一括投棄されている。上野町遺跡の場合とは異なり、重なるような状態ではなく、溝に流し込まれたような状態である。専用の土坑を掘り埋納された上野町遺跡の事例と異なり、溝に流すことに意味があったとも考えられる。土師器には灯火用として利用されたもの、口縁部に人為的な打ち欠きが見られるものがあり、その用途はさまざまであったものと思われる。口縁部に人為的な打ち欠きが見られるものは、なみなみと酒類を注ぐことができないため、容器としての機能が否定されている。その用途は具体的に明らかに出来ないが、食膳としての機能を否定し、他の用途に利用した痕跡であることが指摘できる。溝に投棄するという意味については、人の世界で利用されていた容器を水の流れに投入すること、災いを宿らせた容器を災い自体も一緒に流してしまうという祓いの意図があったと想像できる。

千々石ミゲル墓所推定地横から出土した口縁部を三等分する位置に人為的な打ち欠きある土師器は、食膳容器ではなく死者を葬るための器としての役割を宿らせたものか。

上記の事例は、食膳容器として作られた土師器坏・皿に人為的な打ち欠き形態を変更して食膳としての用途を否定している点が共通する。

一方、内面に沈線をもつ土師器は、当初から食膳に要するためでない限定された用途を想定し製作されたと考えることができる。愛宕山三重塔下の出土品は地鎮のための祭祀容器、森岳城跡も地鎮祭祀に利用されている。内面に圏線を施している意味が、食膳に供するものではないことを示し、祭祀専用の容器としてつくられ利用されたのである。

これまで見てきたように、土師器坏・皿にこめられた祈りは、具体的には指摘できないが、生きていた世界での儀礼と死者を葬る際の儀礼とに大きく分けることができる。地を鎮める、死者を鎮める、災いを祓い流すという意味では、いずれも現生に生きる人々に災いが降りかからないように、あるいは安寧に過ごすという目的が存在する。昔から人々は個人としては平和を願いながら、社会としては戦争の歴史を繰り返してきたのである。

おわりに

土師器の出土状態の裏側に、諫早人の祈りを探る試みをおこなってきた。明治以降150年が経過し新しい宗教観が浸透し、江戸時代までに培われてきた宗教観に基づく祈りの観念が薄れてきた。考古学的に個人の深層心理を追求することはできないが、広く浸透した社会的な祈りを追求することは可能かと思われる。今回取り上げた土師器の口縁部に人為的な打ち欠きを施す行為は、古墳時代から江戸時代初頭まで連綿とこの地方で行われていた伝統的な習俗である可能性もある。今後もこのように考古資料から社会的な祈りの形態を追求していくことができると信じている。

- 註1 古墳時代の事例の一つは、雲仙市国見町所在の龍王遺跡2006報告31区S B01から出土した二重口縁壺である。古墳時代前期に特徴的にみられる土師器の壺である。
長崎県雲仙市教育委員会2006『龍王遺跡(倉地川古墳)』雲仙市文化財調査報告書(概報)第1集
平安時代の事例の一つは、雲仙市国見町所在の石原遺跡8区P i t01から出土した土師器坏である。あるいは、雲仙市国見町の矢房遺跡の4区出土品である。(石原・矢房遺跡等)
- 註2 上野町遺跡で平成19年に実施された発掘調査の成果については、平成20年に発掘調査報告書が刊行されている。諫早市教育委員会2009『上野町遺跡1127、1159地点』諫早市文化財調査報告書第23集
- 註3 諫早家御屋敷跡では諫早高等学校附属中学校校舎建設工事に伴う発掘調査が行われ、その成果については平成23年に発掘調査報告書が刊行されており、筆者は令和5年に6月26日に現物の観察を行った。長崎県埋蔵文化財センター2011『諫早家御屋敷跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第2集
- 註4 諫早市では市内におけるキリシタン関連遺跡等の調査を行っており、それに伴い多良見町山川内に所在する千々石ミゲル墓所推定地の範囲を確定するためにすぐ北側にある市が所有する土地を発掘調査している。今回、紹介する土師器はその調査成果の一部である。
- 註5 沖城跡出土の土師器は法量によって3種に分類できる中世末から江戸初頭のもの、その他に内面に圏線を有する土師器が出土している。諫早市教育委員会2000『沖城跡』諫早市文化財調査報告書第14集
- 註6 昭和59年～60年にかけて諫早ライオンズクラブによって行われた愛宕山宝塔と三重塔の復元作業により発見された出土品である。復元作業は昭和60年発行の諫早史談第17号の愛宕社調査委員会「愛宕社の調査報告」において紹介されている。出土品の写真や県内での類例については、令和5年3月31日発行の長崎県考古学会会報第31号 野澤哲朗「諫早市愛宕山三重塔出土の土師器」において紹介している。
- 参考文献 水野正好2022『日本のまじなひ』高志書店

高来郡内の1200年代～1750年代までの糸切り底土師質土器の口径分布

西暦	遺跡	遺構	15.9~ 15.0	14.9~ 14.0	13.9~ 13.0	12.9~ 12.0	11.9~ 11.0	10.9~ 10.0	9.9~ 9.0	8.9~ 8.0	7.9~ 7.0	6.9~ 6.0	文献	
1200~ 1300年	上野町遺跡	D区 SB01 C-2区 SK1 F-2拡張A 区SK1		7	8	3		2	2	1			2009諫早市 23集	
			1	2	5	7	1	2	9	6	2			
			<p>上野町遺跡杯</p> <p>上野町遺跡皿</p>											
1200~ 1300年	開遺跡	SB1							1	1	2		2007長崎県 193集	
			<p>開遺跡皿1と皿2</p>											
1400~ 1500年	日野江城跡	5TSK1						2	3			3	3	1998北有馬 2集
			<p>日野江城跡杯</p> <p>日野江城跡皿</p>											
1500~ 1600年	諫早家 御屋敷跡	5号溝 土器溜				2	10	2			2	9	2011長崎県 埋2集	
			<p>諫早家御屋敷跡杯</p> <p>諫早家御屋敷跡皿</p>											
1600~ 1610年	玖島城跡	SB1 SD2		1			2	2	1	1		1	2002長崎県 167集	
					3		6	7						
			<p>玖島城跡杯</p> <p>玖島城跡皿</p>											
1550~ 1650年	林ノ辻遺跡	2号円形 墓坑内						1				7	1983諫早市 4集	
			<p>林ノ辻遺跡杯</p> <p>林ノ辻遺跡皿</p>											
1550~ 1700年	沖城跡 土師質土器	杯A 杯B 杯C 皿 小皿A 小皿B						1	3			2	1998長崎県 143集	
								2	2					
									4					
									4					
											8	4		
											1	1		
			<p>沖城跡杯A</p> <p>沖城跡杯B</p> <p>沖城跡杯C</p> <p>沖城跡皿</p> <p>沖城跡小皿A</p> <p>沖城跡小皿B</p>											
1550~ 1700年	沖城跡 土師質土器	I a I b II a II b III									3	3	2000諫早市 14集	
											4	1		
									3					
								2	3					
			<p>沖城跡 I a</p> <p>沖城跡 I b</p> <p>沖城跡 II a</p> <p>沖城跡 II b</p>											
1650以降	森岳城跡 圏線土師器	土坑 (SK01)											2002長崎県 166集	
			<p>森岳城跡圏線土師器</p>											
1731年	愛宕山三重塔 圏線土師器	地鎮									2		2023長崎県 考古学会報	
			<p>愛宕山三重塔圏線土師器</p>											

愛宕山三重塔の出土品について

諫早市経済交流部文化振興課主任 野澤 哲朗
専門員 福井 遥香

はじめに

諫早市の中心にある愛宕山の三重塔は1731年(享保16)に建立された。上山公園の駐車場から西へ石段を上り、鳥居を3つ通過した平坦面上にある。

諫早市郷土資料館解説シートに次のような解説がある市指定文化財(建造物)である。『永禄6(1563)年6月、大村純忠は洗礼を受け、日本最初のキリシタン大名となります。この頃から大村領内の神社仏閣の破壊がはげしくなり、金泉寺も焼討されました。武雄領主後藤貴明は、伊佐早領主西郷純堯、平戸領主松浦隆信を語らい、反純忠派の大村家臣を結んで、純忠を除こうと攻めたてました。12月28日、島原半島の有馬義純は、弟純忠支援のために伊佐早を攻め、埋津で激戦を展開します。この戦いの武運長久を祈って、純堯が愛宕社を創建します。祖父尚善以来、常に有馬傘下の武将として活躍して来た西郷氏が、初めてその有馬と一戦を交えたのです。わざわざ京都の愛宕神を勧請してという、この戦いに臨む意気込みが感ぜられます。』(註1)

また、三重塔についての建立は次のようなきっかけがある。『享保16年(1731)3月、頂上に三重の石塔が建てられました。これは、「愛宕山仁王経千部読誦並一字一石塔」で、仁王経を千回読んで供養して頂いた大法要記念の供養塔です。川原の丸い平べったい石を千個拾い集め、一回読んだらその経の文字を一字墨で書く。二回目は、次の文字を書くというように、一文字ずつ書いた小石千個を塔の下に納めてあります。この塔の施主は百武与兵衛昌芳、導師は平仙寺運盛と刻んであります。』

本稿では、その三重塔下に埋納された土師器と寛永通宝について考古学的な検討を加えて資料紹介する。出土の契機は、昭和59年～60年に実施された諫早史談会による斜面に落下していた石材の引き上げと石塔復元図の作成、そして諫早ライオンズクラブによる現物復元作業である。詳細は『諫早史談』第17号「愛宕社の調査報告」に報告されている。(註2) (野澤)

1 三重塔出土の埋納土師器

(1) 出土状況(写真1～2)

出土状況の写真から、2点の土師器の皿が、口縁部を合わせた状態で出土、周囲には銅銭が四方に配置されていた。周囲には多数の一字一石経があり、その上に土師器と銭が安置された状態での発見である。この出土状態が物語る土師器と銅銭の埋納目的は、三重塔建立に際しての地鎮という目的である。

出土した土師器2点、銅銭19点、墨書のある小円礫48点は、諫早市美術・歴史館の収蔵資料である。美術・歴史館の前身である諫早市郷土館では、常設で展示されていた。墨書の文字には、是・化・無・十・業・梵などがある。石塔銘文に「仁王経千部読誦并一部一字一石塔」と「導師 平仙寺運盛」とあり、仁王経の千部塔である。

塔の建立と同じ年に埋納されたことから使用された年代が判明している基準となる考古資料である。

(2) 出土した土師器の特徴(写真3～4、第1図1～2 表1)

法量は口縁部直径8.7cm、高さ1.7～1.8cm、底部径5.8～6.2cmである。2点いずれも内面の見込み体部立ち上がりの内側に沈線が直径5.5cmの正円に一条巡る。整形は粘土塊からロクロ水挽により、調整は回転利用のナデ仕上げである。1の底部は糸切り離しによるもので、底部外側のみは糸切痕跡をナデ消しており、平滑な仕上げとなる。2の底部には糸切痕跡は残らず、ヘラ削りの後にナデ消されており、切り離しの痕跡を残さない極めて平滑な仕上げとなる。胎土は水簸された粘土で微小の雲母粒子が入り、太陽光によりキラキラと輝く効果をもつ。1には、仕上げに化粧土を薄くかけていることが顕著にわかる。2も同様な仕上げと思われる。これらの土師器の年代は、三重塔の建造年代である1731年以前が想定できる。土師器の口縁部外径と底部径との割合は0.667～0.713の範囲、同じく口縁部外径と器高との割合は0.195～0.207の範囲にある。写真右側の個体の内面には変色した部分があり、出土状態の写真から丸みのある有機物が入っていた痕跡とみられる。写真右の個体の外面の口縁部分に一部で煤が非常に薄く付着した痕跡があるため、ほんの一瞬、燈明として利用された可能性がある。(野澤)

2 三重塔出土の寛永通宝

(1) 時代性について(写真5～7)

出土した銭貨は江戸時代に流通していた寛永通宝で素材は銅である。寛永通宝は1636(寛永13)年以後、各地で鑄造・発行された貨幣で、その鑄造された年代から「古寛永」と「新寛永」に分類することができる。新寛永は1697(元禄10)年以降に鑄造された寛永通宝のことを指し、それ以前は古寛永と大別する。(註3)

古寛永は一般的に新寛永に比べ太字なこと、また「寶」の字の下部分の「貝」のはらいがカタカナの「ス」になっていることが多く、新寛永は古寛永に比べ細字であること、「寶」の字の下部分の「貝」のはらいがカタカナの「ハ」になっている点が分類のポイントである。この観点から分類したところ、12枚のうち5枚が古寛永、7枚が新寛永であった。また、新寛永のうち1枚は背面に「文」の文字が刻まれた文銭である。文銭は1668(寛文8)年から発行されたものである(註6)。

また、「通」の文字のうち、「マ」と「コ」でも分類することが出来るが、1点のみ「マ」を確認することができる。

(2) 保存処理について

出土した銭貨は12枚で、判読できる銭貨もあるものの全体的に表面に錆がついていたため、令和5年6月27日に長崎県埋蔵文化財センターにて、透過X線撮影、錆取りとクリーニングを行った。また今後の保存のためにパラロイドB72(10%)を塗布し表面に透明のコーティングを行った。

(3) 計測結果(表3)

埋蔵文化財センターにて電子計りで大きさと重さを計測した。(表3参考)

また古寛永と新寛永の外径、内径、輪・縁、孔、孔郭、輪側、厚さ、重量のそれぞれの平均の大きさを比較したところ、古寛永は新寛永よりも外径、内径、輪・縁が大きく、孔は小さめ、厚さは新寛永よりも薄かった。重さは古寛永の平均は2.892g、新寛永の平均は2.64gで新寛永の方が軽かった。(福井)

3 圏線を持つ土師器の長崎県内の類例

(1) 沖城跡出土の土師器(写真8)

沖城跡は戦国時代の武士である西郷氏が築城した伝承がある、本明川河口、有明海に面したその名のとおり、河口の外側(沖)の低湿地にあった城である。発掘調査は平成7年に長崎県教育委員会が行い、16世紀後半から

17世紀初頭までの陶磁器類や石組遺構が発見されている。(註4)また、平成9年～10年に市道改良事業に先立ち、諫早市教育委員会により調査された。(註5)

本稿で扱う土師器は、後者の諫早市教育委員会による調査時の出土資料である。土師器の出土数量は、796点でその特徴的なものを大きさによってⅠ～Ⅲの3群、調整手法によってa～dの2～3類に分類され、その中でも圏線を持つⅢ群d類を紹介する。

底部から内湾気味に体部をつくり、内径する口縁部をもつ。口縁端部は上方へ断面三角となるように摘み上げられる。内面下部の見込みに立ち上がりになった部分で、圏線が一条引かれる。成形と調整手法は、Ⅲ-c類と似通っており、底部の切り離しはヘラによる一方向からの切り離しで、底部は明瞭に平坦面をつくる。内面及び底面には黒斑が広く見られる。法量は口縁部直径12.8cm、器高さ2.6cm、底部直径7.8cmと口縁部直径12.6cm、器高さ3.0cm、底部直径7.0cmとの2点である。出土遺物の年代観が報告書では下記のように示されている。

陶器は胎土目、青海波タタキ、鉄絵、貝目などから大橋編年Ⅰ期(1580～1610)、磁器は輸入品、国産磁器焼成(1610年前後)以前で、皿C群(碁筒底)が欠如していることが特徴である。圏線を持つ土師器坏についての年代は17世紀初頭から前半代となろう。(野澤)

(2) 森岳城跡出土の土師器(註6)

県立島原高等学校体育館建設に伴う森岳城跡三ノ丸内での発掘調査によって検出された土坑(SK01)から出土した圏線を持つ土師器坏4点である。検出された土坑は平面形態や底面の高さの違いから、2つの土坑が折り重なっているものである。

SK01は石組遺構のちょうど中心で検出されており、石組遺構の建造に際して地山を削りこんだ後に、石積みなどを行うか完成後に地鎮祭祀がなされた際のもものと想定できる。この石組遺構は穴蔵と評価され、報告書では先行研究から17世紀代後半以降の年代を想定している。17世紀代後半以降の大きな動きは、1668(寛文8)年の高力氏から松平氏への城主変更である。

圏線を持つ土師器坏は4点あり、ほぼ完全な形にまで接合した資料である。4点とも極めて薄いつくりで製作技法が共通する。内外面とも口縁部から体部にかけて白っぽい肌色で、見込みと底部外面は焼成時に生じた黒斑に覆われる部分がある。胎土は非常に精緻であるが、少量の石英・長石・雲母が混じる。焼成は良好で堅く焼かれて、叩くと乾いた音がする。底部は丸くなっており、底部の平坦面があいまいである。

この坏も地鎮目的で埋納されており、石組遺構の推定年代と同じ17世紀代後半の時期である。(野澤)

おわりに

愛宕社の三重塔から出土した土師器、貨銭の報告と、圏線を有する土師器皿について、1731年の諫早愛宕山三重塔下、17世紀後半の森岳城、17世紀前半代の沖城跡、それぞれの類例を紹介した。

三重塔出土品は口縁部直径が小さいが、その属性の比率を示した数値は表2のとおりである。分布は共通領域を持ち、形式的に近いことが分かる。

沖城跡以外の出土遺跡として、玖島城跡と諫早家御屋敷跡がある。(註8)

玖島城跡は国道34号拡幅工事に際しての発掘調査、諫早家御屋敷跡は県立諫早高等学校附属中学校校舎建設に伴う発掘調査の事例である。諫早家御屋敷跡では造成土であるⅢ層から出土した土師器皿1点である。圏線はないが、ほぼ同じつくりの土師器皿である。灰白色で器壁が薄く丁寧な造りである。胎土に雲母を多く含み、見込みと底部外面は黒斑が付いている。口径は9.2cm、底径5.2cmで、島原城出土品と三重塔出土品との間の大きさである。(写真8)玖島城跡では複数の遺構で、圏線を有する土師器皿が確認されている。

今回、三重塔出土品を報告したことにより、圏線を持つ土師器坏の時代性や多様性があることを指摘すること

ができた。またその性格は、まじなひ＝地鎮であることが色濃くなったと思う。

今後、三重塔下出土品に関する出土状態の聞き取りなどを行い、より具体的に類例との比較作業を進めていきたい。
(野澤)

参考文献

水野正好 2022『日本のまじなひ』高志書店(東京)

櫻木晋一 2016『考古調査ハンドブック15 貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社(東京)

- 註1 諫早市郷土資料館 2011『諫早市郷土資料館解説シート(歴史編)』諫早市郷土資料館
 註2 愛宕社調査委員会 1985「愛宕社の調査報告」『諫早史談』第17号諫早史談会
 註3 櫻木晋一 2016『考古調査ハンドブック15 貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社(東京)
 註4 高野晋司編 1998長崎県教育委員会『沖城跡』長崎県文化財調査報告書第143集
 註5 川瀬雄一編 2000諫早市教育委員会『沖城跡―市道田井原南北線道路改良工事に伴う発掘調査報告書―』諫早市文化財調査報告書第104集(42～44頁に実測図、52頁に計測表)
 註6 本田秀樹編 2002長崎県教育員会『森岳城跡』長崎県文化財調査報告書第166集
 註7 林隆広編 2011長崎県埋蔵文化財センター『諫早家御屋敷跡』長崎県埋蔵文化財センター第2集
 川口洋平編2002長崎県教育委員会『玖島城跡』長崎県文化財調査報告書第167集 実測図は報告書32頁F i 21の1
 註8 朝尾直弘、宇野俊一、田中琢 1997『新版 日本史辞典』角川学芸出版(東京)

表1 三重塔土師器属性表(単位:cm)

	器種	口縁部径	器高	底径	底/口	器高/口
1	小皿	8.7	1.7	5.8	0.667	0.195
2	小皿	8.7	1.8	6.2	0.713	0.207

表2 3遺跡の土師器の比率比較(単位:cm)

遺跡名	底径/口径	器高/口径	時代性	性格
沖城	0.555~0.609	0.203~0.238	17世紀前半	地鎮か?
森岳城跡	0.493~0.507	0.183~0.213	17世紀後半	地鎮
三重塔	0.667~0.713	0.195~0.207	1731年	地鎮

表3 寛永通宝の測定一覧

No.	銭銘	外径			内径 cm	輪・縁 cm	孔		孔郭 cm	輪側厚さ cm	重量[g] クリーニング後	備考	
		縦[mm]	横[mm]	cm			cm						
1	寛永通寶	2.50	24.90	24.91	2.00	0.20	0.50	× 0.50	0.10	0.15	1.20	2.71	古寛永
2	寛永通寶	2.45	24.50	24.71	1.90	0.25	0.50	× 0.50	0.10	0.13	1.18	2.84	古寛永
3	寛永通寶	2.50	24.64	24.60	2.00	0.25	0.50	× 0.50	0.10	0.15	1.08	2.62	古寛永
4	寛永通寶	2.50	24.65	24.67	2.00	0.25	0.50	× 0.50	0.10	0.15	1.36	3.33	古寛永
5	寛永通寶	2.60	25.64	25.67	2.00	0.25	0.50	× 0.50	0.10	0.17	1.32	2.72	新寛永 背「文」
6	寛永通寶	2.65	26.30	26.35	2.00	0.30	0.50	× 0.50	0.10	0.17	1.25	3.22	新寛永
7	寛永通寶	2.40	23.12	23.05	1.90	0.30	0.50	× 0.50	0.10	0.17	1.22	2.67	新寛永
8	寛永通寶	2.33	23.20	23.22	1.90	0.25	0.60	× 0.60	0.10	0.17	1.27	2.24	新寛永
9	寛永通寶	2.30	23.84	23.84	1.90	0.20	0.60	× 0.50	0.05	0.17	1.30	2.42	新寛永
10	寛永通寶	2.40	23.60	23.68	1.90	0.30	0.50	× 0.50	0.10	0.16	1.10	2.97	古寛永
11	寛永通寶	2.50	24.62	24.50	2.00	0.20	0.50	× 0.60	0.10	0.16	1.21	2.90	新寛永
12	寛永通寶	2.30	22.96	22.93	1.90	0.20	0.60	× 0.60	0.10	0.11	1.07	2.33	新寛永



第1図 土師器(上1下2)1/2

※写真1~8は研究紀要P98、P99に掲載

諫早との関わりからみる韓国

諫早市経済交流部文化振興課専門員 福井 遙 香

はじめに

アジア大陸の東端に位置する韓国は、地理的に日本から一番近い国として日本との文化的な共通点も多く、古代から日本と交流をしてきた。諫早市の遺跡から出土した土器や石器からは朝鮮半島から出土したものと類似しているものがあり、世界的に見ても朝鮮に特に集中している支石墓が破籠井町(風観岳支石墓群)にあり、高城跡では朝鮮瓦が採集されるなど、諫早市でもその交流の痕跡を見つけることが出来る。

現代においても、本格的な韓流ブームの火つけ役となった2004年「冬のソナタ」、「ヨン様」ブームから約20年が経ち、ドラマ、俳優やアイドル歌手が中心だった以前の韓流に比べ、ここ数年は韓国料理、ファッション、ライフスタイル、若者言葉、韓国文学、ウェブ漫画など、ジャンルを問わず韓国や韓国らしさを取り入れる動きが流行っている。日常において身近な存在として若い世代を中心に受け入れられ常に進化し続け、今ではブームではなく日常になったのだ。

しかし、かねてから「近くて遠い国」と表現される両国の関係は、このような文化交流を中心に少しずつ変化しているものの、解決しなければならない日韓の歴史問題は依然として存在している。おそらく多くの日本人は韓国人について、愛国心の強さや、過去の歴史の意識、国民の政治参加への積極性などについて、日本人の感覚とは違うものを持っていると感じると考える。

このような双方間の歴史認識や感覚の違いを理解するためには、古代から続く日韓交流の中で、歴史的な感情の原因となった特に大きな出来事である、文禄・慶長の役と日本植民地時代に着目することが不可欠だろう。

本稿では諫早とも関連性があるこの2つの出来事を韓国の歴史背景、現在の認識などを合わせて紹介する。

1 韓国での文禄・慶長の役と諫早家晴

(1) 文禄・慶長の役の影響

日韓の歴史の中で一番大きな戦争である1592年の文禄の役、1597年の慶長の役は、長期に及ぶ戦により多くの命が失われただけでなく両国の文化・社会構造にまで大きな影響を与えた。日本には朝鮮の人が2~3万人が捕虜として連れてこられ(注1)、江戸時代に交流が再開された朝鮮通信使の最初の任務の一つに捕虜人を朝鮮に連れ帰ることがあったほどだった。捕虜人の中には知識や技術を持った職人もおり、日本に有田焼などの新しい陶磁

器の技術を伝えた。

朝鮮においては、朝鮮王朝の正宮である景福宮を含む2つの宮殿が焼失、人口は少なくとも100万人以上減少し、耕作地の3分の2以上が荒廃するなど大きな被害を受け、多くの文化財も日本に流出したり焼失した。また、土地台帳と戸籍のほとんどが焼失、国家財政が悪化し、国家運営がままならなくなった。その後17～18世紀には不足する税収入を確保するため空名帖の発行が増え(注2)、朝鮮の根幹であった身分制度が動揺する大混乱に陥った。これは朝鮮後期における国力の弱化をもたらし、西洋の先進文物の導入を妨げる要素となり、20世紀の日本植民地時代を招いた根本的な原因となったほどだった。

文禄・慶長の役当時、戦争に対する備えが足りなかった朝鮮軍は連日惨敗し、釜山に上陸した日本軍は約20日の間に首都漢陽に進入し、数ヶ月で朝鮮半島全体の大部分を占領するほど朝鮮は消滅直前まで至った。日本軍が非常に速い速度で北上すると、王の宣祖は首都漢陽の景福宮を捨てて明に向かって北に避難したが、これは朝鮮の民衆に国家が民を捨てたという大きな裏切り感と衝撃を与えた。このような挫折と混乱の中で正式な軍人ではなかった義兵と僧侶、民衆が最後まで抵抗して持ちこたえていたが、唯一、勝戦報を伝えたのが李舜臣(1545-1598)将軍の活躍であった。

当時、全羅道地域の水軍節度使だった李舜臣は海戦で圧倒的な連勝を取め、日本軍の追加兵力の上陸と補給を遅延させた。これによって陸地の日本軍はこれ以上前進出来ず、南に後退しなければならなかった。その後、遅れていた中国明の支援を受けた朝鮮軍の反撃や豊臣秀吉の死をきっかけに日本軍が帰国し終戦を迎えたが、その後遺症は非常に大きかった。

さらに、この戦争に無理な支援をした明も国力が低下し、その後の後金の誕生へつながるなど、東アジア全体の歴史に影響を及ぼした。韓国では約500年間の朝鮮時代をこの文禄・慶長の役を基準に前期と後期に分けて区分するほど、朝鮮社会に大きな衝撃を与えた出来事だった。

(2) 韓国での認識(写真1)

この戦争の終結から425年経った現在でも、韓国人に好きな歴史上の人物を尋ねると必ず上位を占めるのが李舜臣で、その地位はソウルの中心地である景福宮前の光化門広場に建てられている大きな銅像だけでも見て取れる。亀甲船を開発し朝鮮水軍を率いた李舜臣は、不利な状況の中でも連勝と無敗を記録し、12隻の艦船で300隻余りの日本艦船を沈没させるなど大きな成果を上げた。当時、王の先祖と官僚たちの無能と謀略で職責剥奪や投獄までされ苦難の内にあつたにもかかわらず、朝鮮自体が消滅する危機を救ったとして、韓国では「忠武公」という号とともに李舜臣を国家の英雄と崇めている。現在、韓国には光化門広場以外にも日本を眺める釜山の龍頭山公園など韓国のあちこちに李舜臣の銅像が立っているほど、李舜臣は民族の精神や国家守護の象徴とも考えられている。

このように韓国の立場では朝鮮半島全体の歴史が終わりそうになった重要な出来事であるため、歴史教育の時間にも非常に比重を置いている。そのためか文禄・慶長の役を扱った歴史ドラマや映画が多く制作され、李舜臣の生涯を描いたドラマ『不滅の李舜臣』(2004-2005)は、最高視聴率が30%を超える大ヒットを記録し(注3)、李舜臣の戦闘をモチーフにした映画『バトルオーシャン海上決戦』(2014)は韓国映画史上観客動員数1位である1760万人を記録(注4)するほど韓国人から愛されている。その他にも韓国海軍初の大型軍艦の名前や100ウォン玉貨幣の人物としても選ばれるほど、国を救った英雄として認められている。

(3) 韓国の史料『海東釋史』に登場する諫早家晴

この戦いに関する韓国の史料に、江戸時代に諫早を治めた諫早家の初代・諫早家晴（龍造寺家晴）の名前が登場するので紹介する。朝鮮時代の実学者・韓致齋（1765-1814）と韓致齋の死後、甥の韓進書が後を継いで完成させた『海東釋史』は、檀君朝鮮時代からその後の朝鮮半島の歴史をまとめた全85巻の韓国通史である。この書物は大きく3つの部分で構成されており、韓国史を体系的に整理した「世紀」、庶民生活、商業や国防、韓日中の文化交流に関わることなどを整理している「志」、考は「世紀」や「志」に入らなかった地理や人物、戦乱史などをまとめている。諫早家晴に関する記述は「考」の「本朝備禦考」の中の「於倭始末」に書かれており、朝鮮初期から壬辰倭乱に至るまでの対日抗争史資料を集めたもので「本朝備禦考」の全6巻中5巻と、圧倒的に多い比重を占めている。内容は以下の通りである。

【解説】史料1『海東釋史』「本朝備禦考」於倭始末 21項12行目～22項2行目

10月に鍋島直茂が永岡山（咸興）周辺に駐屯した。その当時、梅天、梅白兄弟が軍事を起こしたが、鍋島直茂が討伐して1500首を斬獲した。また、兀平山（オルピョンサン）（咸興から北に80里になるところにある）に観察使がいながら数万人の軍事を起こしたが、鍋島直茂が3000人余りの騎兵を従えて討伐し1300首余りを斬首した後、耳を全て切って日本に送った。これより前に吉州の城にいた加藤清正の軍が数万名の軍に包囲されてかなり窮迫な状況で、鍋島直茂に事情を話した。これに鍋島直茂が救援兵600名を送り防護し、その苦戦な状況が良く分かる。吉州は兀良哈あるいは韃靼との境界地域で王城からの距離は30日程かかる場所だった。加藤清正が再び吉州に行き、鍋島直茂の軍下の諫早家晴と成富茂安を自分に従わせ、大きく戦い3000首を斬獲した後、咸興に戻った。鍋島直茂が獲得した8つの城は徳原城、文川城、高原城、永興城、定平城、洪原城、金山城、咸興城だ。『和漢三才図会』

日本の記録によれば、文禄元（1592）年4月、諫早家晴は喜々津を出発し、名護屋城へ寄り、加藤清正率いる第二軍の鍋島直茂に従い朝鮮に上陸した。首都漢城に到着したころには、すでに朝鮮王は平壤に避難しており、その後は咸鏡道地域を担当することになる。この『海東釋史』の記述は同年10月の出来事である。7年間の出兵を終えた諫早家晴は喜々津へ無事帰還した。諫早市の県指定有形文化財「大雄寺の十一面観世音菩薩坐像」は、諫早家晴が文禄・慶長の役に際し、拝具したものであるという言われが伝わっている（注5）。

『海東釋史』が書かれた時代は朝鮮第23代の王・純祖の時代で朝鮮後期にあたる。朝鮮は儒教を基本理念とした国だが、後期になると経済や社会の発展とともに貧富や身分の格差が広がり、政治においても派閥争いや権力の独占が横行すると知識人たちは儒教の限界を感じ始めた。それに代わり新しく生まれた学問が実学で、社会問題を是正するための現実的な視点で農業や商業の改革を説き始めた。歴史の研究においても自主的な研究がすすめられ、多くの歴史書物が編纂された。

『海東釋史』の著者・韓致齋は、従来の韓国史書の内容が貧弱で証明できないことが多い部分を克服するために、より客観的で出典が明らかな韓国史書を編纂したいとの思いから、550種余りの外国資料を参考にして編纂した。このうち中国記録が523種で日本記録が22種（注6）と中国記録が圧倒的に多い。しかし日本についての記録も中国の参考数には劣るが、『日本書紀』をはじめとする日本の資料には韓国の歴史に関する記事が多く、それを参考

にして韓国の歴史を補完するような試みをした人はいなかったとされる。特に『日本書紀』を引用して神功皇后が新羅を征伐したという内容にも言及しているが、これまでの書物にはこの部分を引用したことはなかったとされる(注7)。

このように多くの記録を参考にして編纂したものの、単純に他の記録をかき集めて羅列したわけではなく、外国資料と国内資料を比較・参考にし、誤りがあれば正すなど緻密に考証し、考証史学の土台を作ったという点、また民族の歴史認識の幅を広げた点などで、韓国では朝鮮後期の実学者の三大史書と称され非常に高く評価されている。諫早家晴が『海東繹史』に登場するのは1ヶ所だけだが、韓国内でも特に重要とされている史料に諫早家晴の名前が登場することは注目に値すると考える。

2 韓国の独立運動家・白貞基^{ベクジョンギ}

(1) 朝鮮の植民地過程

19世紀末、西洋列強が次々とアジアに進出しはじめた頃、日本では明治維新が、中国でも洋務運動が起こり、朝鮮でも大変革を準備しなければならなかったが、朝廷内部の党派争いと不正汚職問題が蔓延し、全国各地では民乱が続発していた。内憂外患の状態だった朝鮮は、開港をしないという国粹主義的選択で、限りなく時代遅れに陥ることとなった。この選択は結局、自発的開港ではなく外国の強圧による開港と侵略を招き、アメリカ、ロシア、イギリス、フランス、ドイツ、日本まで、すべて朝鮮半島を狙う状況を迎えることになった。

外国勢力の侵略争奪戦となった朝鮮は結局、日露戦争で勝利した日本によって1910年8月29日の「韓国併合二関スル条約」で、日本による本格的な統治が始まり、終戦を迎える1945年8月15日までの35年間、韓国史上最悪の時期を過ごすことになる。韓国ではこの時期を「日帝強占期」、「日帝時期」などと呼んでいる。

(2) 朝鮮の独立運動

日本による統治が始まって以降、韓国では1919年3月1日の独立運動を契機に大規模な独立運動が展開されたが、非暴力を原則とした万歳運動に限界を感じた独立運動家たちは、以後本格的な武装闘争を始めた。日本に抵抗するための市民団体や秘密結社、独立軍などの組織が多く生まれ、韓国人の独立運動は体系化し始めたが、これを妨害しようとする日本の弾圧と監視が激しくなり、国内活動が難しくなると中国に大韓民国臨時政府を設立し拠点を移した。彼らは主に日本の要人に対する暗殺とテロに続き、正式軍隊である独立軍を作り、日本軍と大規模な交戦を繰り返した。

現代の韓国人は日本に抵抗したこの時期と人物を題材にした多くのドラマや映画を通じて独立精神を称えている。また、独立運動の本格的な出発点である3月1日を「三一節」、日本の終戦記念日である8月15日は国家が解放された「光復節^{クワンボクチョル}」と呼び、両日とも主要祝日として記念している。

(3) 独立運動家・白貞基と諫早

この時期の韓国の独立運動家のうち、諫早と関連した人物が長崎刑務所で亡くなった白貞基(1896-1934)である。長崎刑務所は諫早市原口町にあり、明治政府により1908年に日本で初めての西洋式監獄として建てられ、五大監獄(千葉・奈良・金沢・鹿児島・長崎)と呼ばれた。戦後も刑務所として使用されてきたが、老朽化により1992年に小川町に新しい刑務所が建てられ、2006年に取り壊され、現在は門のみ残っている。(注8)

白貞基は1896年全羅北道扶安生まれで、1919年の3.1独立運動を契機に抗日独立運動を先導することになる。1933年3月17日、日本の軍事施設を破壊するなど様々な抗日運動を展開し、在中華民国日本公使有吉明が日本の政客、参謀部員および中国の親日政客、大日本帝国陸軍所属軍人など100人余りが食堂で集まるという知らせを聞いて暗殺と爆弾テロを謀議して逮捕され長崎刑務所に収監された。1933年11月24日、長崎地方裁判所で逮捕され、いわゆる殺人予備および治安維持法違反、爆発物取体罰則違反などの疑いで無期懲役を言い渡された。その後、長崎刑務所で獄中に持病の肺結核が悪化し、1934年6月5日に亡くなった。終戦後、1963年、韓国で建国勲章独立章が追叙された。

白貞基は、韓国では「三義士」と呼ばれる有名独立運動家の1人だ。ただ、他の三義士に比べて認知度が低く、後述する残りの2人の義士のうち李鳳昌(1901-1932)、尹奉吉(1908-1932)は韓国の歴史を勉強すれば必ず登場する有名な人物だが、白貞基に関してはよく知らない韓国人もいるほどだ。これは、白貞基が無政府主義(アナキズム)を理念としたため、当時の韓国政府の良い評価を受けられなかったという理由が挙げられる。しかし、それよりは数回のテロや武装闘争の成果が他の有名独立運動家に比べて相対的になかったためと見られる。アナキズム運動は、日本植民地時代、植民地下という特殊な状況の中で、1920年初頭から知識人や青年層を中心に広範囲に影響を与え、独立闘争でも朝鮮国内や日本、中国など、植民地から解放されるまでその役割を過小評価できない程の足跡を残している。白貞基も1920年初めから数回の拘禁と投獄されながら献身的な独立運動をしたにもかかわらず、後世で業績によって認知度が比較される部分は残念な点といえる。

(4)ソウル孝昌公園に祀られている「三義士」(写真2、3)

韓国では、日本統治時代に自分の命を惜しまずに犠牲になった独立運動家を呼ぶ際に尊敬の念を込めて「義士」、「烈士」、「志士」という呼称を付けて呼ぶ。義士は命を捧げて武力的な行動で敵に対する大事を執行した人、烈士は命を捧げて素手で敵と戦った人、志士は国と民族のために献身して敵に抵抗した人を指す(注9)。現在まで韓国政府の国家報勲部が公式に叙勲した独立有功者の数は17,848名に達するほどだ。(注10)

このうち有名な烈士と義士は、功績と意思を後世に残すために銅像が建てられたり記念館などが設立されているが、その中で代表的な場所がソウル特別市龍山区孝昌公園内にある「三義士の墓」だ。

孝昌公園内は、朝鮮王朝22代貞陵などがあり史跡地に指定されている市立公園で、三義士の墓の隣には大韓民国臨時政府という組織を設立し祖国独立のために尽力した独立運動家の金九(1876-1949)を記念する白凡金九記念館があり、公園一帯全体が韓国人には歴史的意味を持っている。1946年7月6日、当時の大統領の李承晩や金九をはじめ、弔問客5万人あまりが哀悼する中、三義士の国民葬が執り行われた。金九が主導した三義士の墓の設置について、3人の中に白貞基が含まれていることは当時でも意外な反応だったそうだ。李鳳昌、尹奉吉は金九が組織した韓人愛国団として共に活動していたこともあり理解が出来るが、白貞基との交流はあまり明らかにされていない。特に白貞基は自分の記録を残さないことで知られているが、長崎刑務所で共に服役していた李康勲に祖国が独立したら自分の遺骸を祖国の土地に埋めてほしいと頼んだことが遺言として伝わっている。李康勲が出獄後、金九へそれを伝え実行したとされるが、白貞基を知る人々が残した多くの記録からは同志、同僚、先輩たちから尊敬される人物であり、金九がそれを尊重し、三義士に入れたと考えられる(注11)。

1932年に大日本帝国東京警視庁前で昭和天皇に爆弾を投げた李奉昌と、1932年に中国上海市で日本の要人に爆弾を投げ数十人の死傷者を出した尹奉吉まで象徴的で有名な人々と比較されるため相対的認知度が低いだ

けで、白貞基も彼らとともに三義士として葬られ、白貞基義士記念館(注12)があるほど、韓国の独立運動史の歴史において非常に重要な人物であることは言うまでもない。

また、三義士の墓所には現在、三義士の3人と韓国で最も有名な独立運動家の安重根の墓の4つの墓が並んでいる。安重根は1909年に中国ハルビン駅で当時朝鮮総督府の代表で首相内閣大臣だった伊藤博文を暗殺し、韓国では独立運動の象徴とされる人物で、その印象的な業績のために有名ということもあるが、彼の行動や語録、母親の発言などがより印象的で韓国人の脳裏に最も深く刻み込まれている。しかし中国の旅順監獄で死刑になった後、彼の遺体は山に遺棄され、未だに遺骨を見つけることができず、韓国政府は遺骨を探すために現在も中国の旅順監獄地域で発掘作業を続けている。そのため、墓は仮墓の状態である。

このように韓国で独立運動家たちに礼遇を与え、彼らを積極的に学び記憶する理由は、殉国烈士と愛国志士たちの献身と犠牲に感謝し記憶することも重要だが、その犠牲の歴史を再び繰り返さないことがより重要だと考えているからだ。

おわりに

韓国という国を理解する上で、文禄・慶長の役、日本植民地時代を諫早との関わりという視点から紹介した。日本に対する歴史的感情は単純に日本植民地時代だけの話ではない。2度の国家的危機を経験した韓国人の立場では、子孫のために歴史を持続的に強調し記憶しなければならない傷であり使命ではないだろうか。過去の経験とそれを繰り返さないという国民意識が、現代においても団結し、1980年代の民主化運動や2016年の朴槿恵大統領弾劾などの政治意識にも繋がっている。こういった団結力や愛国心は今後の韓国社会の発展においても土台として存在し続けるだろう。未だ双方の納得がいく解決が出来ていない歴史問題も多い中、両国を訪問する観光客の数は増え続け、交流はより一層深まることが予想される。本稿が韓国の歴史認識の共有、相互理解そして未来志向的な日韓交流の一助になればよいと考える。

注

- (1) 長崎県教育委員会 2003年『長崎県と朝鮮半島』長崎県教育委員会
- (2) 空名帖は名前部分が空欄になった任命状で、一種の売官売職。
- (3) NHK「日本と朝鮮半島2000年」プロジェクト 2010年『日本と朝鮮半島2000年下』NHK出版106項
- (4) 2023年現在基準
- (5) 諫早市美術・歴史館 開館記念特別企画展2014年『諫早家ゆかりの品々展』諫早市美術・歴史館
- (6) 우리역사네 http://contents.history.go.kr/mobile/kc/view.do?levelId=kc_r300860
- (7) 한국민족문화대백과사전 <https://encykorea.aks.ac.kr/Article/E0062540>
- (8) 井口次男2009年『旧長崎刑務所 井口次夫写真集』井口次男
- (9) 西大門刑務所歴史館2010年『独立と民主の現場 西大門刑務所歴史館』西大門区都市管理公団
- (10) 2023年8月現在の人数 (業績に関する根拠資料が残っている場合のみ)
공훈전사자료 <https://egonghun.mpva.go.kr/user/IndepMeritsRewardStat.do?goTocode=10001>
- (11) 社団法人国民文化研究所2014年『韓国独立運動家 鷗波白貞基—あるアナーキストの生涯』明石書店
- (12) 全羅北道 井邑市に位置する

参考文献

- ・クオン・ヨンソク2010年『「韓流」と「日流」文化から読み解く日韓新時代』NHK出版
- ・水野俊平2007年『韓国の歴史』川出書房新社
- ・歴史教育研究会(日本)歴史教科書研究会(韓国)2007年『日韓歴史共通教材 日韓交流の歴史』明石出版
- ・김행선 2007年『한국근현대사 강의』

嚮藤次

向咸鏡道。鍋島直茂相繼之。清正直茂多經難艱。行討敵。至開城府。六月十八日到安邊府。於是兩將分二路。清正向元良哈。○其稱日本傳。世祖。字項元。元良哈。捕獲之。清正收為柳尊。改名後。贈正。即直茂。自咸鏡道行吉州。先屠安平城。斬首六百餘。畧北丹。○當升字。當作青。洪原而陣安平府。安即定。平之諱。以鍋島五郎茂里置于洪原城。清正到元良哈。俘兩王子后妃及大臣。將故于安邊。於是元良哈入漢南人追之。且吉州之大勢相加。而清正殆危。故乞援兵於直茂。乃使咸富持永二士杖之。無恙到咸興。謁直茂謝援兵之禮。

海東釋史

此時咸富茂安之勇名。聞于異國。既而清正直茂討平咸鏡道二十二郡。于時十月也。鍋島直茂陣于永岡山。在咸興。道。於是有梅天梅白兄弟起兵。直茂討之。獲首千五百級。又元平山。在咸興。道。北八十里。有觀察使。起數萬兵。直茂以三千餘騎討之。斬首千三百餘。悉職耳。送于日本。先是所罷于吉州。清正之士卒見圍。數萬兵甚窮難。告由於直茂。乃遣援兵六百人防之。其苦戰可察之。吉州者元良哈及韃靼之界。去王城三十日路。自直茂之神咸興。六日路。清正復適吉州。直茂之士諫早家晴成富茂安。令相送之。大力戰。獲首三

21

해동역사 61권 본조비어고(本朝備考) 1

千級。故咸興。直茂所獲八城者。德源城。文川。城。高原。城。永興。城。定平。城。洪原。城。金山。城。咸興。城。和漢三才圖會。松下見林曰。僧清韓撰清正挽詞云。王子元弟。長曰臨海。次曰順和。出走會寧。因茲清正。追到永安。圍會寧城。城中數萬兵甲。擁衛王子。堅守城壘。夫石交下。火箭屢飛。清正宵中。何為芥滯。城中一人。單刀直入。王子就擒。城中兵甲。舍竄。已為烏有。護軍節度后妃媵妾。共護送京城。後出釜山。懲錄云。會寧吏鞠景仁。縛兩王子。迎清正。與挽詞異。或曰。清正囚二王子于元良哈者非也。元良哈。女真之地。挽詞以清

海東釋史

正擒王子而後。及七日程。直入女真。拔城振威。異傳。日本。

六月甲戌。總督塞達。遣副總兵祖承訓。帥師三千人。往援時朝鮮。王避亂將入遼。郝杰請擇境外善地處之。且用給其送官衛士。報可。七月兵部議。令駐劄險要。以待天兵。拜召通國勤王。以圖恢復。而是時倭已入王京。毀墳墓。幽王子陪臣。剽府庫。八道幾盡沒。朝暮且渡鴨綠江。請援之使。絡繹於道。廷議以朝鮮為國藩籬。在所必爭。遣行人薛藩。諭以興復大義。揚言大兵十萬。且至。而倭業抵平壤。朝鮮羣臣益恐。出避慶州。遊擊史儒

22

해동역사 61권 본조비어고(本朝備考) 1

資料I 『海東釋史』

出展:『한국고전종합DB』한국고전번역원

※写真1~3は研究紀要P99に掲載

「愛宕山三重塔の出土品について」(諫早市経済交流部文化振興課主任 野澤哲郎・専門員 福井遥香)

写真1 重なった土師器と銭の配置



写真2 土師器上の皿を起した状態



写真3 左:土師器 | 右:土師器



写真4 左:土師器 | 右:土師器



写真5 透過X線写真

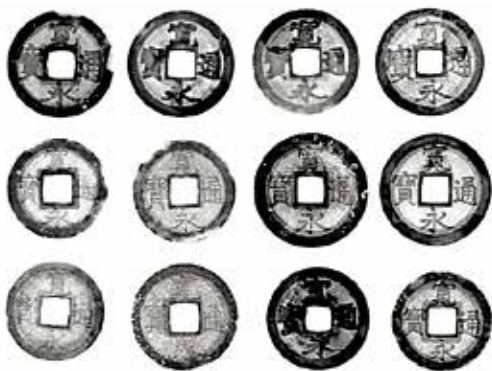


写真6 保存処理後の寛永通宝(裏)

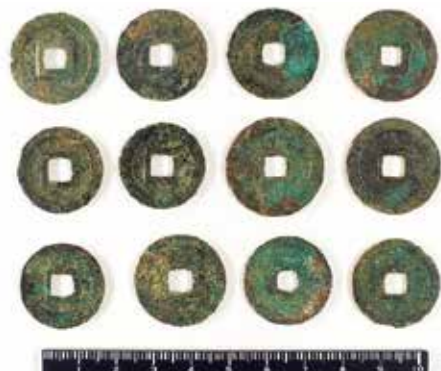


写真6 保存処理後の寛永通宝(表)

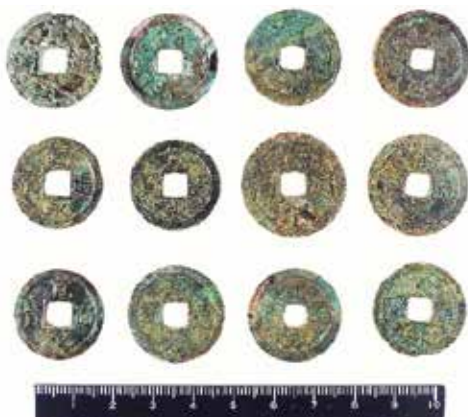


写真7 諫早家御屋敷跡出土の土師器皿



写真8 沖城跡出土の土師器皿



「諫早との関わりからみる韓国」(諫早市経済交流部文化振興課専門員 福井遥香)

写真1 ソウル光化門前の李舜臣銅像



写真2 三義士の墓(2019年撮影)



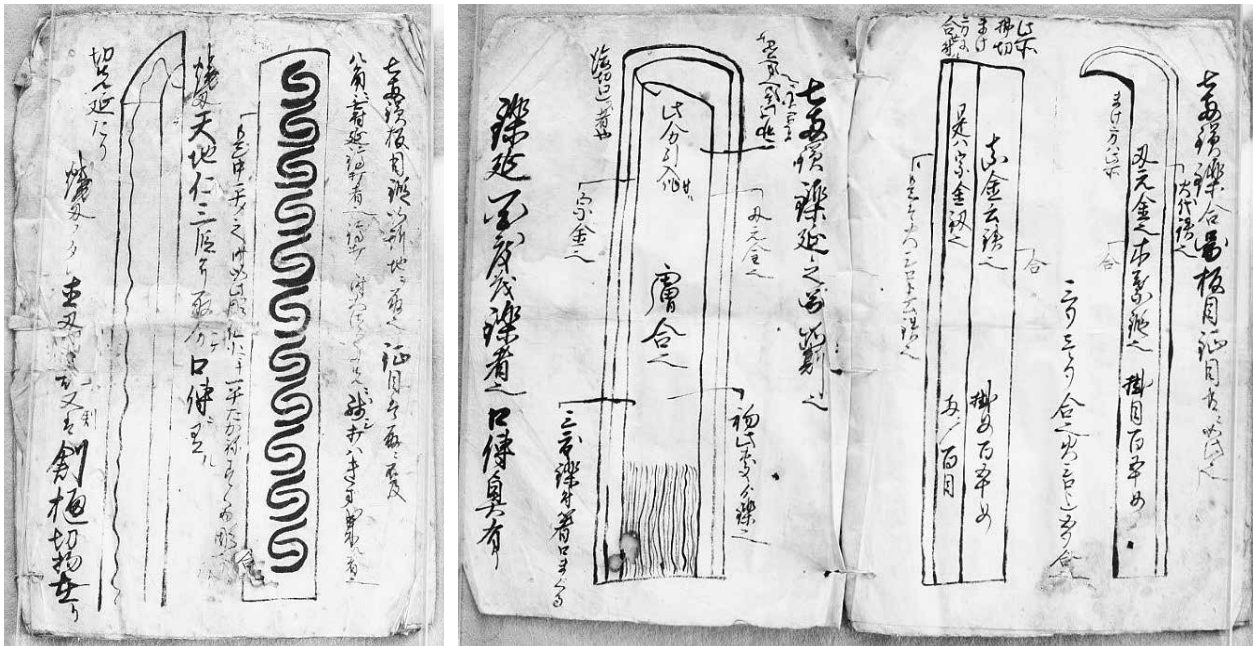
写真3 白貞基の墓(2019年撮影)



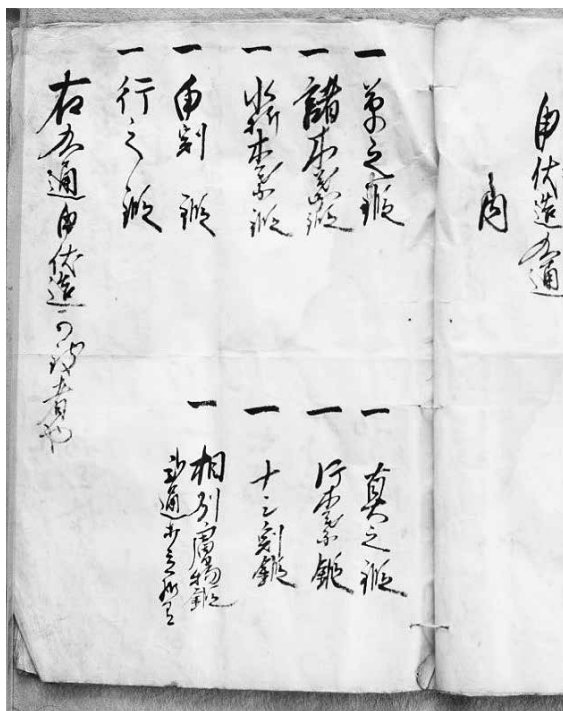
■
おわりに

以上紹介した史料は「境家文書」のごく一部である。今回は紹介できず、割愛した史料には家系図の他、刀を鍛造するに当たつての見積書といった刀鍛冶に関するもの、家職を存続するための借入金を佐賀藩上層部と交渉したものなどがある。これらの史料からは、江戸時代に刀鍛冶を生業とする一つの家の時代ごとの変化を具体的かつ多角的に知ることができる。そのため境家に伝わるこれらの文書群は、佐賀藩諫早領において刀鍛冶という一つの産業の興隆を理解することができる具体的な記録であり、非常に優れた歴史資料の一群と評価できる。

- 一 七兩鍍板目鍛 一 七兩鎖鉦目鍛
- 一 七兩鍍居膚釧 以上拾式通鍛
- 一 七通之打立
- 一 甲伏造^リ 一 三ツ物造^リ
- 一 五重造^リ 一 七兩鎖造^リ
- 一 引折造^リ 一 トモ付造^リ
- 一 フクミ造^リ 以上七通^リ打立
- 一 劔鍛三通之鑱
- 一 草鑱 常之劔鑱なり
- 一 行鑱 あくをかるく遣強ク不鑱かけ
さる様^ナ王か春心なり
- 一 真之鑱 真ふく連上^ル様^ニ王か春心也
以上三通鑱也
- 一 口傳奥^ニ有

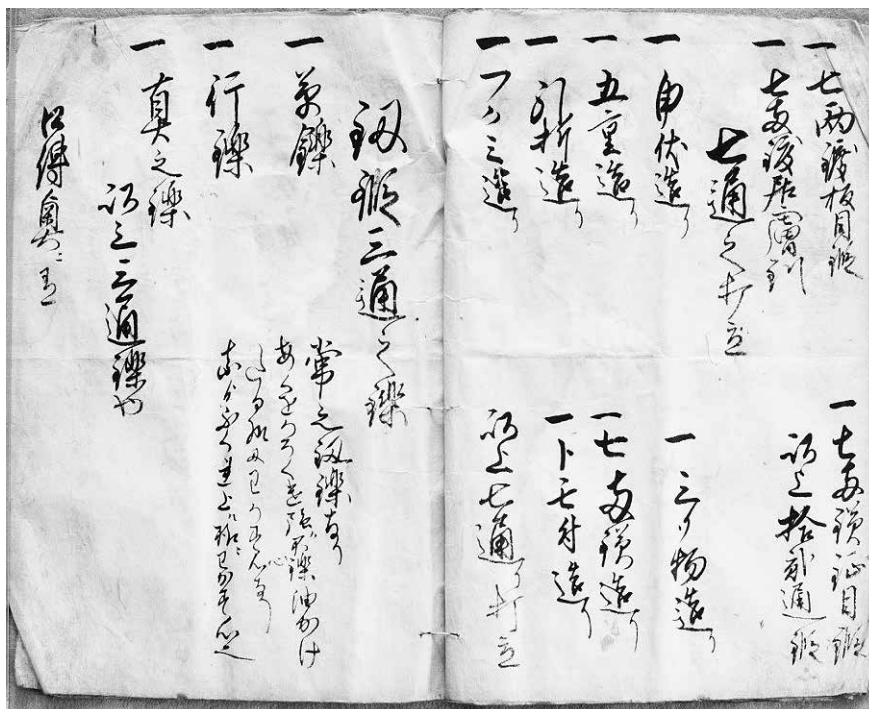


文書④-4 『初心口伝秘書』

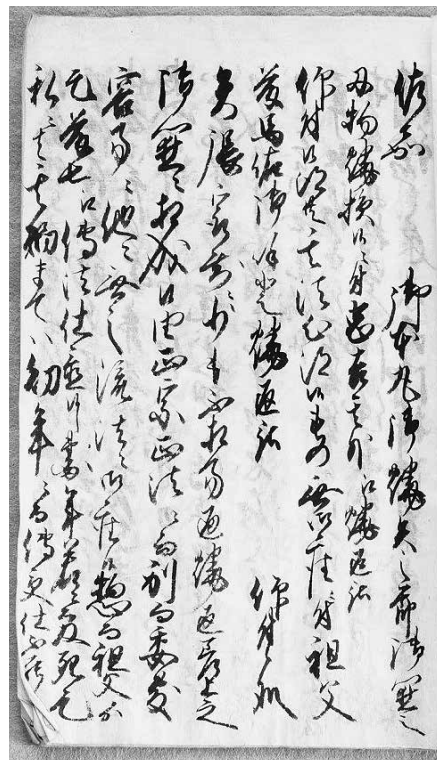


文書④-3 『初心口伝秘書』

- 甲伏造九通
内
- 一 草之鍛
 - 一 諸木葉鍛
 - 一 水折木葉鍛
 - 一 甲割鍛
 - 一 行之鍛
 - 一 真之鍛
 - 一 片木葉鍛
 - 一 ナシ割鍛
 - 一 相州膚物鍛
 - 一 式通打立扣有
- 右九通申伏造可致者也



文書④-3 『初心口伝秘書』

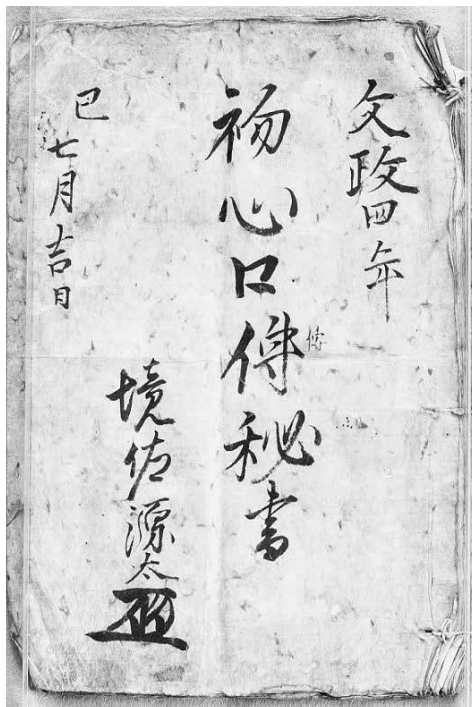


文書③ 六代宗光が諫早家諸役方附役宛てに提出した『演達』

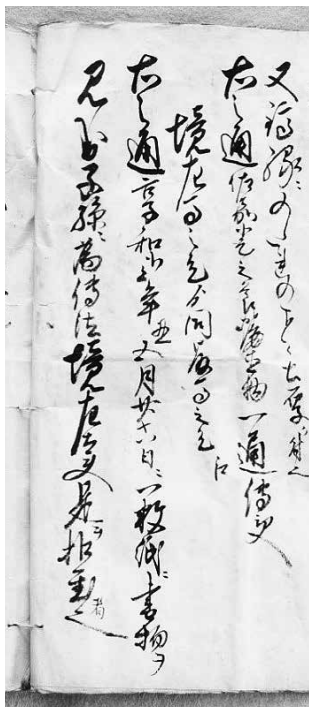
佐嘉 御本丸御焼矢之節御圍之
 刃物焼損候^ニ付忠吉其外^江焼返被
 仰付候得共其法心得候毛の無御座^ニ付祖父
 藤馬佑御呼登焼返被 仰付候処
 矢張取前^ニ少も不相易返焼返差上之
 御圍^ニ相成候由正宗正法^ニ而別而委敷
 容易^ニ他^ニ無之流法^ニ御座候(後略)

三 刀鍛冶の技術や伝承について

境家は家職断絶の危機に直面する江戸中期頃から幕末にかけて、刀鍛冶の技術の伝承に努力している様子が伺える。具体的には、懇切丁寧な作業手順を図解入りで示したり、正宗流鍛法と呼ばれる秘伝の鍛法をまとめるなどしている。(文書④を参照)



文書④-1 『初心口伝秘書』 表紙



文書④-2 『初心口伝秘書』

(前略)境左馬之允今同藤馬之允^江
 右之通享和式年^丑五月廿六日^ニ数紙^ニ書物^ヲ
 見出子孫^ニ為傳法境左太夫是^ヲ拍置者也

二 刀鍛冶の家の経営について

境家は刀鍛冶としての実力は十分に認められていた。佐賀藩や諫早領主の命により刀の注文を依頼されており、(文書②を参照)十二代宗次、十七代宗光(左太夫)、十八代宗次(左源太)の時期の注文状が残っている。また、十五代宗光の代の享保十二年(一七二六)に佐賀城が延焼した際には、刀剣類の焼き直しの命令が佐賀藩より下ることになる。佐賀藩家中で境家と双璧をなす忠吉系の刀鍛冶にも同様の命令が下ったが、槍の焼き直しには失敗したらしく、一方で境家は期待を背負い佐賀に赴き、無事焼き直しに成功したという。(文書③を参照)



文書② 藩主勝茂より初代宗次への刀の注文状

刀之注文

- 一 刀三腰内 貳腰ハ二尺三寸七分
壹腰ハ二尺三寸五分
付成か川かうの木形遣候無相違様^ニ可仕候
尤少も疵無之様^ニ可作事
- 一 三腰な可ら刃 小ミたれたるへし
- 一 同刃さ可ひきハとに見へさる様^ニ焼可申事
- 一 同刀の者た念を入ひ可り有之様^ニ可仕事
- 一 同ミねルゆ者志り無之様^ニ焼可申事
- 一 同銘ハ伊豫掾を除候て肥前國源
宗次と計打可申事
- 右之刀進上之ため^ニ候条性を入
打可申也

六月朔日 信守 黒印

伊豫掾

職として継承していくのは非常に難しかったようで、境家は江戸期頃から幕末にかけて家職断絶の危機に直面していた。これは十六代宗清が安永元年(一七七二)前後に年若にて没したため、十七代宗光(左太夫)への鍛法の伝授が叶わなかったことに起因する。この状況を打開するため、境家は秘伝習得のための資金援助などについて藩中枢への嘆願あるいは要望を積極的に行っている。さらに、技術の伝承に關しては、確実な技術伝承に研鑽努力している様子が伺える。(三を参照)

古文書紹介 、『境家文書』

諫早市経済交流部文化振興課専門員 江口 喬裕

はじめに

中・近世から近代の初め頃にかけて、諫早在住の刀鍛冶の「家」として「境家」があった。その家に残された境家文書群は文書類七十二点、絵図類五点からなる。文書が作成された年代は、慶長十六年（一六二二）から天保九年（一八三八）にかけての原本（あるいは写し）で、時代的にもまとまりのある一群である。境家文書の内容は次の三つに大別される。境家の家系図や由緒を記したものの、刀鍛冶の家の経営に関係するもの、そして刀鍛冶の技術や伝承に関係するものである。次章からはそれぞれの文書の概要、代表的な文書の画像や書き下し文を紹介する。

一 境家の家系について

境家は刀鍛冶として初代の又八郎真高から十九代の繁之助宗次まで、鎌倉後期の正和五年（一二三六）から明治四十三年（一九一〇）までの約六百年間継続してきた家である。二代真正が延慶三年（一二三〇）に代官として肥前国長瀬へ下つて以降、佐賀に居住し、八代宗吉の代の永正八年（二五二二）に家督を相続した後は龍造寺剛忠（龍造寺隆信の曾祖父）の家中となった。

佐賀藩主とのつながりは、天正十二年（一五八四）に龍造寺隆信が島原において敗死した後に、十代正次が鍋島直茂に取り立てられることから始まる。慶長



文書① 佐賀初代藩主勝茂が初代宗次に与えた知行状

十六年（一六二二）には、十二代の境三右衛門宗次が佐賀城下に知行十四石を拝領する。（文書①を参照）刀の鍛造を命じられる（二を参照）など、佐賀藩主からの信任は厚く、良好な主従関係にあったが、十三代の時に浪人となっている。十四代が元禄六年（一六九三）に諫早家七代茂晴に召し抱えられてからは代々諫早家に仕え、享保三年（一七二八）には諫早の宇都へ、寛延三年（一七五〇）の諫早騒動の時期までには小江に移住していたとみられる。そして元治元年（一八六四）頃、十九代繁之助宗次が境家の新たな屋敷を領主から拝領した後、維新後の廃刀令などの影響もあり、刀鍛冶廃業の止むなきに至る。

肥前國佐嘉郡来迎寺村

之内拾四石地之事宛行畢

坪付在別紙 者早任先例之旨可領

知之状如件

慶長十六年正月十一日 勝茂 花押

境三右衛門 ■■■ (このへカ)

- (3) 長崎市長崎学研究所『紀要長崎学 第五号』二〇二二年
 『日記』嘉永七年閏七月二十六日条(史料番号 10939)
- (4) 『日記』天保一四年正月二十五日条(史料番号 10833)
- (5) 『日記』天保一四年五月四日条(史料番号 10835)
- (6) 『日記』天保一二年二月二日条(史料番号 10808)
- (7) 『日記』天保六年九月二七日条(史料番号 10775)
- (8) 『日記』天保一五年四月二〇日条(史料番号 10842)
- (9) 佐賀県立図書館データベース(<https://www.sagalibdb.jp/komonjo/detail/?id=60220>)。最終確認日(令和五年二月二四日)。
- (10) 『日記』天保九年六月二九日条(史料番号10794)
- (11) 『日記』寛政一二年六月二二日条(史料番号 10575)、『日記』嘉永二年二月三日条(史料番号 10895)
- (12) 『日記』嘉永二年九月二三日条(史料番号 10891)
- (13) 『御切手控』(史料番号 10911)
- (14) 『日記』弘化四年七月二九日条(史料番号 10868)

れようとしたのではないだろうか。そして、諫早家自体も前述したように情報集に勤めており、嘉村の勧めに応じたのではないだろうか。

■ おわりに

諫早家における蘭軍学導入の過程において、佐賀藩副役嘉村源左衛門の存在は大きかった。しかし、嘉村も長崎副役を勤め続けることはなく、天保一五年に長崎副役から離任する。諫早家は蘭軍学を取り入れるにあたっての支援者を失う形になった。しかし、嘉村が不在により諫早家においての蘭軍学稽古が無くなったわけではない。『日記』を読み進めていくと、高島秋帆の息子である高島浅五郎の下での西洋砲術稽古の記録が確認できる。少なくとも嘉永二年（二八四九）には野副大之允、松尾喜助、橋澤環の三名が極意を相伝され⁽¹³⁾、嘉永五年（二八五二）には寺田八助とその従者が稽古の許可を得ている⁽¹⁴⁾。

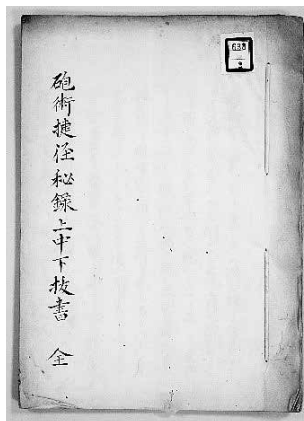
- 一 野副大之允、松尾喜助、橋澤環、嶋話中西洋流砲術執心、師範家長崎高嶋浅五郎^江入門致稽古候処、熟達之訳を以極意相伝相成候由達出、右^著他邦^二相懸候儀^三付、無何^与可被差置様無之^三付、御挨拶相成方^二有之^三間敷哉、爰元吟味之次第、右之通何越候処、何通被 仰付之旨端書を以申来候事

また、弘化四年（二八四七）七月一九日条⁽¹⁵⁾には、高島秋帆の門弟であった大木藤十郎に、その著書である『砲術捷徑秘録』の抜書について相談し、それを借り受けて書き写したとの記録が残っている。

- 一 砲術捷徑秘録抜書、長崎大木藤十郎^江渋谷十兵衛^与致相談置候末、御屋代迄差送候由^三、十兵衛^与相達候旨^三、差越来、達 御耳候事
- 附、本文書物御手許^三、御写方相成候由

本書者追々差下候事

この『砲術捷徑秘録』抜書については、諫早図書館が所蔵する諫早家由来の古文書・古典籍群に『砲術捷徑秘録上中下抜書』があり、この時に書き写されたものではないだろうか。ほかにも『西洋海陸戦争砲術聞書』『英國歩操圖解』『佛蘭西歩軍操書』といった、蘭軍学或いは西洋流の軍学関係の史料があり、諫早家中の蘭軍学稽古は継続して取り入れられていった。



『砲術捷徑秘録上中下抜書』
(諫早図書館所蔵)

「諫早家文書」は調査が完了していないものも多く、『日記』でさえ翻刻作業が進められている段階である。また、これまでの「諫早家文書」に関する先行研究においても蘭学に関するものはあまり見受けられない。これまで、『日記』等を調査してきた中で、諫早家中の蘭学稽古、特に長崎における稽古については、「御用透見合」嶋話中⁽¹⁾といった表現が確認できるが、これは、諫早家が長崎に隣接していたことから、蘭学修学にあたって長崎での蘭学稽古を希望する家臣に対しては暇を与えずに済み、役を務めさせながらの稽古が可能だったのであろう。諫早家家中における蘭学稽古については十分に調査しきれないため、引き続き調査し、諫早家家中における蘭軍学稽古の特色について明らかにしていきたい。

注
(1) 『日記』天保二年七月二九日条(史料番号 10817)
(2) 『日記』天保二年八月二日条(史料番号 10810)、『日記』天保二年八月九日条(史料番号 10818)

あつたのであろうか。天保二年七月二十九日条では寺田大助は嘉村のことについて「同人^二も年来執心^三蘭学之儀、通詞懇意之者^江便り段々聴問有之候処」とし、続いて天保一四年一月一五日条では、早田喜左衛門が佐賀の諫早家屋敷へ送った伺書の中に、「御聞番嘉村源左衛門殿儀、蘭学方年来執心有之、此節初勤懸分手筋を以籍写取方其外段々骨折之末、壁炮仁雷散其外希代之蘭法皆伝相成候由」としており、嘉村は長期間にわたり、懇意の通詞とのやり取りや書籍を写しとるなどして蘭学を修めていったようだ。しかし、これらは『日記』に記載された内容であり、嘉村が蘭学を修めていたとわかるような記録は『日記』と前述した『西洋船図集』の他には佐賀県立図書館が所蔵する『ボスキイテレインスト國字解』がある⁽¹⁰⁾。これは、オランダ通詞石橋助左衛門が訳したものを文化七年(一八一〇)年に蚊江嶺昌が密かに借り受けて書き写し、それを文化一四年(一八一七)に嘉村穩藏が深堀塞館で書き写し秘蔵書とした。そして、それを文政元年(一八一八)に藤原伯懋が書き写したというものである。従つて、嘉村は文化一四年には蘭学に触れており、諫早家から蘭学稽古を受け入れた天保二二年の時点で二〇年以上蘭学を学んでいたことになる。但し、この資料は「諫早藩中尾家旧蔵諫早藩銃砲組方資料」であり、その来歴は諫早家に由来するため、『日記』以外、或いは諫早家に関連する文書以外に嘉村と蘭学を結びつける記録がないか、今後調査していきたい。ただ、諫早家にとつての嘉村は蘭学皆伝の者であつたことは間違いない。では、その嘉村は諫早家に対して蘭学を勧めたのはなぜだろうか。『日記』を見ていくと、実は蘭学だけではなく、内密の海外情報を一早く伝えるなど諫早家へ様々な便宜を図っていることが確認できる。その理由を窺える記録が『日記』の天保九年(一八三八)六月二十九日条⁽¹¹⁾である。

一 長崎夏詰木原兵次左衛門分左之通内密筋申来候由、長崎御仕組方分
申来、達 御聴、心得之為爰控置之

一筆致啓達候、嘉村源左衛門殿分罷出候様申来御蔵床罷出候処、頃
日内々相咄置候、当渡来之紅毛人分エケレス一件相咄候次第、かひ

たん分申出之書取手^二入候付、佐嘉指越候条致一覽候様見^セ被申、偕
又、唐商御取締方^二付、佐嘉申越之下書、是又一覽致させられ候故、
両紙共得^与熟覽いたし度暫時被借呉候様及相談候処、於其儀^者自身
棲所式台之^二階静なる所候間、彼所^二致熟覽可然由左候^而、猶又、
分^而被申聞^者、両紙共隱密^与申条、エゲレス一件ハ差分密事^二候^而、右躰
隱密之儀^者不依大小聞取申上、脇筋決^而不相洩様^与之 仰付前候へ
共、至自然之節^者諫早^与手を繋候事故、自身限極密相知^セ申儀候、
就^而者^一万^一佐嘉表杯洩聞^上早御知^せいたし候躰之御聞込^二も相成候^而者^一、
至^而差支申儀候条、致其勘弁候様被申聞候付、委細承知仕候旨^二而、
潜^二写取、別紙両通差越申候、尤唐人方之一書^二者^一別紙相添候文面^二付、
右別紙^者何之意味^二而^一可有之哉相尋候処、御目附様御滞崎中^二不相替
御取締行届候様御用人より演達之書取^二而、其外^二子細無之由被申
聞候間、旁左様御承知夫々御熟達可被成候、此段為御懸合如斯御座
候、恐惶

六月廿三日

木下兵次左衛門

土井三左衛門様

高柳清五左衛門様

嘉村は佐賀へ露見すると支障があるとしながらも、内密の情報を早く諫早家へと伝えていたのである。それは、「自然之節^者諫早^与手を繋候事故」とあることから、万が一の場合の長崎警備については、長崎に隣接し、まとまった兵力を動員できる諫早家との連携が重要だと考えたからではないだろうか。また、間役として長崎に入港するオランダ船や唐船から海外情報の収集に勤め、特に長崎屋敷に出入りする通詞から様々な情報を得ていたはずである。実際、諫早家も諫早家の長崎屋敷に出入りする役人の中に阿蘭陀通詞や唐通詞がおり、内密の情報などの見返りとして扶持米を与えていた⁽¹²⁾。そうして収集した情報から異国船襲来に対する危機意識を高めていき、その対策として蘭軍学を取り入

三 蘭学稽古の記録のはじまり

天保期における諫早家中の蘭学について二つの事例を紹介したが、この天保期は佐賀藩の軍事面においても蘭学が隆盛していく時期であり、そうした本藩の流れの中で、諫早家も蘭学を取り入れていった。天保二年（一八四〇）二月一日条^⑦には蘭学稽古について『日記』に記録されていくきっかけとなったと考えられる内容がある。

一 御番方御勤^{ニ付} 而者 思召被成御座、蘭学相学候様少将様被 仰出候^{ニ付} 而、諸家様^ニも為稽古長崎差越被置候由、右^{ニ付}此之御方之儀^者長崎隣端^ニ一通心得之者も有之歟之様見込も有之、御番方^{ニ付}而者 御用立場も可有之^{ニ付}、相学度存候者 願出候半^者可被差免之段、左之通申来候付、右之趣触達候

一筆致啓上候、今朝音人被為召、御内々被 仰出候^者、御国^江蘭学相学候ものも有之候哉、御番方御筋^{ニ付}而者 思召被成御座候^{ニ付}、蘭学相学候之様 少将様被 仰出候^{ニ付}而、侍中^ニも是迄^者内々稽古有之候得共、表向稽古有之候様被 仰出候由、右^{ニ付}諸屋敷^ニも武雄互^リ、数人相学候由、扱又土佐様互^リ段々有之、其内長崎^江為稽古被差越置候由、志摩様御方^江も老人歟有之由、然此御方之義^者長崎隣端^ニ一通心得之者も有之歟之様見込も有之、御番方^{ニ付}而者 御用立場^成可有之、第一火術杯委敷有之候由、旁^{ニ付}而者 表向被 仰付^ニ而者 無之候得共、是迄^者蘭医之致事之様有之候へ共、全其通^ニ無之候間、其内相学度存居候者も有之候ハ、其段願出相成候ハ、可被差免被思召候間、右之趣内々申越候様被 仰出候条、左様御承知其御計可被成義御座候

諫早家の当主は佐賀城内にある諫早家の屋敷に滞在していることが大半で、

右は佐賀の諫早家屋敷詰の家臣から、諫早にあつた私領における政治の中心である会所の家臣へ当主の命令について連絡があり、それを家中へ触れだしたという記録である。文中にある少将とは佐賀藩主鍋島直正であり、この命令は直正が番方の者は蘭学を学ぶようにとの考えを示したうえで、これまで内密に蘭学稽古をしていたであろうが、今後は正式に稽古するようにと命じたことに基づいたものである。この時の諫早家当主は諫早茂洪だが、諫早家中は長崎に隣接しており蘭学については一通り修めている者がいると思うがとしつつ、番方の者について、蘭学を学びたいと申し出てきた者がいた場合は許可するようにと命じている。従つて、このお触れ以降は諫早家中においても蘭学が正式なものとして扱われていき、天保二年七月の福田七郎が願ひ出たことへ繋がつていくと考えることが出来る。また、内密に蘭学を修めていた者があるのを証明するかのように、福田が「私儀、蘭軍学執心御座候処」としていることから、以前より蘭軍学に触れていた可能性が考えられる。諫早家自体が長崎警備にも携わっていたことから長崎に屋敷を佐賀本藩とは別に設置し、そこに家臣も詰めており、蘭学に接する機会には十分にあつたであろう。但し、文中に「是迄^者蘭医之致事之様有之候へ共」とあるように、諫早家中においても天保二年以前より医学の分野では蘭学が取り入れられていたと考えるべきである。医学分野については『日記』の記録については『日記』を改めて調査していきたい。

四 天保期の蘭学稽古と佐賀藩長崎聞役

前述した天保二年二月一日条の内容が諫早家中に触れだされたことで、田中九八郎・福田七郎と公文四郎右衛門の蘭軍学稽古が立て続けに記録されたが、この二例の蘭学稽古について、重要な役割を果たしたのが当時の佐賀藩長崎聞役の嘉村源左衛門であり、二例とも嘉村の下へ諫早家は家臣を蘭学稽古に派遣した。嘉村は天保六年（一八三五）^⑧から天保十五年まで^⑨長崎聞役を務めており、『日記』には度々登場している。この嘉村はどの程度蘭学の知識が

二 天保一四年(一八四二)、公文四郎右衛門の蘭学稽古

田中、福田につづいて蘭学を学んだことがわかるのが、公文四郎右衛門である。田中と福田の時と同様に公文についても佐賀本藩の長崎聞役嘉村源左衛門の下での蘭学稽古である。『日記』の天保一四年一月一五日条^⑤によると嘉村が本藩において石火矢方原次郎兵衛一人に相伝した寄法について、「御家中之内誰人相伝仕置候半^キ、自然之期^ニ臨御用之端^ニも可相成哉」と旧年冬、つまり天保一三年冬に言ってきたとある。そこで、諫早家中から学ばせることにしたのが、公文四郎右衛門である。公文が抜擢された理由としては、砲術を修めたうえ、石火矢方に配属されていたからである。但し、年内は日が無かつたため、天保一四年の春に嘉村の下へ稽古のために向くことになった。この公文については、稽古を終えた後の報告も『日記』に記録されているため、田中、福田に比べて学んだ内容が確認できる。『日記』の天保一四年五月四日条^⑥に記録されているが、そこには「蘭法火術不残引渡相成候」とある。また、公文からの報告も書き写されている。

演達

蘭法火術方、長崎御聞番嘉村源左衛門殿在勤掛々段々執心習請被居候、廉々伝法相整可被置由^ニ付、私儀長崎罷越相伝仕候様被^キ 仰付置候付、頃日彼地罷越、其段同人^江申入、右付^而ハ神文手数等之儀何れ之通仕可然哉、牛王等も持越居候付、起證文前書差函相成度、旁得相談候処、右ハ強^チ一家を成^シ師家杯^与申儀^而無之、乍然西洋蘭法葉製等之儀、奇術而己^ニ而世上一般取扱候様^ニ共相成候^而却^而世中之害^ニも相成間敷物^而無之^ニ付、其旨昨年 少将様御越之砌 御直^ニ被申上候由之処、秘術^ニ被致置候通無之^而不相叶旨をも被遊 御沙汰候由、右付佐嘉御石火矢方原次郎兵衛殿^江昨年相伝之節も其段制約之證札被請取置候由^ニ一覽仕候様被申聞候付、右^ニ少々文意等叮嚀^ニ相認、別紙之通證札差出候処、請意

宜右^ニ付、扇子酒肴等差遣候末、前断蘭法火術之廉々巻物^ニ自筆^而被相認、右を以口伝之処迄不残引渡被申候、乍然右業向之儀多^ク葉製事而己^ニ而伝書之分^ニハ差分兼候義有之、相試候節^者別紙之通諸道具入用有之候段、是又手覚書被相渡候、惣^而昨年安房様長崎御越之節、右之御咄被仕候由之処、御自身^も御習被請度、且、孫六郎様よりも同様之儀^ニ候得共、颯^与有御沙汰等^ニ輕意^ニ其計も難相整未見合被居候由、然処御両所様^ニ御伝^へ不申上、此節私^へ相伝等仕候儀、安房様御承知等有之候儀不相好候条、其心得仕候様被申聞候、前断製作方諸道具買入等当時之御半御物入筋之儀を容易御願をも難申上^ニ付、先以諸品何程位之直段共^ニ可有御座哉、折節馬場甚左衛門出崎中^ニ付、弁理之手筋へ聞合被致呉候様相頼置候処、是又、聞合之次第別紙之通甚左衛門より懸合来候、右ハ何^レ之通可被^キ 仰付哉、此段旁御達仕候以上

卯四月

公文四郎左衛門

公文からの報告によると、嘉村源左衛門から伝授されたのは蘭法火術とそれで使用する葉の製造法や必要な道具などである。この嘉村が伝授する蘭法火術については、安房(須古鍋島家)や孫六郎(深堀家)といった重臣層からも教授を依頼されているが実現しておらず、先に公文へ伝授したことが知られると好ましくないと思われる。安房や孫六郎といった本藩直臣より陪臣である公文への伝授が先になってしまう不都合によるものであろうが、この内容からすると嘉村は他の直臣層からも伝授を依頼される程の蘭学に関する知識を有していたと考えてよいのではないだろうか。また、修学にあたって公文は起請文を嘉村へ提出して内容を他言しないとの約束をしている。その為、蘭法火術の内容については記録がない。『日記』の天保一四年五月四日条には、前掲の演達に続いて「起證文前書之事」及び演達で「相試候節^者別紙之通諸道具入用有之候段」の別紙にあたるであろう「葉製入用品覚」が記録されている。

聞き候」とあり、蘭学を取り入れるため、家臣の派遣を伺い立てている。そこで抜擢されたのが田中九八郎である。田中九八郎については、現時点で経歴等の詳細は見いだせていないが、田中良平という家臣の弟で、学問を一通り修め、兵法も修業途中であるが一通り理解できており、且つ年齢もよいとの理由によるものであった。また、この時は田中九八郎に加えて福田七郎の蘭学稽古も認められている。福田の場合は、自ら稽古を希望したもので、食事代ほか資金が毎月支給される田中とは異なり、必要な資金は福田自身が支出したようである。寺田も一人よりも二人派遣することのメリットを認めつつ、「殊^ニ自勤と申幸之儀」と願いを聞き届けてよいのではないかとしている。

口上

此通

私儀、蘭軍学執心御座候処、当時御聞番嘉村源左衛門殿手許^ニ、右稽古出来候手都合^ニ御座候趣承知仕、惣^而右人儀、満端相整居候人之由^ニ付^而考^者長崎大黒町御屋敷罷在、右人附前断蘭軍学仕候半^者、一^ニ跡之稽古^ニも相成可申と奉存候^ニ付、当秋分明秋迄一ケ年之間御暇奉願候条、御支無御座候半ハ、何卒願之通被仰付被下候様、宜御心遣奉頼候以上

丑七月

福田七郎

寺田大助殿

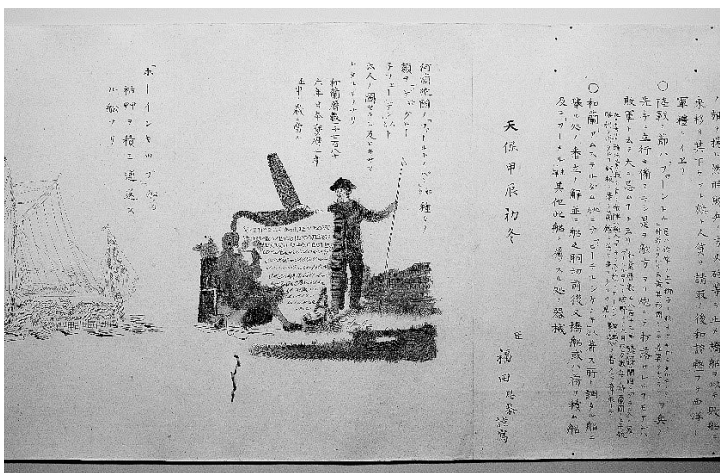
点合有^リ

一 前条伺通被仰付候^ニ付田中九八郎^江著^者 其段相達候処、乍用捨御請申上之旨相達候、扱又、福田七郎^ニも願之通被仰付之旨相達候事

右が福田の願い出た内容であるが、その願いがそのまま認められたようであることから、田中と福田の蘭学稽古は、長崎において嘉村の下で天保二三年秋から一年間実施されたと考えてよいが、『日記』においてはその後の動向の記載があるものが無いことから、この蘭学稽古が一年で終了したのか、延長されたのか

は明確ではない。但し、福田についてはこの蘭学稽古の成果であると考えられる史料が『諫早家文書』の中にある。『西洋船図集』という史料であるが、嘉村穩藏という人物が天保二三年の春に作成した西洋船について解説したものであり、それを福田思恭という人物が天保一五年（一八四四）に書き写したものである。『西洋船図集』については長崎市長崎学研究所発行の『長崎学』第五号^③で紹介しているので詳しくはそちらを参照いただきたいが、嘉村穩藏は嘉村源左衛門と比定でき、福田思恭については、思恭は号で通称が七郎である。『日記』にも福田七郎思恭^④と確認できる。このことから、福田は異国船の種類や用途、武装を中心に学んだものと推測できる。尤も『日記』の七月二十九日条によると田中と福田の蘭学稽古は佐賀藩長崎聞役嘉村源左衛門からの働きかけによるものであり、内容についても異国船の事が中心であることから、田中についても福田と同じ内容を学んだものと考え

てよいのではないだろうか。



『西洋船図集』（諫早図書館所蔵）

諫早家家中の蘭軍学

諫早市美術・歴史館 森 健史

はじめに

江戸時代に佐賀藩諫早領として、現在の長崎県諫早市のほぼ全域、長崎市の一部及び佐賀県藤津郡太良町のほぼ全域を領有していたのが諫早家であり、佐賀藩内においては親類同格に位置付けられ藩政へも関与した重臣であった。

その諫早家から一万点を超える古文書や古典籍が諫早市立諫早図書館（以降「諫早図書館」と略記）に寄贈されており、その中から諫早家に関する記録や関連史料など二五〇八点が、諫早領内の政治・社会・経済・文化などを伝えるとともに、佐賀本藩や長崎とも深いつながりをもつ貴重な古文書群として学術的価値が高いとの理由により、「諫早家文書」として長崎県指定有形文化財に指定されている。そのうち約七割にあたる一〇三三点が諫早家の記録である『日記』類（以下注記がない場合は『諫早家文書』の『日記』類は『日記』と表記）で、延宝四年（二六七六）から慶応四年（一八六八）までの約二〇〇年分である。

『日記』には、諫早領内の様々な出来事の記録や本藩とのやり取りなどが記録されているが、その他に諫早家が長崎に隣接する地を領有し長崎警備にも大きく関与していたことから、オランダ船の来航・出航をはじめとした外国船に関する情報、オランダ風説書、台場の警備人員など長崎警備に関する内容も数多く記録されている。さらに、諫早家家臣による文学や武道、医学といった各種学問の稽古に関する記録も残されており、稽古の場所や誰に師事したかなどの情報が得られる。そうした学問稽古の記録の中に蘭学稽古に関する記録も見られ

る。本稿では、そうした蘭学稽古の中から、天保期に確認できる蘭学、特に軍事に関する稽古の記録を紹介する。

一 天保二年（一八四二）、田中九八郎及び福田七郎の蘭学稽古

『日記』については翻刻作業が進められている段階であることから現時点ではあるが、蘭学、特に軍事関係の稽古についての記録の初出が天保二年七月二十九日^①になる。その記録によると田中九八郎及び福田七郎の二名が蘭軍学稽古を許されている。

この七月二十九日条は、諫早家家老で当時は長崎御仕組方主役として諫早家における長崎警備の責任者であった寺田大助^②から諫早家当主諫早茂洪への伺とその結果についての記録である。この記録によると、佐賀本藩の長崎聞役であった嘉村源左衛門から寺田に宛てて、長崎へ来た際は御家の為になることで相談があるから寄つて欲しいと度々書状が送られて来ており、その結果、七月上旬に寺田が長崎に赴いた際に会談が実現していたことがわかる。会談の中心は異国船に関する事で、嘉村から万が一異国船が渡来した場合には矢石では簡単に撃退できないこと、渡来に備え異国船について知っておいてはどうか、諫早家で蘭学者を登用することになったならば自身（嘉村）の下でしっかりと蘭学を学べるように手配すると蘭学を勧められたようである。寺田が嘉村の話をどのように受け止めたかについてだが、この七月二十九日条には「至極尤もに相

- る。佐賀藩諫早領江ノ浦村。諫早市飯盛町後田。
- (26) 諫早市郷土館 『諫早市郷土館叢書(六)』 二〇一三年。
- (27) 佐賀藩諫早領。諫早市多良見町市布・圃・木床・化屋・中里・西川内。
- (28) 佐賀藩深堀領。長崎市小ヶ倉。
- (29) 寛政五年(一七九三)『日新記』十一月十九日条。(諫早家文書一〇五四六)。諫早図書館蔵。
- (30) 嘉永六年(一八五三)『日新記』十二月十五日条。(諫早家文書一〇九三三)。諫早図書館蔵。
- (31) 嘉永七年(一八五三)『日記』四月五日・十二日条。(諫早家文書一〇九三七)。諫早図書館蔵。
- (32) 二月二十六日条(諫早家文書一〇九二九)。諫早図書館蔵。
- (33) 佐賀藩諫早領。諫早市飯盛町里・山下・池下・古場。
- (34) 佐賀藩諫早領。諫早市多良見町東園・西園・野副・元釜。
- (35) 御蔵入。諫早市貝津町・堂崎町・馬渡町・津久葉町・若葉町・青葉台・貝津ヶ丘町。
- (36) 佐賀藩諫早領。諫早市津水町。
- (37) 御蔵入。諫早市有喜町・鶴田町・中通町・天神町・松里町。
- (38) 佐賀藩諫早領。諫早市森山町唐比北・唐比東・唐比西。
- (39) 御蔵入。諫早市小船越町・白岩町・堂崎町・中尾町・山川町・馬渡町。
- (40) 佐賀藩深堀領。長崎市神ノ島町。現在埋立てにより陸続きとなっている。
- (41) 佐賀藩諫早領。諫早市久山町・久山台・津久葉町・若葉町・青葉台。
- (42) 佐賀藩諫早領。諫早市川内町。
- (43) 佐賀藩諫早領。諫早市宗方町。
- (44) 佐賀藩諫早領。諫早市小野町。
- (45) 佐賀藩諫早領。諫早市長野町。
- (46) 佐賀藩諫早領。諫早市小野島町。
- (47) 佐賀藩諫早領。諫早市本明町・本野町。
- (48) 佐賀藩諫早領。諫早市目代町・日の出町。
- (49) 佐賀藩諫早領。諫早市長田町・正久寺町・高天町・白木峰町。
- (50) 佐賀藩諫早領。諫早市高来町神津倉・三部巻・里・泉・町名・法川・黒崎・小峰・善住寺・東平原。
- (51) 十二月十五日条(諫早家文書一〇九六二)。諫早図書館蔵。
- (52) 弘化四年(文久二年(一八四七)六二)。諫早家第十五代茂晴。この書状が出された時、茂晴は僅か九歳である。

【参考文献】

- 諫早市郷土館 『諫早市郷土館叢書(六)』 諫早市郷土館 二〇一三年
- 諫早市史編纂室 『諫早市史 第二巻』 諫早市役所 一九五五年
- 諫早史談会 『諫早家系事蹟』 諫早史談会 一九八七年
- 織田武人 『幕末期の諫早領台場と海岸警備の研究』 『諫早史談 第九号』 諫早史談会 一九七七年
- 織田武人 『諫早台場の円形台座・砲身と円形台座考証』 『諫早史談 第四十号』 諫早史談会 二〇〇八年
- 川副義敦 『佐賀藩』 現代書館 二〇一〇年
- 木原薄幸 『幕末期佐賀藩の藩政史研究』 九州大学出版会 一九九七年
- 酒田子成 『徳川末期の諫早領での外国船警備』 『諫早史談 第六号』 諫早史談会 一九七四年
- 下中直人 『長崎県の地名』 平凡社 二〇〇一年
- 城島正祥 杉谷昭 『佐賀県の歴史』 山川出版社 一九七二年
- 菅 英志 『日本城郭大系 第17巻 長崎・佐賀』 新人物往来社 一九八〇年
- 竹内理三編 『角川日本地名大辞典 41 佐賀県』 角川書店 一九八二年
- 竹内理三編 『角川日本地名大辞典 42 長崎県』 角川書店 一九八七年
- 長崎県 『長崎県史 藩政編』 吉川弘文館 一九七三年
- 長崎県北高来郡教育会 『北高来郡誌』 北高来郡教育会 一九一九年
- 長崎県教育委員会 『長崎街道』 長崎県文化財調査報告書第一五四集 二〇〇〇年
- 鍋島報効会 『佐賀藩 長崎警備のはじまり』 鍋島報効会 二〇一二年
- 東長崎地区連合自治会(矢上・古賀・戸石・橘) 『2000年の東長崎』 二〇〇一年
- 藤野 保 『佐賀藩』 吉川弘文館 二〇一〇年
- 藤野 保編 『佐賀藩の総合研究』 吉川弘文館 一九八一年
- 藤野 保編 『続佐賀藩の総合研究』 吉川弘文館 一九八七年
- 山部 淳 『諫早郷村史料集』 諫早高城会 二〇〇五年

但異船方出張及数度家来以下く迄、及困窮候^ニ付扶助、且矢上村其外宿
 駅^江救助致呉候米

一白米七百五十石

二十二匁かへ

代銀五十五貫目

合銀二百二十八貫四百七匁五分四厘四毛

右之通、銀米遣方、凡入切前御座候、以上

辰十二月

扶助米費用の銀五十五貫目を引いた、銀一七三貫四〇七匁五分四厘四毛が全
 6回の警備費用である。これらの費用を一兩〓六十匁とすると、約二八九〇兩と
 なり、諫早家が佐賀本藩に扶助を願い出た三千兩に近い金額となる。

■
 おわりに

長崎警備及び浦手警備は、諫早家・諫早家臣・佐賀藩諫早領民にとって大き
 な負担であり、特に今回紹介した警備費用は、あくまでも警備にかかった人件
 費・食料・運送人夫・水主の費用であり、ここに記されていない、陸海での演習費、
 具足の新調や修理、火繩銃や石火矢の製造費、洋式銃の購入費、多良海道を
 通った場合の多良宿へ矢上宿間での休泊する際の準備費用、運搬や渡海用の船
 建造費や修繕費等警備に関する費用は佐賀藩のみならず諫早家の財政を圧迫
 していた。これらの費用は、諫早家と佐賀本藩負担に分けられると思われるが
 不明な部分が多い。これらについては、『日記』に記載があるが、膨大な史料であ
 り、遅々として進んでいないのが現状である。

注

(1) 弘治元年〜慶長十八年(一五五五〜一六一三)。龍造寺鑑兼嫡子。天正十五年

(二) 五八七 伊佐早入部後は信重。

(2) 西郷尚善嫡子。龍造寺氏に伊佐早を追われた後は、妹が嫁いでいた松浦家の庇護を
 受け、子孫は松浦家家臣となる。墓所は最教寺(長崎県平戸市)寺域内にある。

(3) 佐賀藩の序列として藩主・三家・親類・親類同格となり、諫早家は四層目に位置する。
 この親類同格には、旧龍造寺四家の諫早・多久・武雄・須古家がいる。

(4) 長崎県指定文化財。諫早図書館蔵。『諫早家文書』は日記類一〇三三冊、記録類
 三九〇冊、絵図類八五葉からなる古文書群で、日記類は延宝四年〜慶応四年
 (一六七六〜一八六八)の一九二年分の諫早家・佐賀藩に関する事跡が書かれ、佐賀と
 諫早で書かれている。

(5) 延享三年(一七四六)『日記』(諫早家文書一〇三三四)諫早図書館蔵。表紙に「四月迄
 御当番年」とあることから、4月が当番と非番の交替月であった。

(6) 諫早領主は一年のほとんどもこの屋敷で過ごし、諫早へ下るのは、長崎警備や要人
 が諫早領内を通る際のみであった。佐賀市城内一丁目。現在佐賀県立佐賀西高等学
 校敷地の一部。

(7) 長崎市大黒町。長崎駅南側、ホテルニュー長崎付近。

(8) 長崎市五島町。慶応三年(一八六七)屋敷内に佐賀藩校「致遠館」が置かれた。

(9) 佐賀藩深堀領。長崎市小ヶ倉町。

(10) 佐賀藩諫早領。長崎市矢上町。長崎街道二十五宿の一宿。

(11) 長崎警備や長崎を往来する要人への応接等を行った。長崎市矢上町。

(12) 嘉永七年(一八五四)新設。佐賀藩諫早領。長崎市田中町。

(13) 佐賀藩諫早領。諫早市東小路町。現長崎県立諫早高等学校敷地。

(14) 佐賀藩諫早領。諫早市飯盛町開・平古場・佐田・久保・下釜・後田・上原・中山・野中・
 山口。

(15) 寛政五年(一七九三)『日新記』三月二日条。(諫早家文書一〇五四三)。諫早図書館蔵。

(16) 長崎県指定文化財。諫早図書館蔵。

(17) 諫早市美術・歴史館蔵。

(18) 佐賀藩諫早領矢上村。長崎市田中町。

(19) 佐賀藩諫早領矢上村。長崎市田中町。

(20) 佐賀藩諫早領矢上村。長崎市かき道。

(21) 佐賀藩諫早領戸石村。長崎市牧島町。

(22) 佐賀藩諫早領戸石村。長崎市牧島町。

(23) 佐賀藩諫早領田結村。諫早市飯盛町池下。

(24) 別名白石台場。佐賀藩諫早領江ノ浦村。諫早市飯盛町下釜。

(25) 現向島。多布施反射炉で製造された石火矢の試し打ちが行われた記録が残ってい

同

一 同十一貫百六十目

但長崎・小ヶ倉其外、燃用蠟燭二百六十二斤半、代一斤^ニ付、銀三匁五分か
へ

一 銀九百十八匁七分五厘

但長崎屋敷其外、出張之向々諸遣用詰夫七十五人、日数前条同断、一日^ニ人^ニ付、銀二匁充

一 同二貫二百五十匁

但御仕組前之通、出張之者武器運送夫丸八百九十四人、遠近凡平均^ニ、一人前片道銀五匁充、往来分

一 同八貫九百四十匁

但、嶋々渡海用、其外自分^ノ差廻候船舸子三十六人、日数十五日充、同詰^ニ、五百四十日分、一日一人^ニ付、員飯米二升九合充

一 白米十五石六斗六升

一 二十一匁五分かへ

代銀一匁百二十二匁三分

但異船方^ニ付、佐嘉飛船、往来員飯

一 同四石五斗

代同三百二十二匁五分

但右同断、筆紙・墨・油代其外、偕又、於長崎・小ヶ倉、諸手配方入費

一 銀四貫五百匁

一 銀三十匁七百十三匁五分五厘

五回目^ノの警備には、総勢一四五二人内家臣四四七人が出張している。四回目から四ヶ月後で家臣の警備人数は、非番の三七二人より七五人増員され、長崎御仕組で決められた当番の際の人数と思われる。家臣の内、七五人が十四日間、三七二人が十五日間の出張をしている。

辰九月、英吉利船渡来^ニ付、銀米遣

但小鹿倉其外出勢人数、百挺鉄炮入^テ、人数地行詰引^テ四百四十七人、九月十日^ノ同十五日迄、日数六日分、一日一人^ニ付、当介銀二匁充

一 銀五貫三百六十四匁

但長崎・諫早・小鹿倉、其外燃用蠟燭百五十斤、代一斤^ニ付、銀一匁五分か
へ

一 同五百二十五匁

但長崎屋敷其外、出張之向々諸遣用詰夫七十五人、日数前条同断、一日^ニ人^ニ付、銀二匁充

一 銀九百匁

但御仕組前之通、出張之者武器運送夫丸八百九十四人、往来遠近平均^ニ、一人^ニ付、片道銀五匁充

一 同八貫九百四十匁

但嶋々渡海用、其外自分^ノ差廻候船舸子三十六人、日数六日分充、同詰^ニ、二百十六日、一日一人^ニ付、員飯米二升九合充

一 白米六石二斗六升四合

一 二十一匁五分かへ

代銀四百四十八匁九分二厘

但異船方^ニ付、佐嘉飛船、往来員飯

一 同三石

代同二百十五匁

但右同断^ニ付、筆紙・墨・油代其外、偕又、於長崎・小鹿倉、諸手配方入費

一 銀一貫八百匁

一 銀十八貫百九十二匁九分二厘

六回目^ノの警備には、総勢一四五二人内家臣四四七人が出張している。五回目より約一ヶ月後で、当番の長崎御仕組通りの人数が出張していると思われる。

一人^ニ付、銀二匁充
同四百九十六匁

但武器其外、運送夫丸七百四十四人、往来分遠近其外凡平均^ニメ、一人前
片道銀五匁充

同七貫四百四十匁

但鳴々渡海用其外、自分^ノ差出候船舸子三十六人、日数四日充、同詰^ニメ

百四十四日分、一日一人^ニ付、員飯米二升九合充

一白米四石一斗七升六合

二十一匁五分かへ

代銀二百九十九匁二分八厘

但異船方^ニ付、佐嘉飛船、往来員飯

一白米三石

代同二百十五匁

但右同断、筆紙・墨・油代其外、偕又、於長崎・小ヶ倉、諸手配方入費

一銀一貫二百匁

〆銀十二匁九百七十六匁二分八厘

三回目^ノ警備も非番であるが、総勢二二四人内家臣三七二人が出張している。二回目より二日後の警備である。四日間と短期間ではあるが、連続警備は家臣への負担は相当であつたと思われる。

辰四月、アメリカ船渡来^ニ付、銀米遣

但小ヶ倉其外出勢、百挺鉄砲入^テ、人数地行詰引^テ三百七十二人、四月

十一日^ノ同十三日迄、日数三日分、当介一日一人^ニ付、銀二匁充

一銀二貫三百三十二匁

但長崎・諫早・小ヶ倉其外、燃用蠟燭七十五斤、代一斤^ニ付、銀三匁五分か

へ

一同二百六十二匁五分

但長崎其外、出張の向々諸遣用詰夫六十二人、日数前条同断、一日一人^ニ
付、銀二匁充

一銀三百七十二匁

但御仕与前之通、出張之者武器運送夫丸七百四十四人往来分、遠近凡平
均^ニメ、一人前、片道銀五匁充

同七貫四百四十匁

但鳴々渡海用、自分^ノ差廻候船舸子三十六人、日数三日充、同詰^ニメ、

百八日分、一日一人^ニ付、員飯米

一白米三石六斗三升二合

二十一匁五分かへ

代銀二百二十四匁四分六厘

但異船方^ニ付、佐嘉飛船、往来員飯

一同三石

代同二百十五匁

但右同断、筆紙・墨・油代其外、偕又、於長崎・小ヶ倉、諸手配方入費

一銀九百匁

〆銀十一貫六百四十五匁九分六厘

四回目^ノ警備には、総勢二二四人内家臣三七二人が出張している。同年四月から佐賀藩の当番であるが、三回目^ノ非番と同人数で出張している。これは、当番と非番の交代時期に近く、非番の仕組みのままであつたためと思われる。

辰八月、英吉利船渡来^ニ付、銀米遣

但小ヶ倉其外出勢人数、百挺鉄砲入^テ、地行詰引四百四十七人之内

七十五人、八月五日^ノ同十四日迄、日数十日分、一日一人^ニ付、当介銀二匁

充

一銀一貫五百匁

但右同断之内三百七十二人、八月五日^ノ同十九日迄、日数十五日分、右

但右同断之内人数三十四人、二月朔日同六日迄、日数六日分
一銀四百八匁

但右同断之内人数七十二人、二月朔日同七日迄、日数七日分

一銀一貫八匁

但長崎・諫早・小ヶ倉其外、燃用蠟燭百二十二斤半、代一斤_ニ付三匁五分か
へ

一銀四百二十八匁七分五厘

但出張之向々、諸遣用詰夫六十二人、日数七日分、一日一人_ニ付、銀二匁充

一同八百六十八匁

但出張之者共武器其外、運送用夫丸七百四十四人、往来遠近平均_ニメ、一人前片道銀五匁充

一同七貫四百四十匁

但嶋々渡海用、其外自分_ノ差廻候船舸子三十六人、日数七日充、同詰_ニメ二百五十二人分、一日一人_ニ付き、員飯米二升九合充

一白米七石三斗九合

代銀五百二十三匁八分一厘一毛

但異船方_ニ付、佐嘉飛船、往来員飯

一白米三石

代銀二百十五匁

但前断_ニ付、筆紙・墨料・油代、偕又、於長崎・小ヶ倉諸手配入費
一銀二貫百目

メ銀十五貫六百五十二匁五分六厘

辰二月、矢上近海_江異船渡来_ニ付、銀米遣

但矢上近海_江異船渡来_ニ付、矢上其外、最寄浦手々々_江六百七十人出張、二月朔日より二日迄、日数二日分

一白米十三石四斗

代銀九百三十七匁

但右同断、出張之者燃用、偕又、村役其外、諸使之者渡、蠟燭五十斤、代一斤_ニ付、三匁五分かへ

一銀百七十五匁

但右同断_ニ付、出張之者、武器運送用夫員往来分

一銀五百二十匁

但炬薪・筆紙・墨料、偕又、不意渡来共付_而者、諸手配方、色々雜費相立、宿賃等迄入_テ

一同七百五十目

但出張之人数六百七十人、一日一人_ニ付、当介銀二匁充、二日分

一同一貫四百匁

但守衛人数、牧嶋渡海、偕又、異船見守船其外用船舸子二百七十二人、日数二日充、同詰_ニメ五百四十四人、一日一人_ニ付、員飯米二升九合充

一白米十五石七斗七升六合

代銀一匁百三十匁六分二厘

メ銀四貫九百十二匁六分二厘

二回目_ノ警備も非番であるが、一回目と違い、長崎・浦手警備両方に出張している。長崎には最長七日、総勢二二四人内家臣三七二人、浦手には二日、総勢八四〇人内家臣六七〇人、合わせて総勢二〇五四人内家臣一〇四二人であり、特に佐賀藩諫早領である浦手警備に約二倍の家臣が出張している。

辰二月、白帆注進_ニ付、出張、銀米遣

但小ヶ倉其外出勢、百挺鉄炮入_テ人数、地行詰引_テ三百七十二人、二月九日同十二日迄、日数四日分、一日一人_ニ付、当介銀二匁充

一銀二貫九百七十六匁

但長崎・諫早・小ヶ倉其外、燃用蠟燭百斤、代一斤_ニメ銀一匁五分かへ
一同三百五十匁

但長崎屋敷其外、出張之向々、諸遣用詰夫六十二人、日数前条同断、一日

姿者、乍恐、委細御見聞をも可被成御座^ニ付、細々不申上候条、前件之事情幾重^ニも被為聞召啓、御番方格別之訳を以、何卒願通被仰付被下候様、宜御相達深々御頼仕候、以上

辰十二月 益千代⁽²⁾内 杉野助右衛門

井上丈左衛門殿

田中五郎左衛門殿

中野六右衛門殿

目安左^ニ

安政二年

異船方^{上番}ニ付、銀米遣方凡目安

卯七月々辰九月迄

要約すると、諫早家は長崎警備が続ぎ、諫早家家臣が困窮しているのので、佐賀本藩に補助を求め、安政三〜五年(一八五六〜五八)にかけ毎年五百両、合計千五百両の補助が確約された。また、安政元年(一八五四)には八百両の補助を受けておりその御礼を述べているが、安政二〜三年(一八五五〜五六)にかけ、6回長崎警備に出張し困窮し、佐賀本藩へ納めるための銀子を警備費用にあてたが、それを補う費用捻出ができず、佐賀本藩に対し三千両の補助を願い出ており、各警備での費用の目安も提出している。目安の表題で、卯は安政二年、辰は安政三年に当たる。ちなみに、佐賀藩は安政二年四月から安政三年三月迄は非番、安政三年四月よりは当番となる。

卯七月、英仏船数艘渡来^ニ付、出張銀米遣

但小ヶ倉其外出勢、百挺鉄炮入^テ地行詰引都合三百七十二人、七月七日

夕十月十日迄日数六十一日分、一日一人^ニ付銀二匁充

一銀四十五貫三百八十四匁

但小ヶ倉・長崎・諫早其外^ニ而、燃用蠟燭千二百二十斤、一斤^ニメ三匁五分

かへ

一同四貫二百匁

但小鹿倉・長崎其外出張之人々諸遣用詰夫丸七十二人、同詰、前条同断

一同八貫七百八十四匁

但右同断^ニ付、武器其外運送夫丸七百四十四人往来分、平均^ニメ一人前片

道銀五匁つゝ、

一同七貫四百四十匁

但鳴々渡海用、其外自分々差廻候船舸子三十六人、同詰^ニメ二千九百九十

六日分、一日一人^ニ付、員飯米二升九合充

一白米六十三石六斗八升四合

三升^ニ付、二十三匁八分かへ

代銀五貫五十二匁二分六厘四毛

但右同断^ニ付、佐嘉飛船、往來員飯

一同十二石四斗

右同断

代同九百四匁四分

但右同断^ニ付、筆紙・墨・油代其外、倍又、於小ヶ倉・長崎、諸手配入費

一銀七貫六百匁

メ銀七十九貫三百四匁四分六厘四毛

一回目の警備には、非番ではあるが、六十一日間、総勢一二二四人内家臣三七二人が出張している。他の五回の警備に比べ長期間に亘っており、家臣の心労は想像に耐えがたいものであったと思われる。

辰二月、アメリカ船渡来^ニ付、銀米遣

但小鹿倉其外出勢人数、地行詰引^テ三百七十二人之内二百六十人^者二月

朔日より同五日迄日数五日分、一日一人^ニ付当介銀二匁充

一銀二貫六百六十匁

申儀、御座候、以上

丑正月

「長崎最寄村々住居之家来并足軽人数附」では、長崎近村及び橋湾沿岸の十一ヶ村に組頭一人、侍六十五人、足軽二三百六人、合計三〇二人が居住している。矢上村が分けてあるのは、在郷と新たに居住した家臣を分けて記載してあると思われる。また、貝津・有喜・小船越村は御蔵入の村であるが、侍三人、足軽七人が居住している。喜々津村に足軽が多いのは、長崎・浦手警備に出張するのに、適した村であったことから足軽が多く居住していたと思われる。

「家来中手廻入^テ惣人数、尤精兵計」で、総人数二二二人とあるが、記載の人数の合計は二一九人で、三十人の差は不明である。諫早領内外住の家臣の合計と思われる。足軽は、一組三十人前後で二十三組に分かれている。

「千人百挺人数」では、オランダ商船・唐船・異国船に関係無く、速やかに四八九人が長崎警備に出張することが決められ、内二十九人は小ヶ倉・神ノ島に出張することが決められている。四八九人の内従者を引いた人数は三二四人となる。

四 警備費用

諫早家の一年間の詳細な費目史料が無いため、警備への支出も不明である。一回の警備に費用がどれ程かかったのかは、日数や人数により相違があるが、安政三年（一八五六）『日記』^①に記載されており、諫早家から佐賀本藩に対して出された警備費用に関する史料である。

一 異船方^ニ付御取替願、左之通、梅崎多平次、請役所持出、田中五郎左衛門殿、相達之候事

口達

近年相続長崎表異船渡来付^而兼、仰付前之人数其時々出張仕、段々御助力等も被為拜領候得共、一課御補之分^而中々難立行訳を以、献米之

内部懸御耳被仰付被下度、委細当夏奉願候処、御仁恵之御吟味被成下、当辰年方向三ヶ年、為御助力正金五百兩充年々被渡下之旨、御達之趣承知仕、重畳難有仕合奉存候、惣^而一昨寅年以来数度之異船渡来^ニ付、其夏依尔願定金八百兩被為拜領、御蔭差尖候、口々当的不及破分^者可也^ニ手を附候得共、其後同七月英仏両州之船々数艘渡来、将又、当二月長崎沖目^江白帆船両度相見、引続同月私領矢上海へも不意異船乗入、同四月長崎表^江アメリカ船渡来付^而其度々百挺鉄炮、其外兼、御差図前之人数ヶ所く出張、其内数ヶ月滞陣をも仕、誠^ニ身代不相応莫大之物入打続、何連与凌道無御座、既^ニ及不興候程之至儀、行迫候付、不得止事、御蔵究納銀用之金子を以、如形手配相整候処、其跡、右納銀之目論見無御座^ニ付、猶又、奉歎願候得共、江戸表御飾時^ニ付、分^而御論達之旨も御座候付、外^ニ何連共作略之道^者有御座間敷哉、重畳讚談仕候得共、從來致尽之未与申、大総之明目^ニ而業柄何分其儀不行届、無余儀前断献米御耳奉願候処、年限御助力之蒙御達、尤右^者当十月以後被渡下候由^ニ付、而^者、当的御蔵究要用之銀調不届合、大切之御仕切、何連与可仕様無御座、旁、危急之訳を以、御聲懸調達奉願、御蔵究之儀^者押々相整候位之儀^ニ而、其外銀主手附方等之術計更々無御座、甚心痛半、又々当八月同九月数度異船渡来、誠^ニ以、及当惑候得共、御番方^ニ付、聊不束之儀等出来仕候^而者、全不私儀^ニ付、尚又、非常之手配を以、御差図前之人数迅速出張、御外響^ニ者、不相懸通、如形御用算仕候、然処、追年之大物入、一時^ニ晝寄、至当今一步之運も相附不申、絶体絶候故之参懸、乍憚、御憐察可被成下候、就^而、當時之御半、其体再往難奉願、重畳奉恐入候得共、去秋以来当九月迄之処、更^ニ御手添無御座、出張方も既及六度、内輪失費之次第^者廉々別紙目安書之通^ニ而、年々追来候、諸口之借財差尖、最早及破候通詰合、実以言語同断^{（ツマ）}之参懸御座候条、当節正金三千兩御取替被差出被下候道^者有御座間敷哉、伏^而奉歎願候、於然^者御蔭格別不及不興通可也、被繕、自然之刻^者尚又迅速出張方、万端嚴重之手配相整可申与、重畳難有仕合奉存候、右出張方^ニ付、而^者、現美之有

内

小物頭 三人

一独礼 九十二人 一平侍 二百五十四人

一步行足輕 七百二十五人

内

弓足輕 百五十五人 鉄炮同 三百四十九人

長柄同 百五十八人 昇同 六十三人

一山足輕鉄炮之者 七十五人

惣人数合 千二百二十一人

以上

千人百挺人数

内

二百五十人并百挺鉄炮早速立

一与頭 八人 一与頭 二人 一侍 五十六人

一足輕 二百四十三人 一手男 十二人

人数 四百八十九人

内

侍 八人上下二十四人 足輕 五人

人数 二十九人

右者神嶋(40) 小ヶ倉、地行詰引

残人数 四百六十人

右者、白帆注進之差付、早速立^三而出張、尤例紅毛商売船入津之比合

候^{半者}紅毛船異船之振差分候上、致出張候様与之御達前^二付、左^三書

載之村々在住之内、壯年達者之者相撰、扱又、諫早住居之内、早速、

致出張候通、仕組召置申候

但此与頭、長崎表出張手配方彼是、兼而、諫早今差出置候

一与頭 一人 一侍 十五人 一足輕 五十人 矢上村

一侍 四人 一侍 五人 一足輕 十七人 戸石村

一侍 十人 一足輕 四十人 田結村

一足輕 三十人 一侍 二人 一足輕 十人 江ノ浦村

一侍 二人 一足輕 十人 喜々津村

一与頭 七人 一同 二人 一侍 十二人 久山村(41)

一足輕 九十二人 一手男 十二人 諫早

人数 六百八十七人 差引

右者諫早并最寄、手近之村々^{江左}書載之通、用意召置、長崎表異船、恰

好次第、随御差図、早速出張仕候通、兼而仕組召置申候

一大物頭 三人 一与頭 七人 一侍 九十九人 諫早

一足輕 五十九人 一山伏 三人 一小道具之者其外五十一人

一足輕 十人 河内町(42)

一足輕 十五人 宗方村(43)

一足輕 四十人 小野村(44)

一足輕 八人 長野村(45)

一足輕 十五人 小野嶋(46)

一同 十二人 本明村(47)

一同 五人 目代村(48)

一同 十七人 東長田村(49)

一同 二十人 小江村(50)

右之通、千人百挺之御手頭前之人数、長崎表白帆相見得候一左右次第早速

立、扱又、恰好次第、請御差図人数差出候通、兼而嚴重^二仕組召置申候、尤右

之外、私領浦固、且手廻之人数并佐嘉・諫早留守仕組等之儀も、別段相整置

立、扱又、恰好次第、請御差図人数差出候通、兼而嚴重^二仕組召置申候、尤右

之外、私領浦固、且手廻之人数并佐嘉・諫早留守仕組等之儀も、別段相整置

海路は天候の影響や転覆の可能性があるため、時間がかかるが、より確実な多良海道を飛脚が走った。陸路では、大雨時に川が増水しても渡河できるように、丸太等で仮橋を架ける仕組がなされていた。また、夜間でも注進は行われるため、篝火場や飛脚の通行時に松明を掲げる仕組があり、その際は近村の住人が駆り出された。佐賀城内の諫早家御屋敷への白帆注進は、新たな情報が入り次第随時なされ、指示の通達が返報された。当初は烽火の伝達も行われていたが、伝達が不確実等の理由により廃止されることとなる。

二 浦手(橘湾)沿岸警備

浦手とは佐賀藩諫早領の南に位置する橘湾沿岸のことと、その警備を浦固と呼ぶ。浦手警備は、寛政五年(一七九三)ロシア船来航に備え、江ノ浦村⁽¹⁴⁾に番船を配置したのが始まりである。⁽¹⁵⁾橘湾沿岸の台場は、文化五年(一八〇八)に作成された『牧島ノ圖』⁽¹⁶⁾以前に築かれたと思われる。慶應三年(一八六七)に記された『浦手御臺場御石火矢其外諸道具取調子帳』⁽¹⁷⁾によると、東望⁽¹⁸⁾・東望山⁽¹⁹⁾・釜崎⁽²⁰⁾・黒瀬山⁽²¹⁾・魚見嶽⁽²²⁾・経見嶽⁽²³⁾・江ノ浦魚見嶽⁽²⁴⁾・手崎⁽²⁵⁾に三十六挺が据えられ、東望御蔵・東望山御蔵・釜崎御蔵に十六挺、鉛玉等八〇四玉、合葉約六百斤(約三百六十kg)が備えられていた。⁽²⁶⁾

三 諫早家の長崎警備

諫早家は長崎警備に「千人百挺」を配し、先陣として「二百五十人並び百挺鉄砲早速立」で警備にあたる仕組となっていた。また、毎年、「長崎御仕組」と呼ばれる、佐賀藩内における長崎警備での配置等が藩主より命じられた。警備は夏詰と呼ばれるオランダ船・唐船が入津する時期に増員、出帆すると減員される仕組になっていた。寛政五年(一七九三)喜々津村⁽²⁷⁾にあった陣屋を小ヶ倉村⁽²⁸⁾に移築⁽²⁹⁾することで、より迅速に長崎警備に出張出来る仕組を整えた。ま

た、幕末に異国船入津が相次ぐと、人員不足の解消のため、嘉永六年(一八五三)諫早家家臣の次男・三男を家臣へ召し上げ、矢上村やその近村へ移住⁽³⁰⁾させ、翌年には矢上村東望に陣屋を新築する。⁽³¹⁾この陣屋は、白帆注進がもたらされた際に、迅速に長崎警備と浦手警備の両方同時に出張出来る仕組のためである。

次に示す史料は、嘉永六年『日記』⁽³²⁾に長崎警備に際し、諫早家家臣の居住先・身分・人数、警備への人員等を記したもので、佐賀本藩に提出した控である。

長崎最寄村々住居之家来并足軽人数附

一与頭	一人	一侍	二十六人	一足軽	七十七人	矢上村住居
一侍	七人	一足軽	二人			戸石村住居
一侍	七人	一足軽	二十人			田結村 ⁽³³⁾ 住居
一侍	十三人	一足軽	五十八人			江ノ浦村住居
一侍	四人	一足軽	十四人			矢上村住居
一侍	一人	一足軽	四十二人			喜々津村住居
一侍	三人	一足軽	三人			大草村 ⁽³⁴⁾ 住居
一足軽	五人					貝津村 ⁽³⁵⁾ 住居
一侍	一人	一足軽	四人			津水津 ⁽³⁶⁾ 住居
一足軽	二人					有喜村 ⁽³⁷⁾ 住居
一足軽	十八人					唐比村 ⁽³⁸⁾ 住居
一侍	三人					小船越村 ⁽³⁹⁾ 住居
以上						

家来中手廻入^{大物頭}惣人数、尤精兵計

一親類 二人 一家老 六人

内

大物頭 三人

一番頭^{小物頭} 二十三人 一御目見通 十五人

諫早家の長崎警備

諫早市美術・歴史館 主任専門員 大島 大輔

はじめに

諫早家は、龍造寺家晴⁽¹⁾を始祖とし、天正十五年(一五八七)豊臣秀吉の命により、伊佐早を治めていた西郷信尚⁽²⁾を破り入部する。その後、龍造寺本家断絶等があり、慶長十二年(一六〇七)佐賀藩成立後は、佐賀藩家臣として藩政の一翼を担い、二六二〇〇石(物成一〇四八〇石)の大配分を持ち、元禄十二年(二六九九)親類同格⁽³⁾となる。以後、廃藩置県迄諫早を治めることとなる。

佐賀藩諫早領は、東に有明海、西に大村湾、南に橘湾と三方を海に囲まれ、また、長崎街道・多良海道・島原街道が通り、陸海の交通の要衝であった。また、鹿島藩(佐賀藩支藩)・島原藩・大村藩・幕府直轄領と接し、領内七十三ヶ村の内十四ヶ村は御蔵入と呼ばれ、佐賀本藩領や佐賀藩家臣の飛地が混在している。佐賀藩内でも長崎の隣端であった諫早家にとり長崎警備は重要任務である一方で、人的・財政的にも大きな負担であった。本稿は、諫早家の長崎警備について『諫早家文書』⁽⁴⁾の『日記』より記載史料を交え紹介する。

一 長崎御番(長崎警備)

(1) 当番と非番

長崎御番(長崎警備)は、江戸幕府より寛永十八年(二六四二)福岡藩、翌十九年(二六四二)佐賀藩に対し命じられ、一年交替⁽⁵⁾で担い、この他にも秋月・唐津・島

原・平戸・大村・福江の各藩が補佐を行った。

長崎港内の西泊・戸町の両御番所、港内外の太田尾・女神・神崎・白崎・高鋒・長刀岩・陰ノ尾の七台場での警備が命じられ、当番の藩は港内(内目)の太田尾・女神・神崎、非番の藩は港外(外目)の白崎・高鋒・長刀岩・陰ノ尾の各台場を警備していた。さらに、佐賀藩は港外にある佐賀藩深堀領の香焼島・伊王島・神ノ島等に佐賀藩独自の台場や陣屋を築き、警備も担っていた。

(2) 白帆注進

異国船入津の情報は、長崎港外に置かれた遠見番より長崎奉行所にもたらされ、奉行より長崎詰め各藩の聞役へ情報が達せられる。佐賀藩・福岡藩はもちろん、長崎警備を補佐していた諸藩にも通達がなされた。これは、「白帆注進」として、長崎から佐賀城へ緊急伝達される。

佐賀城内の諫早家御屋敷⁽⁶⁾への白帆注進は、佐賀藩屋敷⁽⁷⁾定詰の聞役より、諫早蔵屋敷⁽⁸⁾に定詰する長崎警備担当役人にもたらされ、小ヶ倉陣屋⁽⁹⁾への伝達と同時に、飛脚が矢上宿⁽¹⁰⁾にある諫早役屋敷⁽¹¹⁾へと伝達し、東望陣屋⁽¹²⁾に知らせる。ここで、長崎警備の合図として寺院は定められた回数、鐘をつき、近村の諫早家家臣に異国船入津を伝える。さらに飛脚は諫早家御屋敷⁽¹³⁾へと走る。ここでも、矢上同様、定められた寺院が鐘をつく。諫早より佐賀へは海路(有明海航路)と陸路(多良海道)での注進が行われる。海路は時間短縮ではあるが、有明海は干満の差が大きく、一日二便しか出入航が出来ないが、火急である白帆注進は、潮の影響を受けにくい丸木舟の使用例が見られる。しかし、



ISAHAYA MUSEUM OF ART AND HISTORY
10th ANNIVERSARY

開館10周年記念

研究紀要

目次

諫早家の長崎警備

1

諫早市美術・歴史館 主任専門員 大島 大輔

諫早家家中の蘭軍学

11

諫早市美術・歴史館 森 健史

古文書紹介『境家文書』

18

諫早市経済交流部文化振興課専門員 江口 喬裕



諫早市美術・歴史館
開館10周年記念誌
& 研究紀要

令和6年 3月1日

発行所 諫早市美術・歴史館
〒854-0014
長崎県諫早市東小路町2-33
TEL. 0957-24-6611

印刷 株式会社 昭和堂
〒854-0036
長崎県諫早市長野町1007-2
TEL. 0957-22-6000



開館10周年記念

研究紀要

諫早市美術・歴史館